

2022 明海大学
「大学と地域連携の未来」シンポジウム
実施報告書

2022年3月

主催：明海大学 教職課程センター・地域学校教育センター
後援：東京都教育委員会・足立区教育委員会・浦安市教育委員会・
時事通信出版局・(財)きょういく創造育成財団

目次

1. 巻頭言・感謝の辞.....	2
2. 当日のプログラム.....	3
3. 参加状況.....	4
4. 開会式	
4-1. 開会挨拶：明海大学 学長 安井 利一.....	5
4-2. 足立区 区長 挨拶：近藤 やよい.....	6
4-3. 浦安市教育委員会 教育長 挨拶：鈴木 忠吉.....	6
5. 基調講演	
「ナナメの関係の可能性」～大学生ボランティアの全国事例から考える～ 今村 亮（桜美林大学入学部（アドミッションオフィス）高大連携コーディネーター）.....	7
6. 学生発表（グループ A）.....	2 2
7. 学生発表（グループ B）.....	2 6
8. 学生発表（グループ C）.....	3 2
9. 学生発表（グループ D）.....	3 8
10. パネルディスカッション	
大学生ボランティアの関わり方を探る ～ 社会に開かれた教育課程から考える ～.....	4 6
11. 閉会式	
11-1.足立区教育委員会 教育長 挨拶：大山 日出夫.....	6 0
11-2.閉会挨拶：明海大学 副学長 高野 敬三.....	6 0
12. アンケート.....	6 2
◆ その他の事業報告	
13. 日本語指導教員研修（足立区/都立飛鳥高校/都立田柄高校）.....	7 2
14. 2021 年度 英語授業改革セミナー.....	7 4
15. 2021 年度教職課程・地域学校教育センター（METTS）の歩み.....	7 6
16. 2021 年度 METTS NEWSLETTER 第 1 号から第 10 号.....	7 8
17. 2021 年度 METTS 事業参加学生一覧.....	8 1

1. 巻頭言・感謝の辞

明海大学 学長 安井利一

2022年2月5日に開催いたしました今年度の「大学と地域連携の未来」シンポジウムに際して、本学と連携協定を締結している教育機関の関係者、小中高の先生方、地元地域の方々など200余名の方々から参加していただきましたことに、まずは篤く感謝を申し上げます。また、開会式のご挨拶をいただきました東京都足立区長・近藤やよい様、浦安市教育委員会教育長・鈴木忠吉様をはじめ、基調講演を行っていただきました桜美林大学高大連携コーディネーター・今村亮様、閉会式にご挨拶をいただきました足立区教育委員会教育長・大山日出夫様に感謝申し上げます。

さて、本シンポジウムは、本学に地域学校教育センターを2016年に設置して以来開催させていただいており、今回で6回目を迎えました。新型コロナウイルス感染拡大が続いており、今回も前年同様に、当初計画しておりました対面方式を改め、Zoomによるオンラインで実施したところです。

毎年、それぞれの社会情勢に応じてテーマを変えてまいりましたが、今回は、「大学生ボランティアの関わり方を探る ～社会に開かれた教育課程から考える～」をテーマに設定いたしました。そして、今回のシンポジウムからは、各活動毎の分類による分科会方式を改め、本学の学生が行った支援活動をすべてお聞きいただき、その上で、基調講演者、教育機関代表、学校代表と本学学生とがパネリストとなるパネルディスカッションを行い議論を深めることをねらいとしました。パネルディスカッションでは、大学生がどのようにボランティアに係るのか、社会に開かれた教育課程の実現のためには、高等教育機関に在学する学生からどのようにボランティアに係ってほしいのかなどを議論を展開しまして、パネリストの皆さんから貴重なご意見をいただきました。

今後とも、ご参会の皆さま方からいただいたご意見をもとに明海大学は、地域に根差した大学として、教育・研究の成果を元に小中高の教育活動の支援を積極的に行ってまいりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

2022年2月5日

2. 当日のプログラム

1 シンポジウムタイトル：2022 明海大学「大学と地域連携の未来」シンポジウム

2 開催日時、会場：

【開催日時】2022年2月5日（土）12：00～16：45

【会場】Zoomによるオンライン開催（2206大講義室）

3 タイムスケジュール

時間	内容
12：30	【開会式】 司会：奥山 未彩（明海大学外国語学部日本語学科4年） 出地 佑希（明海大学外国語学部中国語学科4年） 【学長挨拶】 ※Zoomによるリモート登壇 安井 利一 【足立区 区長 挨拶】 ※動画による登壇 近藤 やよい 【浦安市教育委員会 教育長 挨拶】 ※Zoomによるリモート登壇 鈴木 忠吉
12：40	【基調講演】 「ナナメの関係の可能性」～大学生ボランティアの全国事例から考える～ 今村 亮 桜美林大学入学部（アドミッションオフィス）高大連携コーディネーター
13：40	休憩
学生発表	
司会：奥山 未彩（明海大学外国語学部日本語学科4年）	
13：50	【グループA】 大学生による日本語指導支援 田中 愛唯（外国語学部日本語学科3年） 【グループB】 留学生による児童・生徒との交流 タン ズェンシイ（ホスピタリティ・ツーリズム学部ホスピタリティ・ツーリズム学科4年） 江川 有紗／高橋 勇氣（外国語学部英米語学科4年） 橋本 ありさ／劉 博文（外国語学部英米語学科3年） 三森 茉穂（外国語学部日本語学科2年） チャン ティ ミ ズエン（外国語学部日本語学科1年）
司会：出地 佑希（明海大学外国語学部中国語学科4年）	
	【グループC】 教育委員会等との連携による児童・生徒支援 佐久間 健祐（外国語学部英米語学科4年） 椎葉 晴斗／高橋 凜／及川 龍之介（外国語学部英米語学科3年） 上原 二葉／佐久間 陸人（外国語学部日本語学科2年）
	【グループD】 大学生による英語学習支援 五十嵐 彩音／鶴沢 美里／庭山 航瑠（外国語学部英米語学科4年） 加藤 天真／佐藤 向日葵／佐保 翼（外国語学部英米語学科3年） 内山 瑞貴／児島 晴香（外国語学部日本語学科2年）
15：25	休憩

時間	内容
15:35	<p>【パネルディスカッション】</p> <p>大学生ボランティアの関わり方を探る～ 社会に開かれた教育課程から考える ～</p> <p>パネリスト</p> <p>今村 亮 (桜美林大学 入学部(アドミッションオフィス) 高大連携コーディネーター)</p> <p>田巻 正義 (足立区教育委員会 学力定着推進課長)</p> <p>佐藤 幸司 (東京都立南葛飾高等学校長)</p> <p>君塚 翔伍 (明海大学外国語学部英米語学科3年)</p> <p>R.P.P.マドゥランガ・クマール (明海大学外国語学部英米語学科3年)</p> <hr/> <p>コーディネーター</p> <p>木内 和夫 (明海大学地域学校教育センター教授)</p> <hr/> <p>司会</p> <p>出地 佑希 (明海大学外国語学部中国語学科4年)</p>
16:35	<p>【閉会式】</p> <p>【足立区教育委員会 教育長 挨拶】 ※Zoomによるリモート登壇</p> <p>大山 日出夫</p> <p>【閉会挨拶】</p> <p>高野 敬三 (明海大学 副学長)</p>

3. 参加状況

明海大学	教員・職員・学生	113
小学校・中学校・高校等関係者	教員	59
教育機関	東京都教育委員会	6
	足立区教育委員会	11
	浦安市教育委員会	8
	他県教育委員会	4
一般		6
参加者合計		207

4. 開会式

4-1. 開会挨拶：明海大学 学長 安井 利一 ※リモート登壇

皆さんこんにちは。ただ今ご紹介をいただきました、明海大学学長の安井でございます。

本日は、「大学と地域連携の未来」シンポジウムに多数ご参加をいただきまして、誠にありがとうございます。

このシンポジウムは、2016年に本学の地域学校教育センターの活動報告会という形でスタートをしたわけですが、今回で6回目を数えることになりました。このシンポジウムに対しまして、後援をいただきました東京都教育委員会、東京都足立区教育委員会、千葉県浦安市教育委員会、時事通信社出版局、そして教育創造育成財団の各団体には、厚く御礼を申し上げたいと思います。

またこのシンポジウムの発表に係る学生の諸君は、それぞれの場所で大変お世話になり、また大きな学習をさせていただいております。大学を代表して、各ご参加いただいている皆様に、厚く御礼を申し上げたいと思います。

このシンポジウムでございますが、タイトルが「大学生ボランティアの関わり方を探る」ということで、「社会に開かれた教育課程から考える」というサブタイトルが付いております。大学といたしまして、このシンポジウムを通じ、大学生、学生のボランティアの関わり方について、今後の在り方を含めて考察する場といたしたいという風に思っております。またご多忙のところ、基調講演者として、大学ボランティア、あるいは10代の若者の状況に詳しい、桜美林大学の今村 亮先生をお招きしております。

そしてこの後、4グループでのグループプレゼンテーションにおきましては、本学の学生、教職員が実施した、小学校、中学校、高等学校における支援について、学生の発表を核にしながら紹介をさせていただきたいと思っております。



そして最後に、パネルディスカッションにおきましては、基調講演者の今村先生をはじめ、教育連携をしております東京都足立区教育委員会 学力定着推進課の田巻課長、そして東京都立南葛飾高等学校の佐藤校長先生にもご登壇をいただくことになっております。お忙しい中、ご参加いただいたことを改めて御礼を申し上げたいと思います。

また本日、ご挨拶として、連携を取っております東京都足立区長の近藤 やよい様、そして千葉県浦安市教育委員会 教育長の鈴木 忠吉様にもご挨拶をいただくことになっておりますし、また閉会式におきましては、足立区教育委員会 教育長の大山 日出夫様にもご挨拶をいただくという風に側聞しているところでございます。皆様お忙しいところご協力をありがとうございます。

このシンポジウムから、新たな時代での小学校、中学校、高等学校、そして大学教育の発展に寄与する、その方法論というものをしっかりと学び、そして地域連携の未来というものを広げてくれる事に大きな期待を持っております。どうぞ今日は宜しく願いを申し上げまして、学長としてのご挨拶とさせていただきます。

ありがとうございました。

4-2. 足立区 区長 挨拶：近藤 やよい ※録画登壇

足立区長の近藤やよいです。前回に引き続き、今回もオンラインとなりましたけれども、是非実りのある議論が展開されますことをご期待申し上げます。

明海大学様と足立区との連携事業につきましても、大学の皆様方が本当に考慮をいただきまして、様々な工夫を通じて実を挙げていただいておりますことを心から感謝を申し上げます。

子供達にとっては、先生ではない、大人ではない、第3の存在としての大学生の関わりが、子供達の自

己肯定感を育てる為に、大いに成果を挙げていると足立区でも考えております。

これからも是非、皆様方と永く win-win の関係が続きますように、宜しくお願い申し上げます。



4-3. 浦安市教育委員会 教育長 挨拶：鈴木 忠吉 ※リモート登壇

皆さんこんにちは。ただ今ご紹介頂きました浦安市教育委員会 教育長の鈴木 忠吉です。本日は 2022 明海大学「大学と地域連携の未来」シンポジウムの開催、誠にありがとうございます。

はじめに、明海大学におかれましては日頃より本市教育行政の推進にあたり、多大なるご理解ご協力を賜り、この場をお借りして厚く御礼を申し上げます。ありがとうございます。

本市と明海大学は平成 29 年 3 月に、教育委員会と明海大学との連携に関する協定を締結しております。

締結以前から、明海大学の学生によるボランティア活動、あるいは地域国際交流、インターンシップの受け入れなど行っているところですが、この協定の締結により、本市と明海大学の連携が充実されてきました。今後もなお一層促進させていくことを願っております。なお具体的な取組として、本日グループの C と D でも発表があるようではありますが、教員の英語指導力向上の為に研修や、子供達の学習支援を行う「青少年自立支援未来塾」、あるいは「ドラフトゼミ」、また「うらやすこどもクエスト」などについても、子供達の学びの充実に繋がっているところです。

現在、新型コロナウイルス感染症の新たなオミクロン株の出現で、ほぼ全国でまん延防止等重点措置区

域となっており、学校や、幼稚園、子ども園、保育園の休業が拡大している中、昨年度に引き続き、このシンポジウムを通じて、学校と地域の連携の在り方を変えていくことは、大変大切なことだという風に認識しております。

現在学校教育でも、新学習指導要領に「社会に開かれた教育課程の実現」が叫ばれています。子供達の生きる力を育むためには、これまで以上に学校、地域、家庭が連携していく事が重要であると思っております。本市では明海大学をはじめ、地域の方々の様々な力をお借りしながら、新しい時代を切り拓き、しなやかに生きる子供達を育てていきたいと考えております。

結びに、明海大学の益々の発展をご祈念いたしますとともに、本市教育行政へのなお一層のご理解、お力添えを賜りますようお願い申し上げます。また本日のこのシンポジウムが、実効あるものとなりますよう、今後とも明海大学と浦安市教育委員会の相互協力をお願い申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。本日はおめでとうございます。



5. 基調講演

◆「ナナメの関係の可能性」～大学生ボランティアの全国事例から考える～

今村 亮（桜美林大学入学部（アドミッションオフィス）高大連携コーディネーター）

ー はじめに

皆さん、こんにちは。マスクを取って失礼いたします。ご紹介いただきました、桜美林大学入学部で高大連携のコーディネーターをしております、今村亮と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。拍手ありがとうございます。

基調講演ということで、どんな話をしようかなと考えながら参ったんですけども、私、まず、こちら明海大学のキャンパスに到着して非常に感動しております。今、立派な司会をお務めいただいたのも、明海大学の学生さんということです。

しかも、今、こちら、キャンパスには教室にこれからご発表いただく学生さんが控えておられまして、皆さんそれぞれ非常にカッコよく見えまして、こういった方々が大学生ボランティアとして地域、そして学校教育や社会教育の現場で活躍しているんだなと思うと、非常に私も勇気が湧くところでございます。私も大所高所からものを申し上げるということではなく、大昔、大学生だった頃に一人の、大学生ボランティアだった一人として、皆さんと一緒に考える機会にしたいと思っております。

おそらく今日のシンポジウムの本番は私の持ち時間よりもこのあとに続く明海大学の皆さんからの現場の事例発表かと思っておりますので、それによいトスを上げる前座のようなつもりでこの場を盛り上げていけたらと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

加えて、本日、Zoomでご参加の皆様にも申し上げます。今、私、手元の端末で、Zoomの方にも入っております。皆様にも1つチャットをお送りしました。司会の学生さんからもございました通り、この回は私が一方的に1時間話し倒すというよりは、皆様からチャットでコメントを頂いたりしながら進行したいなと思っております。



早速なんですけれども、一つ、皆さんにご質問を投げさせていただきました。皆さん今、どちらの地域からご参加いただいているか、もしよろしかったらZoomのチャットでご返信いただくことができますでしょうか。

お、東京都内。ありがとうございます。こういう時、一番最初に返してくださる方がいると、講師、大変ホッといたします。あ、浦安、地元。阿佐ヶ谷、私の家の近くですね。ありがとうございます。阿佐ヶ谷、浦安などなど続いていますね。遠い地域からご参加の方もおられますか？あ、新潟おられましたよ。いいですね。私はオンラインでの開催ということを決して悲観的にとらえておりませんで、こうやって全国から皆様にご参加いただけるというのも、こうしたオンラインの環境を生かした形だなと思ひまして、このシンポジウムの可能性を感じているところです。ありがとうございます。あ、中央線多いですね。阿佐ヶ谷、西荻窪、続いています。私も中央線沿いに住んでおります。ありがとうございます。

はい、こんな感じでチャットでもやり取りをしながら進めていきたいと思っておりますので、ぜひ、この1時間ご参加いただきながら、お付き合いいただければ幸いです。

ー 学生時代のボランティア活動の経験

それではスライドの方お願いいたします。映って

おりますか、ありがとうございます。本日は「ナナメの関係の可能性」ということで、大学生ボランティアの全国事例を基にご紹介しながら、申し上げていきたいと思っております。「ナナメの関係」、聞きなれない言葉かもしれませんが、ふむふむそういうことね、とこの1時間を通して思っただけであればありがたいと思っております。基調講演、お話し申し上げますのは、教育コーディネーターを名乗りながら、特に10代への教育現場でお仕事させていただいておる今村でございます。

司会の方々のご紹介にあった通り、熊本が地元なんですけど、大学進学タイミングで東京に出てまいりまして、その時には、今日キャンパスにお集まりの明海大学の皆さんのように、まさか自分が教育の仕事をするとはつゆ知らず、大学生活を送っていたんですが、大学3年生の時に、自分の人生を変えるNPOとの出会いがありまして、そこで大学生ボランティアとしての経験を積んだことが、今の自分の人生を大きく位置付けることになりました。

本日、大学生の皆さんもたくさん参加ということで、恥を忍んで当時の写真を探したんですけども、これ、大学4年生の時の私で、当時は廃校になった中学校を、NPO運営のための拠点として港区が貸し出してくださってまして、そこに私はたくさんの先輩達や後輩達と一緒に大学の授業が終わったら集まって、地域、そして学校現場の子供達にどんなボランティアができるのかなということを話しながら過ごしました。もう、時には自分も学生ですから、自分のテストは大変だし、アルバイトしないとお金は大変だし、かといってNPOのボランティアの仕事も大変で、アワアワとしていたこともあったんですけども、やっぱり当時、思いっきり一生懸命頑張ったってことは非常に重要な自分の財産になっているなと思います。

ここで、会場の皆さん、そしてオンラインでご参加の皆さんにもちょっと一つご質問してみたいんですけども、皆さんは、ボランティアの経験、お持ちでしょうか。これを皆さんにご確認させて



いただきたいと思ひまして、今、私の画面に皆さんの回答が表示されるようになっております。これからチャットで皆さんに1つURLを送らせていただきます。はい。Zoomの皆さん、これ、届いていますでしょうか。はい、ありがとうございます。今、送ったURLにZoomご参加の皆さん、ちょっとご回答いただいてもいいでしょうか。

Zoomの皆さんに回答、あ、いいですね、「1〜2回だけある」「今まさに熱心に取り組んでいる」、どんどん入ってきますね。「ない」って方、正直に答えてくださってありがとうございます。今まさに熱心に取り組んでおられる方も結構おられますね。会場の学生の皆さんにもちょっとお聞きしたいと思うんですけども、私が申し上げるところで、拍手をしてもらえたらうれしいと思います。

では、ちょっと熱心な方からいくんですけど、今、まさにボランティア活動に熱心に取り組んでいる方、拍手をお願いします。ありがとうございます。マイクが拾うように強めの拍手をくださった皆さん、素敵ですよ。続きまして、機会があれば参加しているという人、拍手をお願いします。2回拍手している方、ありがとうございます。いいですね。打ち合わせ通り2回拍手していただいて、会場を盛り上げてくださっています。素敵な学生さんですね。続きまして、1回、2回ぐらいはあるかなという方、拍手をお願いします。ありがとうございます。意外と明海大学、先生も1〜2回というところで拍手された先生もおられますね。ということは、ボランティア活動においては、先生より学生の皆さんの方が上だということが今1つわかりましたね。じゃあ、ちょっと勇気をもって教えてください。実はボランティア活動したことありません、って方、拍手してもらえま

すか。しにくい。いないということで、進んでみたいと思います。ありがとうございます。やっぱりね、ボランティア活動、すごく意欲的な方がたくさんおられると知って、うれしく思いました。

もう1問、質問したいと思います。ボランティア活動した方ならば、その体験で何か感じたこと、持ち帰ったことがあったと思うんです。それを皆さんには、続いて、皆さんがボランティアの経験から何を学んだか。ちょっと10文字以内のキーワードで打ち込んでいただきたいと思います。

皆様、Zoomでご参加の皆様、同じURLにちょっとアクセスをしてみてください。そうしたら今度はこの質問が出ているはずかと思えます。1人目がどなたがどんなことを打ち込んでくださるかドキドキする時間です。

会場の皆さんにこれ、「双方向の交流」、頂きました。いいですね。こちらが働きかけるだけではなく、接する皆さんからも学びがあるという意味合いでしょうか。いいですね、「助け合う」そして「思いやる心」、「win-win」いいですね。冒頭のご挨拶にもありましたように、win-win、どちらかが支援して、どちらかが支援されるという関係よりも、このwin-winのバランスがすごく重要です。いいですね。「利他的な行動のすばらしさ」、いいですね。素敵な言葉です。「優しさ」、いいですね。「相手を思いやる心」、そして「支えあっていること」、いいですね。いろいろできております。

こんな風に今、オンラインの皆さんからもどんどん出してくださっていますが、「ああ、ボランティアというものは、決して誰かのために犠牲的にやるものではなく、届ける側も学び、成長していくものだよね」ということを、今日ご参加の皆さん

がお感じの通り、このシンポジウムに共有すると頃から、この議論をスタートしていけたらと思います。「人間関係」、いいですね。はい、ありがとうございます。こういうwin-winの関係というものが、どんな意味を持つのか、そしてどんな価値を生み得るのかということをご紹介していきたいと思えます。

ー 10代の子供達の自己肯定感の低さ

それでは私の方の話題の方に入らせていただきたいと思います。ありがとうございます。こんな感じでどんどんチャットを使ってやっていけたらとおもいますので、引き続きご協力ください。

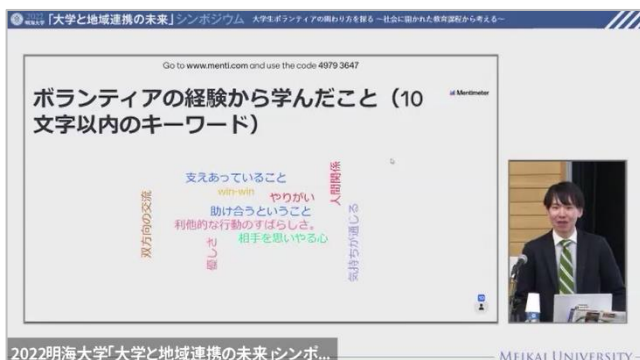
皆さん、積極的にご参加いただいて、非常にうれしく思えます。

それでは、こうしたボランティア活動が諸々、色々な形で事例がある中で、私が特に問題だと思って学生時代から向き合っていることをご紹介します。それは、自己肯定感の問題です。

ある調査によると、55.1%の高校生は、自分には価値がないと捉え、58.3%の高校生が、自分には得意なことがないと答え、64.8%の高校生が自分が関わっても社会は変わらない、そういうふうに答えているのだと言います。特に私は、10代の子供達を対象に、もろもろの活動をやってきておりますので、こうした高校生の調査、非常に興味をもって、また、どうしたらいいんだろうと焦りながら日々向き合っています。

今日は、後ほどのシンポジウムでは、高校の先生もご登壇されるということなので、こうした現状にも積極的に意見交換させていただきたいと思っております。こうした日本の10代の状況を確認するところから、お話を始めさせていただきます。

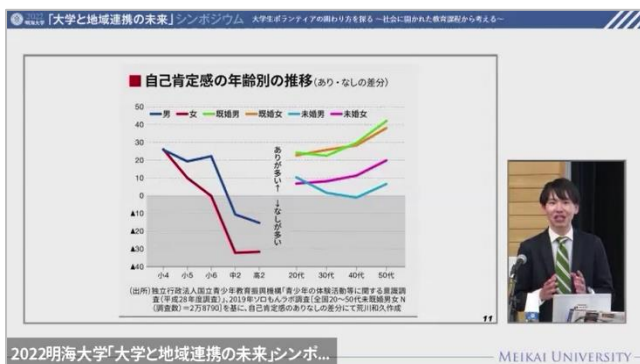
10代の自己肯定感の低さ、もうちょっと詳しく見ると、国際比較の中では、やはりアメリカ、中国、韓国などの国と比較しても、日本がことさら高いという状況が見えていると言います。



これ、さらに国を広げて見ると、先進国の方に自己肯定感の低さが目立つという大きな傾向はあるんですが、先進国を抜き出した時にも、日本の顕著さが目立つということです。ただ、これを私は他人の社会問題というつもりはなくて、どうですかね、会場の大学生の皆さんも、自分が高校生の時、自分はもう自信満々、進路も決まっているし、勉強も問題ないし、このまま明るい未来が開けている、そういうふうには思っていた方ばかりじゃないんじゃないかと思うんです。

私自身も高校生の時、熊本で学んでいる頃は、もう全然勉強はできないし、部活動は、どんなに頑張っても、レギュラーが取れないし、先輩に怒られてばかりで、「いや、自分なんて」という気持ちがやっぱりありました。

こうした世代的、年代的な特徴もどうやらあるようでして、この次の比較も見てみましょうか。



これは、学年別、年代別の、自己肯定感比較ですね。画面左側、赤と青の折れ線が子供達、学年なんですけど、どんどん学年が上がるにしたがって、自己肯定感が下がっていく様子が見えます。

特にやはり中学2年生から高校2年生の辺り、この辺りが、自分への自信のなさというものを非常に顕著に感じやすいということで、これは何年代生まれというものを問わない、青年期という、自分のアイデンティティや生き方を一つ決めていく、この年代に特有のものでもあると言えるかと思えます。そして、こうした、自己肯定感の問題が、日本全国に広くある、かつ、10代に起こりやすい青年期特有の問題であると同時に、そこに追い打ちをかけるような「きっかけ格差」もございます。

一 自己肯定感の格差

これも一つ一つ見ていきたいのですが、例えば、自然災害、東日本大震災を例えばはじめとして、その前に阪神・淡路大震災や中越の震災などもありましたが、日本列島は非常に災害に見舞われやすい地域でして、もしかしたら今、この瞬間、このシンポジウムの最中にこの会場が震災に見舞われないとも言い切れない状況にあります。こうした自然災害に見舞われるということが、ある日突然、格差を生むということが、例えばあったとします。会場の皆さんの中にも、そういう経験をお持ちの方、いますでしょうか。

実は私は熊本地震で自分の母の生まれ育った家を全壊で失っている間接的な被災体験をしています。この頃の熊本、僕の地元はもう、なかなか大変な状況になっていて、なんとか残っている交通手段で駆けつけたら、道にせり出して倒れている建物がたくさんあったりしまして、こんな時、教育現場もどうなっているかと言えば、やはり、学校も被災をして、教育活動がままならない状態で、今、このコロナ禍と似たような状況で、被災後の学校現場も臨時休校になったりするんですね。

そういう中で、子供達がボランティア活動に取り組む、あるいは取り組まざるを得ない、こういった状況があったりする、これも一つのきっかけ格差の条件です。

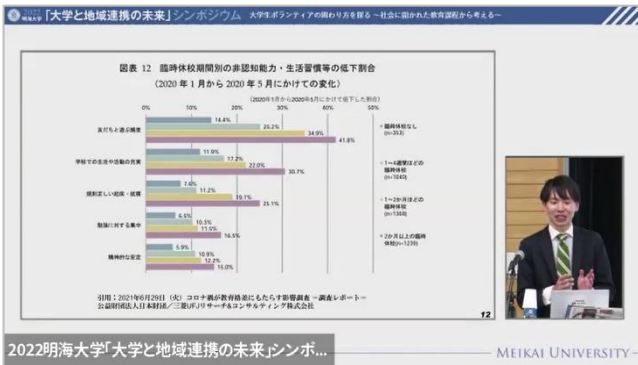
それから2つ目、地域格差ですね。こちら明海大学のキャンパスはすごく東京ディズニーランドの近くで、日本全国からうらやましがられるような地域ですけども、私の生まれ育った熊本みたいな所は、やはりこんな恵まれた都会の環境ではなくて、どうしても都市と地方の格差みたいなものはどんどんどんどん広がっていると言われていきます。地域の格差は情報の格差、学力の格差、経済の格差、いろいろな形で日本全国を襲っているとも言えます。

では、都会に課題がないかという、そんなことはありませんで、本日、来賓としてご挨拶をされた足立区長さんが、非常に先進的に推進されてい

るように、都市部にも子供の貧困の問題はあります。道を1本渡ったら、もう何千万円、何億円というタワーマンションがあるような地域でも、信号1つ渡っただけで、貧困に苦しむ地域があるようなことも都市部では起こってたりします。こうした格差も見過ごすことはできません。そこに輪をかけるように、感染症の時代が始まりました。

本日オンライン開催をしているということは、まさに一つのその証左ではありますが、学校の休校ですとか、いろいろな機会が失われるということが、広がっています。一つ、調査を持ってきたんですけれども、ちょっと2つあるんで、ごめんなさい。ちょっと戻ってしまいますが、これは、コロナ後いったい子供達にどんな変化が表れたのかというデータです。

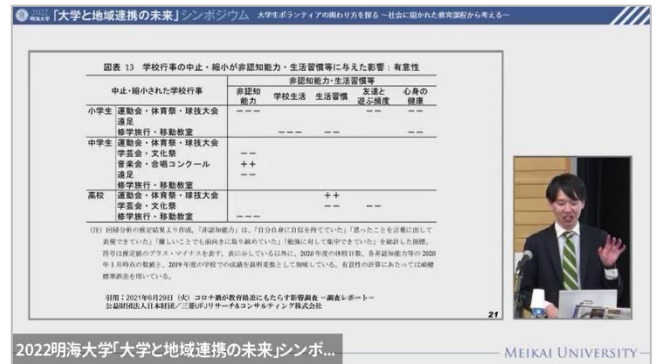
グラフが青、水色、黄色、赤とあるんですが、このグラフが高くなっている順にコロナ休校の度合いがひどい順になります。コロナ休校等が広がれば広がるほど、友達と遊ぶ頻度が下がり、学校での生活や活動の充実が下がり、規則正しい生活や起床・就寝のリズムが崩れ、ということが見えております。



こうしたコロナ前後の比較、今、コロナ期に教育環境にある子供達が今までよりさらに難しい状況にあるといえます。これが子供達にどんな影響を与えているかというデータもあるんですけれども、これは、左側に、中止になった行事を並べております。

運動会、体育祭、遠足、修学旅行などなどあるんですが、例えば、高校の運動会・体育祭が中止されることによって、生活習慣の欄に2つバツテン

がついているんですけれども、生活習慣が非常に崩れるという相関性が見られているというデータです。ですので、こうしたコロナ後の子供達は、いろいろな体験の機会を失っていることで、自分達の成長する機会を失われ、ここにあるような生活習慣、心身の健康、非認知能力といったものの発育が十分になされないということが見えてきております。こちらは日本財団の研究を引用させていただいている形になります。



一 教育は誰が担うべきなのか ～ナナメの関係の可能性～

そんな中で、私が今日、このシンポジウムで皆さんと一緒に考えたいことは、教育は誰が担うべきなのかということです。教育を家や学校に丸投げするという事は、もはや限界があって、これをどうやってみんなで取り組む、そんな社会にしていけるかということが極めて重要であり、その可能性の一つが、今日、私の目の前、この明海大学のキャンパスに集まっておられる大学生の皆さんがなされている学生ボランティア、これがその一つの希望なのではないかと感じている次第です。

それでは、ここで今日の本題になります、「ナナメの関係」というものを一つご紹介していきたいと思えます。それでは、ナナメの関係の可能性を今日は考えようということで、投げかけさせていただいているんですが、このナナメの関係ってどういうことっていうのをご説明します。私、これをわかりやすく説明するためのスライドを持ってきているんですけれども、こんなに大学生の方が多いと思わなくて、もしかしたら大学生の方には、用語が専門用語過ぎる可能性があるんですけれども、ちょっとわからなかったらごめんなさい。

大学生の皆さん、聞くので、僕がこれから出す図がわかるかわからないか、教えてください。

まず、ナナメの関係を、ご説明するために、とある一つのモデルをちょっと作ってきたのですが、まず、子供中心にこれを考える時にこれはさすがに誰でもわかるだろうということで、こちらの方、これ、この人、どなたかわかる人、特に大学生の皆さん、拍手してもらっていいですか。良かった。ホッとしましたよ。これは国民的アニメ「サザエさん」という作品があるんですけども、それに出てくる小学生の長男、磯野カツオ君です。カツオ君まではわかるということでちょっとホットしたので、カツオ君を一つ中心に捉えながら、ナナメの関係をご紹介していきます。カツオ君を取り巻く環境、皆さんちょっとイメージしてください。ふむふむ、カツオ君ね。カツオ君、世界、思い浮かべてくださいね。

カツオ君の縦の関係に誰がいるかということ、こういう人達があります。この2人、わかる人拍手、あ、良かった良かった、ありがとうございます。磯野波平さん、これは国民的昭和の親父ですね。そしてもう一人が、学校の先生なんですけれども、よくよく見ると、髪型もツーブロックで、結構令和チックなんですけど、昭和の学校の先生です。この波平さんと学校の先生が普段カツオ君とどんなコミュニケーションをしているかということ、やっぱり、作品を見てみると「おい、カツオ、宿題はやったのか」とか、「カツオ、母さんのお手伝いをしなさい」みたいな、指示、指導の関係がやっぱり強いんですよ。で、カツオ君は、大体宿題をやっていないもんだから「おい、磯野、お前は廊下に立ってる」とか言われて、なんかバケツをなぜか持たされながら、廊下に立つみたいなシーンがこの国民的アニメ、「サザエさん」の中では何度も何度も繰り返されているんです。

これも、僕も小学生の父親でして、今となっては、この波平さんや先生の気持ちがわかるんですよ。カツオ君、結構ちゃらんぼらん男なんです。僕ん家の子供も男の子なので、同じようなものなんですけれども、ちゃらんぼらん男の子を見ると、

こいつがしっかり社会で活躍するには厳しく指導しなければいけないと思って、ちゃんと期待をかけてこういうことを学ばんだよ、こんな大人になるんだよ、これを頑張るんだよ、というふうに、やっぱり期待をかけちゃうんですよ。なので、どうしても、期待をかけながら、指示、指導の関係になっちゃうのが、こうした縦の関係だなあとと言えるでしょう。

一方、この縦の関係に対して、横の関係、探してみました、この方々わかる人拍手してください。結構わかりますね。明海大学の皆さんは、結構「サザエさん」を見ているんですかね。これはカツオ君のクラスの友達で、このツーブロックのメガネは中島君です。このミニスカートは花沢さんです。やたらツーブロックの人が今見ると多いですけど、ではカツオ君のクラスメートとの普段の関係はどうなっているかということ、「おい、中島、俺は将来、日本の子供達を支える先生になりたいから、大学になったらボランティアとかしたいんだよね」みたいな話をしているかということ、そういうシーンってほぼない。皆無なんですよ。

普段、じゃあ、カツオ君は中島君と何をやっているかということ、「おい、磯野、野球行こうぜ」って誘われて、「おう、行こう行こう」と言って、空き地に行って野球をするということを毎日毎日毎日毎日繰り返すばかりで、磯野、お前は本当はどうしたいんだ？将来、何になりたい？日本の未来、どう考えている？みたいなことは、やっぱり出てこないわけなんです。

これも、まあわかるというか、皆さんも思い返していただきたいんですけども、今日はこうやって大学主催のシンポジウムで、皆さん発表されるわけですよ。こんな大学に認められた素晴らしい大学生だということを思い出してください、小学校、中学校の時の同級生に話すと、ちょっと恥ずかしいですよ。「お前、ボランティアとかやってんの」「教育とか、そんなやってんの」とか、恥ずかしさあるじゃないですか。やっぱり、この学校の教室空間ってものは、ちょっと真面目な話とか、自分が頑張るみたいなことを何となく「あ、

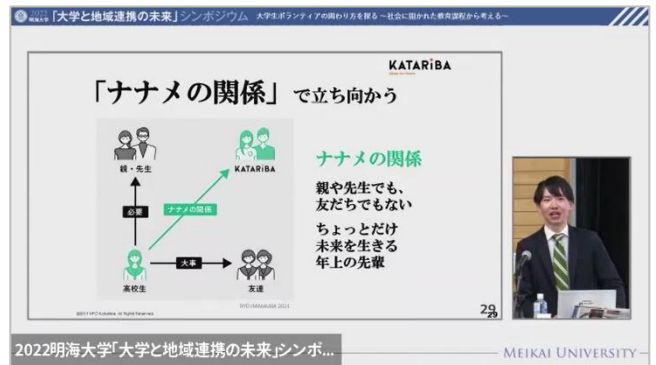
そうなの、磯野お前、意識高いね」みたいに、なんかちょっと、引かれてしまうみたいな横の空気があったりするわけです。

だから、意外と横の関係っていうのも、自分の本音とか、未来に向けた前向きなことというのは意外と言いにくかったりするわけです。

そんなカツオ君は、閉塞した縦横の関係の中で、日夜、終わらない日常を過ごしているだけなのかというと、そうではなくて、私、探しました。カツオ君が本音で自分の弱音を伝えたり、自分の未来の話をしたりする相手は誰か。探しました。この人。わかる人、拍手してもらっていいですか。あ、すごい、手前の先生方から沢山拍手を頂きましたが、後ろの学生さん、結構ご存じでいらっしやって、うれしいです。これはサザエさん界でもマイナーながらに結構人気を博している方なんですけれども、名前を伊佐坂浮江さんと言います。

そう、苗字で気づいた人もいるかもしれません。伊佐坂、これは磯野家の裏に住んでいる、小説家の先生の家なんです。伊佐坂先生って言ってね。波平さんと仲良かったりする爺ちゃんなんですけれども。伊佐坂先生ん家の娘さんは意外と若くて、今、中学生なんです。で、浮江さんが、お隣の家に住んでいると、カツオ君は、ちょっとテストが悪くて落ち込んだ時、先生に怒られて落ち込んだ時、「浮江さん」って言って、隣の家に行って、「あらあらどうしたの、カツオ君」「今日学校でね…」みたいな話をしているシーンが描かれているんですよ。

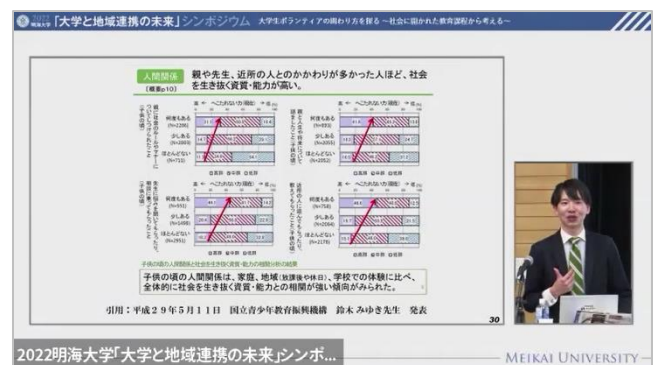
これってすごくスペシャルなことで、縦の関係にもない、横の関係にもない、ナナメの関係だからこそできる、本音の関係がやっぱりここにあるなと思っていて、私はこれを、「ナナメの関係」と呼んでいいんじゃないかと思い、特に NPO カタリバでは、この用語を大事に使いながら、そして、今日のこのシンポジウムにおいても、明海大学の大学生ボランティアの皆さんもこのナナメの関係と捉えながら、この議論を進めていきたいなと思っております。



ナナメの関係とは、親や先生でも、また友達でもない、ちょうどだけ未来を生きる年上の先輩。

このナナメの関係というのが、すごくこれからの教育にとって、重要なんじゃないかと思うんです。

一つ、これを裏付けるデータを持ってきました。これは、国立青少年教育振興機構という日本の地域連携とか、社会教育を司る国立の機関になります。皆さんオリンピックセンター、行ったことありますか。東京の。オリンピックセンターを運営しているあそこの組織が、すごく充実した青少年の調査をやっているの、教育に関わる学生の皆さん、ぜひ見てみていただきたいんですけども、見てみると、親や先生、そして近所の人との関わりが多かった人ほど、社会を生き抜く資質・能力が高いという結果が出ています。



ただ、どんな親に生まれるかっていうのは、今、「親ガチャ」なんて言葉が言われたりします。ガチャガチャを回して、何が出てくるかわからないみたいに、自分がどんな親から生まれてくるかわからないわけですね。ですが、それを補うように、地域、近所の関わり方というのが充実していれば、その親ガチャ的な要素を埋め合わせていけるというようなデータだったりします。

なので、私が今日、このシンポジウムで皆さんと

語ってみたいのは、こうしたナナメの関係を昭和のサザエさんの世界でつくるといふことと、コロナ以降の令和の今、つくるといふことは、やっぱりアプローチや意味合いに大きな違いがありますね。これをどのようにつくっていったらいいだろう、ということをお皆さんと一緒に考えていきたいと思ひます。

私も答えを持っているわけじゃなくって、現場でもがき、悪戦苦闘している一人ですので、私も学生の皆さんからぜひヒントを頂きたいということなんです。

ここまでで、私の話の前半になりました。皆さんに、ちょっとここで質問をしてみたいんですけども、皆さんには10代の頃「ナナメの関係」と思える人はいましたでしょうか。そして、その人はどんな関係の方だったでしょうか。よろしかったらオンラインご参加の皆さん、チャットでお教えいただければと思ひます。それでは2〜3分取りますので願ひします。

1人目、どなたか打ってくださったら、私は非常にありがたいんですけど、ちょっと質問文、バイト先の店長、なるほどですね。共通の趣味で知り合った方、気になりますね。ちなみに私の子供、小学2年生で、地元熊本の私が東京で子育てするって不思議な感覚なんですけれども、デュエル・マスターズというカードゲームがありまして、知っている人、拍手してもらっていいですか。あ、うれしい、ありがとうございます。子供めっちゃデュエマ好きで僕も子供と一緒に始めたんですけども、近所にカード屋さんがあるって、そこでなんかデュエマの大会に出たり、強いお兄さん、お兄さんというかほぼオタクなんですけれども、オタクのお兄さん達に教えてもらっているんですけども、それめっちゃいいナナメの関係です。

共通の趣味、大事ですよ。習い事の先生、いいですね。音楽とかね、スポーツとかいろいろあるうかと思ひます。近所や部活の先輩。サッカーのコーチ、いいですね。やっぱりこういう、この人が今でも思い出せるな、という10代のナナメの関係の人がいるかどうかというのは、その後の

成長や生育にすごく大きな影響があるんじゃないかと思ひます。

社会関係資本なんて言ったりしますね。自分が持っている憧れの関係性、憧れていなくても何かの時につながる関係性というのが、リアルでもいいし、オンラインでもいいし、サブ垢でも何でもいいし、つながるといふことがすごく重要だろうなと感じます。高校で留年した時の元の学生の旧同級生。なんか複雑なやつ出てきましたね。あ、高校で、なるほど、これはぜひ詳しく配信が終わってから伺えたらと思ひます。残念ながら出会えなかったという方、わかります。そういう方を取り残さないようにこのシンポジウムで機運をつかっていけたらと思ひます。

皆さん、チャットのご返信、ご協力ありがとうございます。それではここから続きまして、こうした前提を踏まえて、どんな事例、私に関わってきたかということをお紹介していきたいと思ひます。

まず、私のスタンスなんですけれども、申し上げているように、私は特に10代との活動に注力しています。なので、今日、後半では小学生を対象に活動されている方もおられるということで、小学校なんて私、すごく専門外なので、ぜひ学びたいところです。

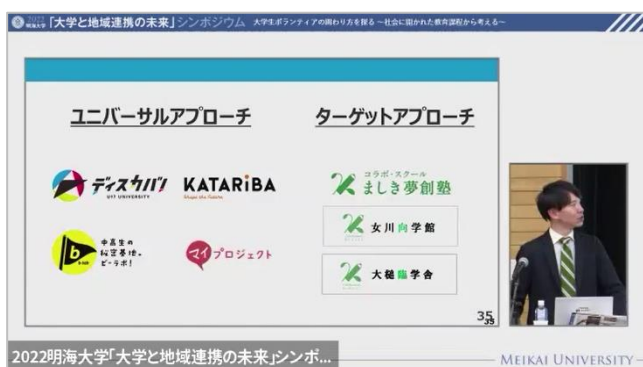
そして、2つ目のポイントは、みんなで取り組むということ。これも最初のキーワードで出てきたことと一致しているんですけども、こちらが支援するという一方的なものではなくて、一緒にやる、みんなでやるということをおすごく大事にしている、支援する側、される側ということが切り離されない活動づくりということが大事にしたいと思ひます。

また、こういう場って、意識の高い人しか参加しにくいところはあったりするんですよ。でも、できるだけ誰でも参加できるようにドアをオープンにしておくこと、そして、ドアをオープンにしていることだけでも届かないので、学校としっかり連携しながら、みんなに届くように工夫をしているという、この3つがこれから紹介する全ての事例に共通する私のスタンスになります。

一 事例紹介

～ユニバーサルアプローチと

ターゲットアプローチ～



それでは事例を見ていきたいと思うのですが、この事例は2つに分類されます。最近では、先ほどご紹介した国立青少年教育振興機構が「ユニバーサルアプローチ」と「ターゲットアプローチ」という言葉を使い、活動の分類をするようになりました。「ユースワーク」という言葉で全体を大きくくりながら、その種類を分類するのですが、これ、良かったら学生の皆さんも参考にしてください。上の、ユニバーサルアプローチというのは、どんな子供にでも広く届ける。

そして、誰でも参加できるような取組になります。一方で下のターゲットアプローチというのは、より困難な層、マイノリティに届けるという種類になります。今日、後半の話題でも、どちらもあるなと思ったので、この区分はちょっと大事にしながら、進めたいんですけども、私の実践事例の中では、このようになっています。

今日、全部で5つ紹介していけたらと思うんですけども、ユニバーサルアプローチの方では今やっている高大連携のディスカバ!、また、東京都の教育委員会ですと一緒やらせていただいていた出張授業カタリ場 (KATARiBA)、そして文京区で運営している中高生の秘密基地 b-lab (ビーラボ)、そして高校生の自発的な活動を応援するマイプロジェクト、この4つは誰でも参加できる、広く届ける、こういう種類のやり方になります。

一方で、今日、ターゲットアプローチとしてご紹介したいのは、コラボ・スクールというものです。これがどんなターゲットに向けられたものなのか

も併せてご紹介します。それでは、紹介してまいります。

まず一つ目の事例が、出張授業カタリ場というものです。このように体育館に大学生ボランティアがお邪魔をして、高校生と対話の時間を120分間持つというものです。

私が大学3年生の時に、初めて形づくったボランティア活動がまさにこれでした。それは自分自身も、高校の時、自分がどんな進路に進めばいいかということが全くわからなかったし、誰に相談したらいいかもわからない、ナナメの関係の相手を持たない高校生でした。そんな方にでも何かヒントを届けられないかという取組です。

大学生が自分の進路選択や、自分が高校時代に悩んだことを伝え、伝えることによって、心が動いた高校生達が、ぽつぽつとしゃべり始めるんですね。それを丁寧に聞いていって、ワークシートに形づくってあげて「こういうこと悩んでいたんだね」と言うと、ちょっとすっきりします。そして最後に、その日その場で出逢った大学生と「この後こうしよう」って約束をして解散するということです。

今日、実はこの明海大学のシンポジウムにお招きいただいたのも、この活動が一つご縁になっていて、もう15年も前のことなんですけれども、この大学生ボランティアの活動をずっと草の根で一部の高校の先生とだけやっていたものを、東京都の教育委員会の当時の先生方が「これは素晴らしい大学生の取組だ」ということを見出しちゃって、東京都との連携事業として一気に都内、そしてこの千葉県、そして全国に広がったという形になりました。

今、やはりこのコロナ禍なので、どう見ても密なんですけれども、こういう活動自体、この同じような形式はままならないんですけども、このように、高校生と大学生が対話を通して交流するという機会は、東京都教育委員会の大きな推進もあって、2000年代～2010年代をかけて、かなり全国に広がったなと思っている事例です。

私がこういうことをやっている間に、日本列島を襲ったのが東日本大震災でした。私あの時は、ちょうど、大学のキャンパスにいて、明日から春休みのプログラムとして高校生を招待する大きなイベントを計画していたんですけども、その時、日本列島を大きな地震が襲いました。皆さんも、それぞれ大変な目に遭われたと思います。東京や千葉でさえ、非常に大きな揺れを経験しました。輪番の停電や交通機関のマヒなど、私達自身の日常生活にも大きな影響を受けました。

ですが、それ以上に大きな影響を受けていたのは、被災3県と言われる、宮城県、岩手県、福島県です。私達、東京で対話の出張授業をやっていたボランティア団体だったのですが、まずは被災地に行かなくてはということで、東北に飛び出して、東京で集めた募金で預かったお金を持って、これで何かボランティア活動をしようということで、次の活動を始めました。

それが私にとってのターゲットアプローチになるんですけども、被災地の放課後学校をつくりました。震災後って家が流されていますので、日常生活もままなりません、同じように学校もダメージを受けていますので、なかなかすぐに学校再開、ままならないわけですね。そんな時に子供達を集めて預かって、未来への学びをつくるための居場所にしようという取組です。

制服も何もかも流されたような子供達を神社の隣の公民館に集めて居場所にしながら、教科書も何も全て流されていましたので、勉強、国語、算数、本当に基礎的なところしかできないんですけども、考え直し、その中で、私も何か地域のためにやりたいと言い出した高校生と一緒に、地域のボ

ランティアのようなことを進めたりするような場所でした。



これは今、宮城県の女川町、岩手県の大槌町、そして福島県の広野町に3つあるんですけども、今も、10年たった今でもまだまだ、子供達には震災のダメージが遅れてやってくるような傾向もありまして、10年たってもこの活動は続けています。

また、冒頭に申し上げたように、私、熊本で家族の被災を経験しています。この東日本の支援をしている時に、まさか私の地元が被災するとは本当に思わなかったんですけども、2夜連続震度7の地震が私の地元を襲ったというニュースを受けて、熊本でも同じようなことができないかと思って、現場を回りました。

そしてできたのが、これも熊本の避難所、大きな、全盛期で1500人ぐらいが住んでいた大きな避難地、避難住宅があるんですけども、その集会所で子供達を集めて毎晩毎晩、勉強をする、勉強というか居場所ですね、をつくるという活動をやってきました。

こうしたターゲットアプローチ、まず今、ここでは自然災害を挙げましたが、いろんなダメージを負った子供達を特に手厚くケアするということは非常に重要になります。

こうした取組を被災地だけではなくて全国にもやっていけないかということで、可能性を見出したのが、私は東京都の文京区にある青少年プラザという取組です。

この方は、文京区の区長さん、今でも区長さんでいらっしゃる方で、なんとか自分の地域を子供達が地域と学校の切れ目なく学び育っていく地域にしようということで、文京区って東大がある場所



なんですけれども、その裏の古い体育館を建て替える時に教育センターという先生方の研修なんかを司る地域との複合施設で、子供達が集まる居場所をつくらうという計画に参加をさせていただきました。

文京区って言うと、すごく有名な学校が多くて、小学生全員に近いぐらいが中学受験をするような地域なんですけれども、それでもやっぱり地域の課題はあって、勉強熱心過ぎる地域のあまり、子供達は塾と家の往復をするばかりで、なかなか思うように自分の居場所をつくれな、息抜きができる場所がないような要素があったりします。

面白い地域で、8000人しか在住の方はいないんですけれども、外からめっちゃ多くの方々が通学してくるんですね。それは文京区にみんなが通いたいと思うような有名な学校がたくさんあるからなんですけれども、するとどういことが起こるかという、8000人の地元の子達は、地元の学校になかなか受からないから、外の学校に通学しないといけないんですね。

一方で、外から来る子供達は、何なら中学1年生なのに2時間ぐらいかけてここまで通ってくるわけですよ。だから、地域でのんびりしたり、地域と交流したりするつなぎ目がないというようなことがあったりして、それで何をしようかということ考えたのが、文京区青少年プラザという子供達の居場所でした。

まだ、居場所ができる前の施設建設段階から始めたのが大学生ボランティアとの連携です。この子も当時の大学1年生なんですけれども、大学生と一緒に、こういう新しい私達の場所をつくる仲間を募集します、と言ったら、地元の中学生、高校生が集まってくれて、ここに今、「b-lab」ってアルファベットで書いてあるんですけれども、文京区青少年プラザって言うといかにも堅くて、中学生、高校生にとってはお役所っぽい公共施設みたいに見えかねないので、b-lab という愛称をこの子供達がつけて、建設が進みました。それで中学生高校生と一緒に、大学生ボランティアが支えながら、みんなでデザイナーさんと一緒にロゴを作っ

たり、作ったロゴで地域のお祭りに出て行ったり、そして明海大学のボランティアの皆さんがやっているように、地域の学校に出張授業で対話を通して、かつこういう場所ができるよというPRをしたりしながら。

さらに懐が広いなと思ったのは、この場所をどんな内装にするかということも子供達と一緒にワークショップで考えて、それを大学生がまとめて、図面に引かれました。こんな施設なので、すごいんですよ、公共施設なのに充電自由、Wi-Fi自由、iPad貸し出します。そして、楽器の練習ができるスタジオもあるし、ダンスの練習ができるホールもあって、鏡めっちゃ広いみたいな感じです。漫画も置いてあるし、みたいな。

子供達にとっては本当に放課後、自分達が自分達らしく過ごせる秘密基地としてオープンすることができました。これもやはり重要なのは大学生ボランティアです。私のようなおっさんとか行政の人、先生や親、縦の関係ではなかなかできないつなぎ目を大学生が中心にやってくれたことで、オープンしたすぐにも高校生バンドのライブができたり、高校生がすごくのびのびと自分達の個性や可能性を発揮できる機会をつくることができました。当時の写真を見ると、今でも懐かしく、目頭が熱くなる思いです。そして、このコラボスクールやb-labの中で私が見出してきたのは、今度はこれを見ていると、大学生ボランティアが生き生きやっているから、中学生、高校生自身も、私も何かやりたい、ってなるんですね。私も何かやりたい、ってなった高校生のその取組にマイプロジェクトという名前を付けて、全国の高校生に呼び掛けることにしました。

どんなマイプロジェクトがあるか、ちょっと紹介します。b-labから生まれたのはこんなですね。エシカルファッション、ご存じですかね。大量生産、大量廃棄されるようなファストファッションではなくて、倫理的にそして環境的にもすごく優しいファッション、これを広げるためのファッションショーをしようという高校生達のグループです。

一方、コラボ・スクールを見てみましょう。コラボ・スクールでは、次、どんな地震があっても自分の子供達、孫達、100年後の世代にも伝えるための木碑を作るというプロジェクトがありました。

地元の材木屋さんに木材を提供してもらって、津波が来たら、迷わず高台に行こう、というメッセージを作りました。

これ、石碑じゃないっていうのがいいんですよ。木碑だから腐って字が読めなくなるんですよ。だからいいと。4年に1回この木を新しく取り換えることで、みんなが震災の時のこと、あの時亡くなった大切な誰かのことを思い出そうというマイプロジェクトです。これは今でも4年に1回取り換えられる、町の大事な行事になります。

それから、群馬県ではこんな取組。例えば抗がん剤治療などで髪の毛が抜けちゃったりする方々がおられます。そういう方々に、髪の毛の寄付をするヘアドネーションという活動をする女子高生達があります。写真を見るとみんな髪の毛、長いですよ。できるだけ自分の髪の毛を伸ばして、その、本当の人の髪の毛で作るかつらというのが、一番高級なんだそうです。これを寄付して、安価にかつらを作ること、誰かを笑顔にする取組だったりします。また、どんどん進んでいると、これは気仙沼なんですけれども、自分の地元をPRする「気仙沼クエスト」というゲームを作った高校生もいたりして、自分が大事だと思ったこと、やりたいと思ったことをどんどん形にする高校生というのが今、日本中に広がっています。10年前、この取組を始めた頃は、この写真にある、これね、人がたくさんいるように見えるんですけども、よく見てもらうとこの黄色の名札をつけている人達だけが高校生で、「全国アワードです」って言いながら、実はたったの18人しか集まらなかった場所だったんですけども、年を経るごとに多くの方が参加するようになって、これがコロナ前最後の大会です。今日も実は午前中、私の地元の熊本ではこの発表会をやっています、オンラインで参加することができました。去年は1万3600人がこうした活動に参加をするようになっていて、大学生ボランティアが熱心だった10年前、20年

前の流れから10年遅れて、今度は高校生が地域に飛び出して、活動する時代が始まっていると言えるでしょう。



ー 教育現場の変化～探究的な学び～

では、こうした流れに対応して、学校がどう変わっているかを補足をしてまとめに入りたいと思います。昨年度、センター試験がついに終わり大学入学共通テストが始まりました。そして、来年度、次ですね、2カ月後の4月からは新しい学習指導要領が始まり、大きな教育改革の節目を日本の高等学校は迎えています。簡単に言えば、誰かに答えを与えられるのではなくて、学ぶ目的を自分で見出していこうという変化にあり、「探究」というキーワードを軸に、この改革は進んでいます。探究という言葉は京都のとある市立高校から始まった言い回しなんですけど、今、大きな国の改革の流れに位置付けられました。

どういうものかということ、文科省の図ではこういうふうに表示されているんですけども、自分でテーマを設定して、それに対して調査・分析をしたり、地域に出て実際に活動したものをどんどん発表しながら次なる自分の課題にしていこうということです。

おそらく明海大学の学生さん達、現場に出た経験をお持ちの皆さんは、自分が現場に出ることで新しい視野を学び、次なる自分の関心を見出していたという、このらせん状の学びを経験された方が多いんじゃないかと思いますが、こういう経験を高校時代からどんどん積んでいこうというのが今回の高校教育改革の主旨になります。

学びに向かう力というものが非常に重視され、今

まで通り、知識、技能も当然大事なのですが、そこに思考力、表現力、判断力を重ねていながら、自分達がどのように学んでいくかという時に、探究的な学びが大事だというふうにされています。

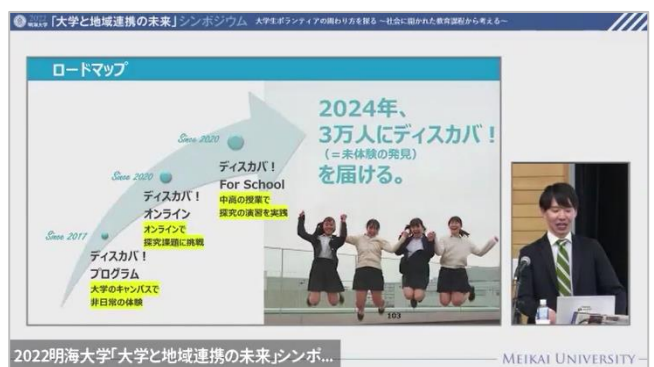
社会に開かれた教育課程がないとそうした学び方も実現しませんので、冒頭のごあいさつで学長先生が仰ったように、こうした学校教育改革の流れと、社会の側の連携の余力、もちろんそこで主役の一つとなる大学生ボランティアの力というのが、今、あらためて大きな意味を問い直されていると言えるでしょう。これ、大学生の皆さん、びっくりすると思いますが、というか、専門的に学んでおられるのでご存じと思いますが、4月から入学する高1の教科、皆さんが学んだ教科、科目とは全く違うものになります。例えば国語科だけで見ても、論理国語、文学国語、国語表現、古典探究、現代の国語、言語文化という6科目に編成されて、僕なんて4種なので、自分が見ていた頃の教科書から全然変わっているなどびっくりする次第なわけです。で、この中を詳しく見ると、「探究」という名前がついた新科目が7つもあって、この探究的な学び方というのが学校教育、教科の学びの中でもすごく重視されているという大きな変化を感じざるを得ません。

また、この自分で課題を見出していこうという時に、全然知らないどこか遠い世界の課題を見るのもいいけれど、それだけではなく自分が内から、これをやりたい、と思えるようなもの、自分がこれからこれに関わっていききたいという内から湧き出すようなテーマでこれに取り組むということを大事にするんだよということが学習指導要領の解説書には書いておられまして、こういった課題、テーマといかにして子供達が出合うかということがすごく重要な問題になっていると感じております。

その中で、私は今、桜美林大学の高大連携の仕事の中で「ディスカバ！」というプロジェクトを運営しており、未知の体験と出会う場所を子供達に提供しております。明海大学もちろんそうだと思いますが、大学というのは未知の課題の宝箱の

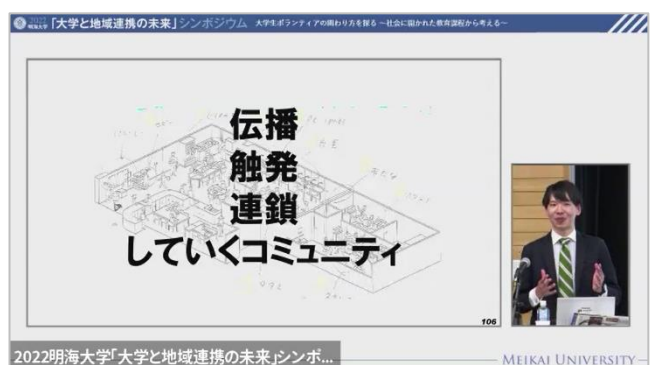
ような場所です。ここにある大きな学びを一つ一つ拾い集めて、探究のプログラムにして高校生に届けると。でもそんなのに取り組むのは簡単ではないので、大学生ボランティアがそれをサポートすると。なので、背伸びして難しいことに挑戦するというのと、それを大学生が支えるというこの二本立てが今の私の解決策です。

このディスカバ！の広がり、本年度1万人参加の規模になっておりまして2024年、新学習指導要領世代が大学入試を迎える年には3万人に届けるように頑張っていこうと大学生達と日々頑張っているところになります。



以上で私からは全国事例をたくさんご紹介させていただきましたが、カッコイイことばかりではなくて現場ではうまくいかないことの方がたくさんありました。そういう泥臭いことも今日はディスカッションでお話ししていければうれしいですし、大学生の皆さんが経験してきた皆さんの現場と何か重なるところがあったらうれしいと思います。

それでは最後に私からまとめを申し上げて終わりますので、皆さんからのご質問を頂いて私のパートが終了になります。



ボランティアの意義と課題です。意義はやはり、私もどんな教育プログラムよりも大学生の皆さんをはじめとした人と人が出会うコミュニティの力というものが最強にパワフルだと思いながら教義、実践を積み重ねています。誰かに熱を届けようという気持ちが伝播したり、触発して連鎖していくということが価値です。おそらく今日お集まりの皆さんたくさんの子供達に関わってこられたと思いますが、その子供達、おそらく今度は、自分もいつかボランティアしようと思うようになるはず。この連鎖が繰り返して繰り返して繰り返していくことが、何より重要だと感じています。

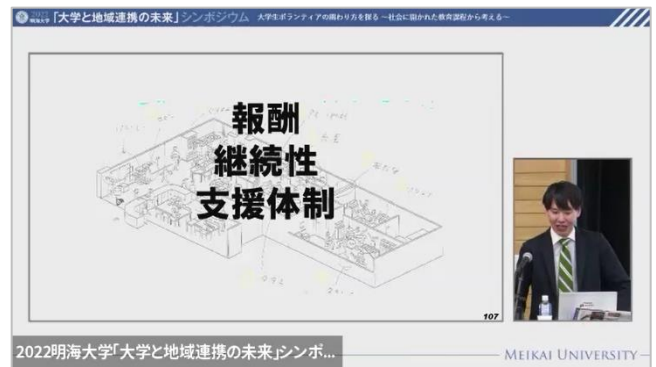
どんな教科書よりもどんな先生よりも、それが最もパワフルだと感じます。

ただ一方で、何が課題かという、私はこれが大学生ボランティアの皆さんの言わば「やりがい搾取」と言われるような状況にならないようにするための、それを支える大人や仕組み、制度を司る側の課題に問題を感じます。

特にコロナ禍以降、大学生が、例えばアルバイトができないとか、せっかく上京してきて都会の大学に通って、アパートも借りたけど、オンライン授業なのでアパート代がもったいないですとか。大学生の経済問題も大きな社会問題になりました。

なので、ボランティアなんだから、勉強できているんだから無報酬でいいだろう、と言える時代はもはや終わっているかなと。皆さん、大学生ボランティアの学びを提供するということは、ボランティアのコーディネート側に必ず求められる要素ではありますが、私としては、そこに金銭なのか何なのか、何らかの対価、報酬をきっちり意識していくことが、大学生ボランティア側とそのコーディネート側の win-win において、もはや欠かせないのではないかと感じております。

こうしたことが継続性につながっていきますので、この支援体制については、私も大学でこういったものをコーディネートする一人として深く自戒をしながらこの議論を進めていく必要があるなと感じております。



これを私の基調講演というか、前座としながら、今日は皆さんと大学生ボランティアの可能性、価値について議論できることを非常に楽しみにしております。本日はどうぞよろしくお願い申し上げます。ありがとうございました。

一 質疑応答

【明海大学 英米語学科 4年 矢吹】

先ほど言っていた、大学生のナナメの関係である大学生がどんどん高校生を盛り上げていって、さまざまな活動を活発にしていくとのことでしたが、地方の大学ほど大学生も少なく、大学生の層も少ない、大学生の人数も少ないなど感じる。そのようなところは大学数がそもそも少ない地方なので、どのように大学生を確保するだけの工夫などはありますか？

【今村】

ありがとうございます。すごく重要なご指摘をありがとうございます。ちなみに地元はどちらですか？

【矢吹】

地元は福島県で、大学が少ないので。

【今村】

やっぱりですね。ありがとうございます。私も地元が熊本県で、福島県とおそらく状況は似たような形かと思います。特に今回、東日本大震災や熊本地震で感じたことは、都市部ではない地域の若者の流出ですね。

大学生に限らず若者がいない、ボランティアの担い手がないということは非常に課題を感じながら現場で運営してきました。ポイントは2つかと

思います。

まず1つは、大学生ボランティアとはまたちょっと違うスキームで地域活動のスキームがあったりする場合があります。地域の消防団みたいなものや青年団みたいなものが都会とは違った形で昔ながらの地縁のコミュニティとして形成されていたりします。それがお祭りや地域の行事を通じて大事に大事に続いている場合がありますので、こうした地域連携というのは、都会では逆にできない可能性だと思いますので、もしご質問者さんも地元に戻ったらそういった地域コミュニティに目を向けてみるのもいいのではないかというのが1つ目です。

2つ目は、私自身が熊本地震被災地や、東日本大震災被災地でやったことですが、やはり都会からこうした地域への若者、大学生ボランティアの還流ですね。都会で学んでいる人には都会では学べない価値が地方で実現し得ると感じます。こうしたことが実現できるように、大学連携の中では要は大学のキャンパスにいなくとも、遠隔地でボランティアすることが単位取得につながるような仕組みをつくる、ですとか、そこに来てもらった時にお住まいや生活費を運営側で支給できる体制をつくったり、など、都会から地方へ若者を還流させる仕組みづくりというのが重要だなと感じた次第です。

以上でございます。

6. 学生発表（グループ A）

日本語指導支援（東京都立飛鳥高等学校）		
参加学生	全日制課程	外国語学部日本語学科4年 高橋 美優、林 城毅 3年 呉 義偉、田中 愛唯、山口 莞奈
	定時制課程	応用言語学研究科博士後期課程3年 林 苗 外国語学部日本語学科4年 永沼 彩乃、 ファム・ティ・ゴック・ハン、林 城毅 3年 浦野 遥風、菊地 竜星、田中 愛唯

1 はじめに

本報告は東京都立飛鳥高等学校で日本語指導が必要な外国人生徒に対して、外国語学部日本語学科および応用言語学研究科の学生が日本語指導支援を行ったものである。

11月17日 1月19日

② 参加者

生徒 13名（初級4名/中級5名/上級4名）
学生 上記表題の定時制課程欄に記載の、
田中 愛唯以外の6名

2 実施概要

(1) 全日制課程（1クラス）

① 年間実施日（月曜日 計18日間）

5月10日、24日、31日
6月7日、21日 7月12日
9月6日、13日 10月11日
11月1日、8日、22日 12月13日
1月17日、24日、31日 2月7日
3月14日

② 参加者

生徒 7名
学生 上記表題の全日制課程欄に記載の5名

③ 内容

中上級レベルの読解の指導を、5名の学生がローテーションで行った。「読む書くにつながる日本語読解」を使い、あるテーマに沿った長文を読み、その後本文の内容確認をしたり、自分の考えを作文にしたりした。また大学受験をする生徒もいるので、大学でも通用するような指導を意識した。

(2) 定時制課程（日本語講座3クラス）

① 年間実施日（水曜日 計9日間）

5月12日 6月23日 7月7日、14日
9月8日 10月13日、20日

③ 内容

初級~中級の語彙・文法・読解の指導を、レベル別の3クラスに分けて行った。クラスによって使用する教材を分けながら、読解を通じた語彙・文法指導を行った。元気な生徒が多いので、わかりやすくやる気を保てるような授業づくりを心がけた。

(3) 定時制課程（日本語授業 2クラス）

① 年間実施日（木曜日、金曜日 計41日間）

4月22日、23日
5月13日、14日、20日、21日、
27日、28日
6月3日、4日、17日、24日、25日
7月1日、2日、8日、15日、16日
9月2日、3日、9日、17日
10月7日、8日、14日、15日、21日、
22日、28日、29日
11月5日、11日、18日、19日、25日、
26日
12月9日、10日、17日
1月13日、14日

② 参加者

生徒9名（初級6名/中級3名）
学生2名 永沼 彩乃、田中 愛唯

③ 内容

「みんなの日本語」を使った文法指導を学習者のレベルを考えながら行った。生徒の年齢に幅があるため、生徒ごとの目的を把握する必要があった。また非漢字圏の生徒も多いので漢字の指導も必須であった。

3 学校の感想

全日制課程 副校長 池田 厚 先生
全日制課程では、毎年「在京外国人生徒募集枠」で20名の外国籍生徒を受け入れています。その中には日本語が殆どできない生徒も含まれており、レベルに応じた複数の日本語指導講座を開設しています。昨年度から、生徒を3つのレベルに分け、明海大学との連携教育を利用した放課後の講座では、一番レベルの高い生徒（今年度10名）の指導をお願いしております。コロナ禍の中でオンラインによる講座を併用して開設していただき、生徒たちも楽しく授業を受け、日本語力の向上に繋がっています。

日本語教育は、今後、全都立高校で必要になると思いますし、本校のようにきめ細かい段階を踏んだ日本語講座を設定・整備することが、急務であると思います。

主任教諭 會田 哲也 先生

全日制課程では日本語講座を習熟度に応じて4種類設置しており、明海大学の講座では最も習熟度の高い数名が学んでいます。

今年度は計18回の授業を対面とオンラインの形態で実施しました。生徒たちは年齢に近い先生方に教えていただくことで、自らの進路の模索についても良い刺激を受けています。

定時制課程 副校長 東 達康 先生

日頃から本校の日本語指導にご支援、ご協力を賜り、誠にありがとうございます。お陰様で日本語指導支援員の皆様のお力添えで今年度日本語能力検定試験に挑戦する生徒が、昨年度よりも増加し、合格者を輩出することができました。きめ細かい指導と継続して支援を行うことで生徒のモチベーションも向上し、成果を出すことができました。今後ともよろしくお願いいたします。

教諭 紺野 敦志 先生

昨年度本校に新設された学校設定科目「日本語」において、今年も本校の教員と明海大学からの日本語指導支援員による習熟度別の授業を行った。習熟度別での指導によって、生徒それぞれの能力に合わせた日本語指導をすることができた。生徒は日本語の勉強に積極的な姿勢を持つようになり、「日本語」の授業を受けた多くの生徒が今年日本語能力試験に挑戦し、今までになく多くの合格者を出すことができた。

4 見えて来た今後の課題

母語も年齢も多様な生徒の日本語学習の目的をきちんと把握して取り組むことが大切である。

5 実施してみたの感想

生徒の「わからない」が「わかる」に変わった時や、楽しかった、よくわかったと言ってくれた時にやりがいを感じる。

(日本語学科3年 田中 愛唯)

6 2月5日の発表

2月5日のシンポジウムでは、外国語学部日本語学科3年田中愛唯が登壇し、上記の取組内容を報告するとともに、日本語を教えることの意義について語った。



日本語指導支援（東京都立南葛飾高等学校）

参加学生	応用言語学研究科博士前期課程 2年	枝常 姫香、富田 遼太郎
	1年	沈 伽迪、楊 凱
	外国語学部日本語学科	4年 工藤 楓、永沼 彩乃
	3年	菊地 竜星、角田 涼輔、田中 愛唯、山口 莞奈

1 はじめに

東京都立南葛飾高等学校で外国にルーツを持つ日本語指導が必要な生徒に対して、外国語学部日本語学科及び応用言語学研究科の学生が日本語支援を行った。

今年度は、コロナウィルスの感染対策を十分にした状態で、対面での日本語指導支援を実施することとなった。授業の実施にあたり、高校の先生方に多大なご尽力を賜っている。

2 実施概要

(1) 年間実施日（火曜日、金曜日 計 30 日間）

4 月 20 日、23 日、27 日

5 月 11 日、28 日

6 月 1 日、15 日、18 日、22 日

8 月 25 日、26 日、27 日

9 月 10 日、28 日

10 月 5 日、8 日、26 日、29 日

11 月 2 日、5 日、16 日、19 日

1 月 14 日、18 日、21 日

2 月 1 日、4 日、8 日、15 日、18 日

※8月25日～27日は夏期講習を実施

(2) 参加者

2クラス 生徒約 20 名

参加学生 上記表題に記載の 10 名

(3) 内容

N3を目指すレベルの生徒に対する JLPT 対策・産出力（話す・書く）の育成が中心である。JLPT に合格をしても、長文を読んだり、作文をしたりすることが苦手という生徒が多いので、運用力を上げる授業内容を工夫している。

3 学校の感想

東京都立南葛飾高等学校

校長 佐藤 幸司 先生

本校が在京外国人枠入学者選抜制度を導入して 6 年目となりますが、この間、日本語指導を中心に様々な支援をいただいています。コロナ禍の続く今年度においても明海大学の学生の皆さんには、熱心に指導に来ていただき、不安を抱えて入学してくる日本語支援の必要な生徒同士のコミュニケーション、関係作りにも効果のある授業を展開していただきました。生徒が学校生活に適應する助けとなり、大変ありがたく思っております。引き続きご支援をお願い申し上げます。

教務部 西川 真吾 先生

本校の第 1 学年の在京外国人生徒を対象に、週 2 回、生徒の日本語レベルに応じて日本語指導をしていただいています。生徒にとって親しみやすい「お兄さん」「お姉さん」たちに教えていただくことで、生徒は日本語を楽しく意欲的に学んでいます。そのため、多くの生徒が日本語能力試験に合格するとともに、学校生活が充実し、希望進路実現につながっています。本当にありがとうございます。

4 参加生徒の感想

李 雯雅 さん

私は入学してから毎週火曜日、金曜日に日本語指導に参加して、たくさんの日本語を学ぶことができたと思います。先生たちのおかげで日本語のコミュニケーション能力も高くなり、毎回楽しく授業を受けることもできました。毎週、優しく教えてくださった先生にとっても感謝します。

この 1 年間、日本語指導を受けたことで、とてもよい経験ができたと思います。これからも日本語の勉強をもっと頑張っていき、日本語検定も取り

たいと思います。

成沢 ジョン蓮 さん

JLPTのN3に合格できました。N3に合格するのは難しいと思っておりましたが、授業で学んだ問題が出ました。N3に向けて、7時間目の日本語授業を頑張りました。先生方の授業はとても分かりやすく、単語や文章の意味も詳しく教えていただきました。授業のプリントを何回も勉強しました。今後は漢字の勉強をもっと頑張ります。

5 見えて来た今後の課題

指導面では、産出面の強化を図ることを目指したが、最初はなかなか答えたり書いたりしてもらえなかった。限られた回数なので、早期に言語産出に必要なラポールを形成することは今後の課題の一つとしてあげられる。

6 実施してみたの感想

生徒さんは全体に静かなので、こちらから積極的に話しかけることを意識している。生徒個人によって反応にちがいがあがるが、生徒同士でわからない問題を母語で相談している様子もみられた。

支援の回数を重ねるにつれて、生徒さんの方から話しかけてくれるようになった事が嬉しい。

(日本語学科3年 角田 涼輔)



7 2月5日の発表

2月5日に開催したシンポジウムでは、外国語学部日本語学科3年田中愛唯が登壇し、実施報告を行った。ここでは報告内容の抜粋を記す。

南葛飾高校の日本語の授業では、「読む書くにつながる日本語読解」を使用し、文法と読解の指導を行った。JLPTのN3レベルを目指している中級クラスであった。JLPT、日本語能力試験は上からN1～N5までである。JLPTのN3に合格していても、長文を読んだり作文を書いたりすることが苦手という生徒が多いので、運用力をあげる授業内容を意識した。穏やかな生徒が多いので、指導者の側から積極的に話しかけ授業を行うことを心がけた。

余計	
1 一人暮らしだと野菜がすぐ余計になってしまふ。	「～ようにする」 →がんばる、どりよする、心がける(keep in mind) 作り方(動詞(V)の辞書形+ようにする) [動詞(V)のナイ形+ようにする] ・今日は体調が悪いので、できるだけ早く寝るようにします。 ・毎日野菜をたくさん食べるようにしています。 ・家に帰ったら必ず手洗いうがいを忘れないようにしましょう。
2 話が複雑になるから、余計なことは言わないで。	
3 余計があったら、ひとつ買してもらえませんか。	
4 このころ仕事が忙しくて、遊びに行く余計がない。	
まえへ つぎへ	

出典：日本語能力試験公式ウェブサイト <https://www.jlpt.jp/>

7. 学生発表（グループ B）

明海大学あけみ英語村 2021—小学生異文化交流プロジェクト—

第1回	日時	2021年10月6日（水）14時～16時
	参加者	足立区立興本小学校 5年生 73名、本学留学生 8名、本学教職課程履修生 10名、教職課程センター及び多言語コミュニケーションセンター、足立区教育委員会
第2回	日時	2021年10月21日（木）14時～16時
	参加者	足立区立足立入谷小学校 5年生 24名、本学留学生 8名、本学教職課程履修生 16名、教職課程センター及び多言語コミュニケーションセンター、足立区教育委員会

1 はじめに

世界のさまざまな国・地域から来ている本学の留学生及び教職課程を履修している学生と足立区の小学生が英語を使って異文化交流する「明海大学あけみ英語村」は、今年度で5年目の取組みとなった。

今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため初めてオンライン形式で開催した。大学図書館のラーニングコモンズに会場を設け、そこからZoomを使って小学校側へ配信をした。本学側では、参加する学生に対しては、マスク着用やこまめな換気、手指消毒などの感染症対策を徹底させて実施した。コロナ禍でも例年通り、2回実施することができた。

2 プログラム

(1) 開村式（10分）

(ア) 安井学長あいさつ

(イ) 小学生代表あいさつ

(2) パトリツィア教授とタイソン准教授に

よるコミュニケーション・アクティビティ
(30分)

(3) 留学生による各国英語村（45分）

(4) 閉村式（10分）

(ア) 高野副学長あいさつ

(イ) 小学校校長挨拶

(ウ) 小学生代表あいさつ

3 主なアクティビティの特徴

(1) コミュニケーション・アクティビティ
パトリツィア教授の母国アメリカとタイソン准教授の母国カナダの文化について、両先生が写真

をたくさん使ったパワーポイントを通して紹介をした。その後、チャンツに合わせてお互いの好きなことについて小学生とやり取りをした。小学生も元気よく英語で自分の気持ちや考えを伝えることができた。



(2) 留学生による各国英語村

アメリカやスリランカ、台湾、中国、フィリピン、ベトナムの計6か国・地域出身の留学生が小学生とZoomのブレイクアウトルームを使って交流した。留学生が時刻を紹介するパワーポイントを見せながら、小学生とやり取りをしながら英語でのコミュニケーションを楽しんだ。



4 小学生アンケート結果及び分析 (一部抜粋)

(アンケート回答者：興本小学生・ 教員 78 名
足立入谷小学生・教員 27 名)

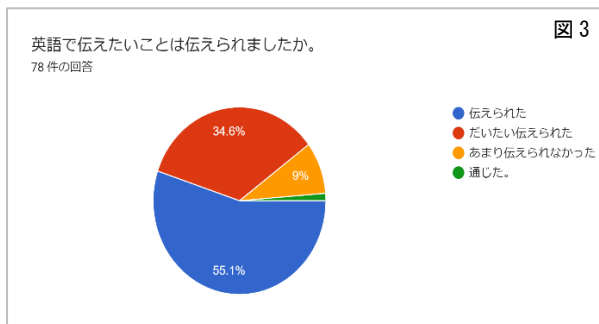
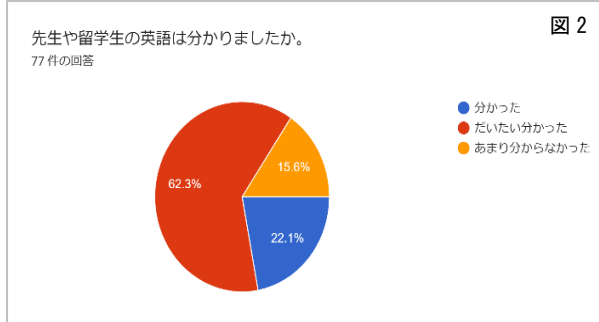
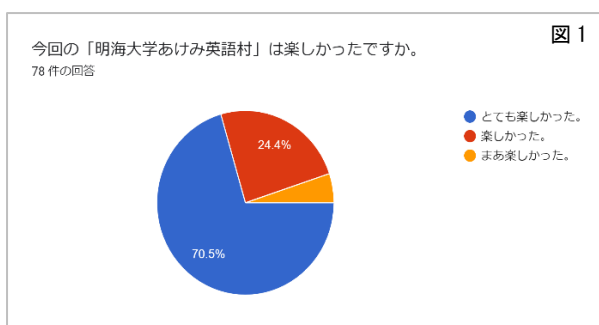
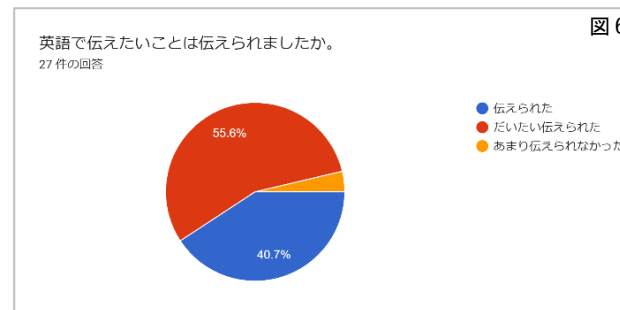
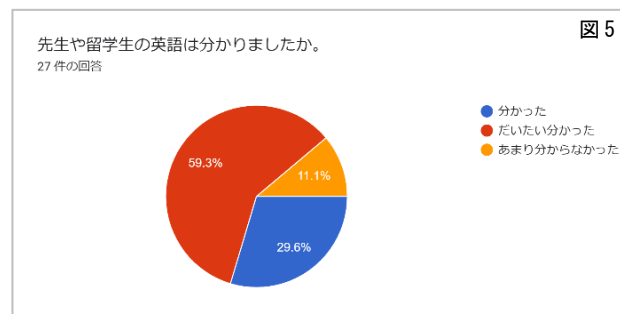
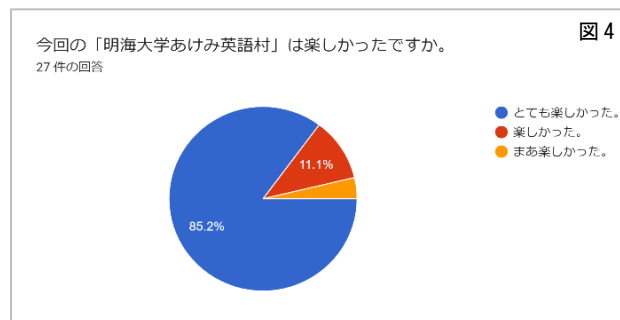


図 1 から、「とても楽しかった」と「楽しかった」を合わせた肯定的回答が興本小では 94.9%あった。ほとんどの興本小学生が「あけみ英語村」を楽しんでくれたことが分かった。また、図 2 によると「先生や留学生の英語は分かりましたか。」という質問に対して、肯定的回答が 84.5%あった。図 3 では「英語で伝えたいことは伝えられましたか。」という問いには、91%が肯定的に回答した。この結果から、この事業を楽しむだけでなく、英語を聞いて理解したり、話したりしてコミュニケーションする楽しさを体験したようである。



次に、足立入谷小であるが、図 4 では肯定的回答は 96.3%と高評価であった。また、88.9%が英語を理解できたと肯定的に回答した。図 6 からは、「だいたい伝えられた」が 1 番多かったが、英語で伝えられたことに 96.3%が肯定的に回答した。両校のアンケート結果から、小学生はこの事業をかなり肯定的な体験と捉えることができたようだ。英語を理解できたり、伝えたりできたことから、英語に対する前向きな態度を育成する貴重なきっかけになったのではないかな。

最後に、小学生のコメントを紹介する。

- あけみ英語村で色々なことを学びました。もともと私は、英語で話すのが苦手でした。でも今回色々な留学生や大学生のお兄さん・お姉さんと話すことができ英語が好きになりました。そして色々な国の文化などがわかりました。またとにかくなんでもいから話せば伝わること、英語は、話せば話すほど相手に伝わるということがわかりました。

足立区中学校異文化交流学習会

今年度参加校	足立区立扇中学校	実施日	2021年11月5日
	足立区立新田中学校	実施日	2021年11月15日

1 はじめに

足立区と連携協定を締結した2016年度より、足立区教育委員会と連携して小中学校に対して本学の研究・教育資源を生かした英語教育支援をおこなってきた。その一環として、世界のさまざまな国・地域から来ている本学留学生が足立区の小中学生と英語を使った異文化交流学習会をおこなってきた。



今年度は、コロナ禍2年目であったが異文化交流学習会を2校の足立区立中学校とオンラインで開催することができた。本学の図書館のラーニングコモンズを会場としてZoomを利用して配信した。

参加する留学生は、マスク着用や手指消毒などの感染症対策を徹底して実施した。以下に、足立区立扇中学校でおこなった交流学習会について簡潔に記した。

2 足立区立扇中学校との異文化交流学習会

- ① 参加者：本学留学生5名と中学2年生70名、3年生57人
- ② 参加留学生の出身国：アメリカ、スリランカ、台湾、フィリピンの計4か国・地域
- ③ 概要：留学生5名は、2時間目と3時間目の英語の授業に参加した。留学生は一人ずつPCを使い、中学生は4、5人の6グループに分かれ、グループ単位で1台のタブレットを活用してZoomのブレイクアウトルームに入り、留学生と交流した。留学生は写真などを使って自分自身や自国の文化を紹介した。

また、中学生も自分たちで予め調べておいた都道府県の1つや自分の興味のあるトピックについて英語で紹介し、その後留学生からの質問に頑張って答えた。中学生も留学生も英語を使つてのコミュニケーションを楽しんだ。

3 足立区立新田中学校との異文化交流学習会

- ① 参加者：本学留学生7名と中学1年生約190人と2年生約170人
- ② 参加留学生の出身国：スリランカ、台湾、中国、フィリピン、ベトナムの計5か国・地域



- ③ 概要：留学生7名は、3時間目と4時間目の英語の授業に参加した。留学生は一人ずつPCを使い、中学生はクラスごとに6クラスに分かれ、クラス単位で1台のタブレットを使用しました。Zoomのブレイクアウトルームを活用した。留学生は写真などを使って自分自身や自国の文化を紹介し、中学生も自分の好きなトピックについて英語で紹介し、その後留学生から質問を受けるなど英語で頑張ってやり取りした。

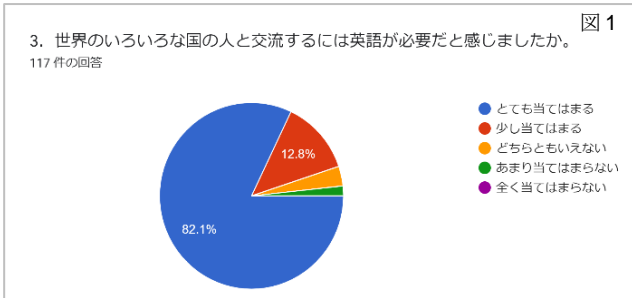


4 中学生事後アンケート結果及び分析

(一部抜粋)

(アンケート回答者： 扇中学生 117名
新田中学生 356名)

事後アンケートで9つの質問をした。まず扇中学校の結果であるが、「英語は必要と感じたか」の質問に対して、生徒たちのほとんど全て(94.9%)が肯定的に回答した(図1)。



必要性を感じないとやる気も起きてこないものである。しかし、自分にとって必要だと感じられれば、英語学習への大きな動機づけになる。

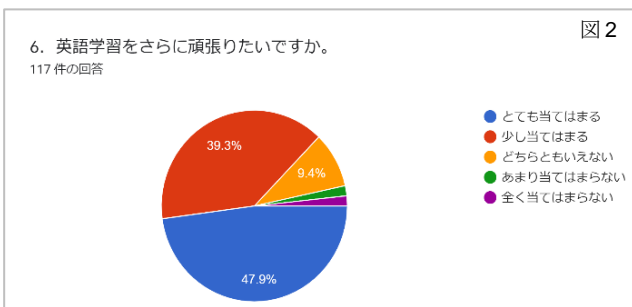
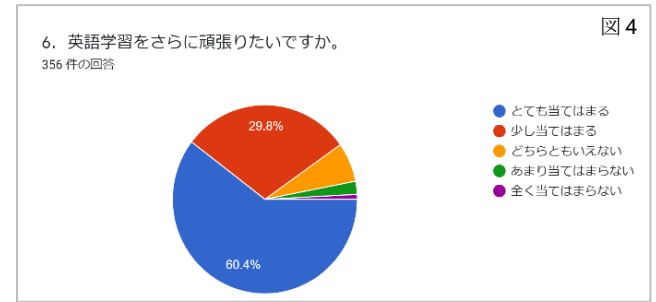
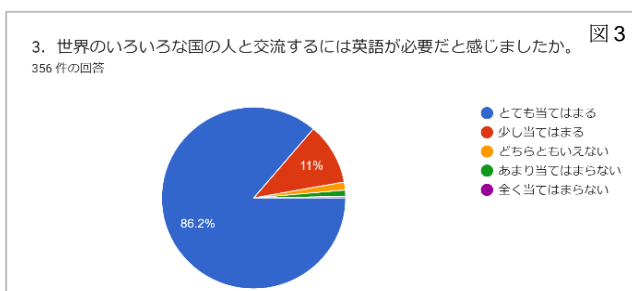


図2では、87.2%が「英語学習をさらに頑張りたい」と肯定的に回答した。今回の事業が1度限りのイベントで終わることなく、日頃の英語学習への肯定的な波及効果をもたらすことがこの事業の主目的の1つであるが、この回答結果からこの目的は達成できたとと言えるだろう。

次に新田中学校の結果であるが、図3からは97.2%は「英語が必要だ」と感じたようだ。扇中学生以上に英語の必要性を感じる貴重な体験ができたようだ。



さらに図4からは、日頃の英語学習へのやる気に関して扇中学生以上に多くの中学生がやる気を持つことができたようだ。上述したように、この事業の大きな目的が達成できたと改めて確認できた。

最後に、中学生のコメントを紹介する。

- 言葉が違う中で自分の伝えたいことが伝わるかどうか、また相手の言っていることがわかるのか最初はわからなかったし不安でした。ですが交流が進んでいくにつれて中学校で習っている英語でも留学生の方々と会話ができることに驚きました。だから、中学英語だけでなくこれからもっといろいろな英語を学んでいけば沢山のひとと会話ができるのかなとワクワクします。また機会があったら今回の交流以上に進化した内容のお話ができるように英語の勉強を頑張りたいと思います。
- 留学生の方と交流することが初めてで、凄く緊張しましたが、とても楽しんで話を聞くことができました。英語は凄く苦手ですが、今回の交流で英語の大切さを改めて実感したので、英語が少しでも話せるように頑張ろうかなと思いました。
- 留学生の皆さんは、とても日本のことが大好きだとわかりました。その中でスリランカの留学生は高校生の頃から日本語を勉強して、今も好きな教科は、日本語ということを知っていて、とても日本のことが大好きだとわかりました。そして外国の方と交流するには英語がとても大切だと身を持って感じました。

大学生と話そう会 2021、田柄高等学校訪問交流会

大学生と話そう会 2021

参加学生	外国語学部日本語学科 2年 三森 茉柊、1年 能勢 舞桜 外国語学部英米語学科 4年 高橋 勇氣、3年 及川 龍之介、小林 悠太 経済学部経済学科 3年 史 楷鋒 ホスピタリティ・ツーリズム学部ホスピタリティ・ツーリズム学科 1年 シャルマ・ススミタ
------	---

田柄高等学校訪問交流会

参加学生	外国語学部日本語学科 4年 ゼン・シンウ、テン・ミョウ 外国語学部英米語学科 3年 R.P.P.マドゥランガ・クマーラ、リュウ・ハクブン 1年 カ・ジャフ、コ・コウセイ、チャン・ズイ・ヒエン チャン・ティ・ミ・ズエン、グエン・フォン・ジャン チン・カジ、トウ・ゴウ 経済学部経済学科 4年 チン・シンハン、1年 チョウ・テイ ホスピタリティ・ツーリズム学部ホスピタリティ・ツーリズム学科 4年 タン・ジェンシイ
------	---

大学生と話そう会 2021

1 実施概要

9月26日に都立飛鳥高校の日本人生徒3人と在京外国人生徒4人、都立南葛飾高校の日本人生徒10人の計17人が、本学の学生7人とZoomを通して懇談する「大学生と話そう会 2021」が開催された。このイベントの目的は、高校生が明海大学の学生と交流することにより大学で学ぶことの魅力、大学生活の魅力、明海大学の魅力などについて理解を深めていただくことである。コロナ禍による緊急事態宣言の相次ぐ延長のためオンラインでの開催となり、2校のそれぞれの教室と本学の講義室とをつないで実施した。

Zoomのブレイクアウトルーム機能により2校が2グループに分かれ、それぞれのグループを担当する本学の学生たちにさまざまな質問をした。質問の内容は、大学の日常の生活、恋愛、授業、部活動、ボランティア活動、アルバイト、大学に進学しようと思ったきっかけ、大学と高校の違い、大学受験準備、明海大学の魅力など多岐にわたり、学生がそれに答えていった。

参加した高校生からは、「大学は学生と先生との距離が離れていると思っていたが、明海大学は先生が学生に本当に親身になって教えたり相談にのったりしていることを学生の皆さんから直接伺うことができた」などの声が聞かれた。

2 生徒の感想

都立飛鳥高校 ケーシー・ネハ さん
明海大学の先輩たちから、学科の特徴など色々なことを教えてもらうことができました。自分が知りたいことも質問できて、答えていただくことができ、とても嬉しかったです。先輩たちと一緒に話すことができ楽しかったです。ありがとうございました。

都立南葛飾高校 3年 播磨谷 洸 さん
先日の「大学生と話そう会」では、大変貴重なお時間をいただき、ありがとうございました。大学生になるにあたって気になる事や不安な事を、先輩方にお尋ねすることができて、キャンパスライフがより楽しみになりました。一緒に参加した同級生たちと一緒に合格ができて、本当に嬉しいです。4月からお世話になりますが、4年間、よろしく願い申し上げます。

3 学校の感想

都立南葛飾高校進路指導主任 武田 陽三 先生
「大学生と話そう会 2021」においては、南葛飾高校から10名の生徒が参加させていただきました。生徒たちは、先輩方をはじめ、教授の先生方からのメッセージもいただき、明海大学の良さや自分の学生生活について、より強くイメージする

ことができました。また、受験に向けてのモチベーションを大いに上げる機会となり、その後の勉強にも一層力を入れて取り組むことができました。本当にありがとうございました。

4 2月5日当日の発表

2月5日のシンポジウムでは、外国語学部日本語学科2年三森茉柊と外国語学部英米語学科4年高橋勇気が登壇して本事業の発表を行った。

発表では、上記の実施概要の報告のほか、学生自身の感想として、「コロナ禍により、対面での懇談には至らなかったが、高校生と交流し、明海大学のことや学生生活のことを知ってもらいたい機会になった。」ことなどが語られた。



田柄高校訪問交流会

1 実施概要

7月7日に、本学と高大連携校である東京都立田柄高等学校において留学生との交流会が行われた。これは、本学外国人留学生と高校生との交流を通じてお互いの文化に触れ理解を深めることを目的としたものであった。本学からは、中国、台湾、ベトナム、スリランカ出身の本学外国人留学生14名が交流会に参加した。その後、留学生は田柄高等学校の1年生5クラスに行き、それぞれ自国文化について思い思いの写真や動画やスライド資料

を投影しながら紹介を行った。

最後に留学生全員が視聴覚教室に集まった。校長先生から英語での歓迎のごあいさつをいただき、国際交流委員を務める生徒たちと懇談して交流を深めた。参加した留学生の一人は、「このように異文化の人たちが集まって協働学習を行うことは、とてもいい経験になります。」と語っていた。

2 生徒の感想

都立田柄高校1年 ラハパール・ススマ さん
明海大学の留学生の皆さんが、都立田柄高校に来ていただいた交流会のひとつは、素晴らしい体験になりました。「祖国紹介」を英日両語で行った後、プレゼンテーションソフトを使ってクイズショーを日英両語で行いました。クラスみんなで笑顔になることができました。直接お互いに個人の趣味を聞き合うなどもできました。

Please ... come and visit us again!

3 2月5日当日の発表

2月5日のシンポジウムでは、外国語学部英米語学科3年リュウ・ハクブンと外国語学部日本語学科1年チャン・ティ・ミ・ズエンが登壇し発表を行った。発表では上記の実施概要の報告の他、懇談会の席上で田柄高校の生徒に、多様な文化の違いを乗り越えて協力しながら学校生活を楽しんでほしいとのメッセージを送ったことが語られた。



8. 学生発表（グループ C）

東京都立葛西南高等学校「校内寺子屋支援」

参加学生 外国語学部英米語学科 2年 磯野 奨、上原 二葉、内山 瑞貴、桑原 百蘭、児島 晴香
小林 優汰、佐久間 陸人

1 はじめに

東京都教育委員会では2016年度から都立高校生の基礎学力の定着を図るために放課後の補習授業「校内寺子屋」事業を実施している。東京都立葛西南高等学校では事業開始当初からこの事業に数学と英語で参加し、6年目を終えようとしている。英語に関しては本学の学生が一貫して講師を務めている。

2 実施の概要

(1) 実施期間

第1学年火曜日クラス（計9回）

2021年10月5日～2022年1月18日

第1学年木曜日クラス（計12回）

2021年10月7日～2022年1月20日

(2) 実施場所

東京都立葛西南高等学校5階教室

(3) 対象生徒

東京都立葛西南高等学校1年生約20名

(4) 講師担当者（計7名）

上記表題に記載の学生で、いずれも教職課程履修者

(5) 教材

「とってもやさしい英語中学1年」(旺文社)
他及び講師作成教材

3 実施の様子

学生が3名で担当する形を基本とした。英語に苦手意識をもちながらも、校内寺子屋での授業を機に学び直しの意欲を示す生徒や、学習を諦めそうになっている生徒など、さまざまな生徒と向き合う中で、教職が単なる知識の伝達ではなく人を育てる仕事であることを痛感する貴重な機会となった。

4 実施してみたの気付きと感想

長いようであつという間に過ぎた4か月間でし

た。初めて生徒に向けて授業をする私は、さまざまな課題にぶつかりました。その中でも「生徒が答えやすいような発問を心がけること」「全員がその問題について理解すること」を最後まで意識して取り組みました。コロナウイルスの影響で少ししか生徒の皆さんと過ごすことができませんでした。貴重な経験になりました。（磯野 奨）

私は校内寺子屋で初めて教える立場になりました。最初は緊張して思い通りに授業ができないこともありましたが、講師同士で教え方や授業進度などを話し合い、情報を共有しながら生徒に分かりやすく教える工夫をしました。プリントや授業アンケートなどを自分たちで作りました。私は生徒のわかった！を聞くことでやりがいを感じることができました。（上原 二葉）

私は校内寺子屋に参加してみて、人に物事を伝えることの難しさを感じました。特に初回の授業では緊張して納得いくような授業をすることが出来なかつたり、生徒とコミュニケーションを上手く取れなかつたりといったことがありました。しかし回数を重ねるうちに少しずつ授業をすることにも慣れ、生徒と有意義な時間を過ごせました。（内山 瑞貴）

私は寺子屋を経験し、感じたことが2つあります。1つ目は、教えることの難しさです。友達に教えるのは異なり、過程や考え方を説明することが複雑に感じました。2つ目は、教師の大変さです。授業前に予習やプリントの準備はもちろん、生徒の考えを予想し、授業プランを練ることがいかに大切かを身に染みて感じました。（桑原 百蘭）

校内寺子屋では貴重な経験をさせていただきました。事前に授業範囲を予習し、授業用のプリントを作成し、黒板の前に立って、生徒の皆さんと

一緒に授業を作ることができたので、一回一回の授業が自分にとってとても身になるものでした。また、生徒の皆さんとたくさんコミュニケーションを取ることができたので、私自身たくさん元気をもらうことができました。(児島 晴香)

まず初めに、勉強を教えるということは簡単なことではありません。しかし生徒と触れ共に学ぶことで培うことのできることは言葉では表すことができない程に意義深く豊かなものであります。与えることだけが教育ではなく、生徒から与えられることにも大きな意味があります。私の寺子屋で得た経験は必ず今後の人生に活かされていけると確信しています。(小林 優汰)

この活動を通し、集団に教える立場の難しさを改めて感じました。全体の反応、雰囲気などを見ながら授業を進めていかなければいけないことを学びました。また、生徒の興味をいかに勉強に向かわせるかという点も難しくこれからの課題であると感じました。この活動で培った経験をもとに、さらに自分のスキルを磨き、良い教師を目指したいと思いました。(佐久間 陸人)

5 学校の感想

東京都立葛西南高等学校長 関山 勝之 先生
本校1年生を対象とする英語学習の放課後基礎指導「校内寺子屋」に7名の学生を派遣いただきました。苦手意識のある英語を、基礎基本から「年齢の近いお兄さん・お姉さん」が指導してくれることは、生徒にとって親近感と安心感があり、基礎学力の定着に結びつきました。感謝申し上げます。

1年 小西 和輝 さん
短い期間ではありましたが寺子屋での勉強は僕にとってとても良い体験になりました。

英語の授業を大学生の三人に教えてもらいました。はじめはどんな雰囲気なのか、どんな人たちが教えてくれるのかわからず少し緊張しました。しかし、笑顔で僕の質問にうなずいてくれ、生徒一人ひとりに優しく接してくれて安心しました。先生がずっと黒板を書くのではなく一つの問題に対してみんなが考える時間を確保してくれて、生

徒が間違っていたら生徒自身の力で答えにたどり着くようにフォローしてくれました。

1年 赤崎 匠 さん
僕は寺子屋に参加して良かったと思います。なぜなら寺子屋に参加してから定期考査で良い点を取れたからです。寺子屋では授業の復習をしてわからないところがあれば先生に聞いて、わかるまで教えてくれるから自分で理解でき、定期考査で良い点を取れているから寺小屋に参加してよかったと思いました。

6 2月5日当日の発表

2月5日のシンポジウムでは、外国語学部英米語学科2年上原二葉及び佐久間陸人が登壇して報告を行った。報告では、授業の準備や授業中で工夫したこととして、①生徒の学習定着度に合わせた補助教材を用意したこと(プリントなど)、②分かりやすい板書計画を心掛けたこと、③生徒と目線を合わせたこと、④生徒と一緒に授業を作ったこと、⑤授業改善のため振り返りを実施したことなどが話された。また、授業を受けた生徒の感想として、①年齢が近いため相談しやすい。②定期テストの前では寺子屋の時間でテスト対策を行うことができた。③復習を行うことの大切さが分かった。④少人数授業のため自分のペースで学べた。⑤あきらめないで学び続けることの大切さが分かったことなどが紹介された。



2021年度 浦安市青少年自立支援「未来塾」

参加学生	経済学部経済学科	4年 伊藤 正紀、中里 圭
		2年 村上 風日
	外国語学部日本語学科	2年 網中 萌恵
	英米語学科	3年 佐藤 向日葵、佐保 翼、椎葉 晴斗、高橋 凜 2年 内山 瑞貴、児島 晴香、手崎 龍之介、直井 乃々美 保足 晟吾、八代 涼花

1 はじめに

浦安市青少年自立支援未来塾は浦安市立中学校の生徒に対し、子どもたちの確かな学力の向上や学習習慣の定着を図ることを目的としている。

各中学校近隣の公民館を会場として、地域の教職経験者や大学生などが7月から3月までの間に英語と数学の2科目について15回の学習支援を行った。2021年度当初は両科目とも全19回の実施予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大にかかわる緊急事態宣言のために4回が中止となった。

2 年間の実施報告

本学学生が参加している会場についてのみ、実施日と参加者名（姓のみ）を示す。

(1) 英語教室

①美浜中未来塾（児島・矢代）

②日の出中未来塾（内山）

③明海中未来塾（佐保・鈴木）

①～③の実施日

2021年6月3日～2022年3月3日

隔週の木曜日 18:30～20:00

④高洲中未来塾（佐藤・高橋・直井・保足）

④の実施日

2021年6月2日～2022年3月2日

隔週の水曜日 18:30～20:00

(2) 数学教室

①堀江中未来塾（村上）

2021年6月8日～2022年3月8日

隔週の火曜日 18:30～20:00

②見明川中・富岡中未来塾（網中・村上）

2021年6月9日～2022年3月9日

隔週の水曜日 18:30～20:00

③入船中・美浜中未来塾（中里・児島・椎葉）

④日の出中未来塾（伊藤・手崎）

③及び④の実施日

2021年6月10日～2022年3月10日

隔週の木曜日 18:30～20:00

3 参加学生の感想



英語教室で指導する高橋 凜

(1) 英語教室参加学生

英語教室で私が受け持っているクラスでは英語の得意不得意、問題を解くスピードや生徒自身のモチベーションなどにバラつきがありました。授業の進め方は、最初の数回は問題集の範囲と時間を決めてこまめに出題をし、みんなが解き終わったらその都度一斉に丸つけと解説をしましたが、それでは物足りない生徒も出てきてしまったので、後半では範囲のみを決めて授業時間内に解き終わるようにすることを目標にしました。

早く終わってしまった生徒は学校の宿題や別の問題冊子に取り組んで個人差を埋める方法を工夫しました。英語が苦手な生徒も他の生徒の進捗状況に焦ることなく自身の学習に集中できるようになりました。また、得意な生徒はわからないところを自発的に質問してくれるようになり、授業時間を有効に利用できるようになりました。

（英米語学科3年 高橋 凜）

英語を教える支援員として初めて参加しました。中学生は思春期ということもあってか、あまり自分から話してくれない生徒からとても親しげに話してくれる生徒まで様々で、英語を教えるだけでなく、浦安市の中学生と関わることができたことが私の中でとてもよい経験となりました。

生徒が学校で学習している中でのつまづきを少しずつ減らしていくことに努力しました。生徒の英語力の向上をサポートすることで自分も成長できました。(英米語学科2年 八代 涼花)

最初はどうか教えたらいいいのかわからなく不安な状況でしたが、生徒と触れ合っていくうちにその不安が消えていきました。

指導内容を考えることに難しさを感じていましたが、生徒の「分からない」を「分かる」に変えたいと思うと気持ちが楽になり、今日は何を教えようかなという楽しみにかわっていました。生徒の満足度はわかりませんが、少しでも英語を好きになってくれた生徒がいれば嬉しいです。中学生の少人数を対象に教えました、教職を履修する上でいい体験になりました。

(英米語学科2年 直井 乃々美)

(2) 数学教室参加学生

私は美浜公民館にて、入船中学校と美浜中学校の生徒に数学を教えていました。90分は中学生には少し長い時間だったので前半と後半に分けて学習を進めました。前半では主に配布された問題冊子を使って数学を教えました。後半では数学以外の科目の学習をサポートしました。

最初の方の回では、コロナ禍の影響で学校での授業があまり進んでいないようで、新しいことを教えるのは難しい状況でしたので、私はこの未来塾は学習する場であるという意識を生徒に持たせるようにしました。今年度未来塾に取り組んできて学んだことは、勉強を教えることももちろんですが、中学1年生を相手にすることの難しさを感じました。

最初は静かに取り組んでくれていましたが、徐々に集中力が無くなる生徒もいましたので、こういった学校現場にも実際に起こり得る問題に対処す



数学教室で指導する椎葉 晴斗

るという経験がとても勉強になりました。

支援員の中には現職の先生もいて、適切なアドバイスをいただくことができました。将来教員を目指している身として、私自身とても勉強になりました。(英米語学科3年 椎葉 晴斗)

4 今後の課題と展望

今年度は英語教室も数学教室と同じ開催回数となり、参加学生にとっては継続的に中学生の学習支援を行えるようになった。また数学教室の支援員として、経済学部学生に加えて外国語学部の学生も参加した。また参加人数ものべ15名と、過去最高数であった。この背景には未来塾を経験した上級学年学生が、未来塾における経験がその後大いに役立つということを下級生に伝達する機会を設定したことがあると思われる。

明海大学側には参加希望者数が増えることは喜ばしい事実ではあるが、浦安市全体での支援員数に制限があることから、今後は希望者全員が支援員として採用されない可能性もあることを募集時に学生に周知する必要がある。



英語・数学の両教室で指導した児島 晴香

浦安市学習支援事業「ドラフトゼミ」

参加学生	外国語学部英米語学科 4年 佐久間 健祐、高橋 勇気
	3年 及川 龍之介、君塚 翔伍
	2年 磯野 奨、上原 二葉、川元 麻衣、桑原 百蘭、児島 晴香 小林 優汰、坂脇 海翔、手崎 龍之介
	外国語学部日本語学科 2年 三森 茉柊

1 はじめに

「ドラフトゼミ」は、NPO 法人ワーカーズユープが浦安市教育委員会の委託を受けて実施している学習支援事業である。小学4年生から高校3年生及び高校在学年齢までの子供がいる困窮世帯及び母子(父子)世帯を対象に、学習支援をはじめ、日常的な生活習慣、仲間と出会うことができる居場所づくり、進学に関する支援、高校進学者の中退防止に関する支援、子供と保護者の双方に必要な支援を実施している。支援を担当しているのは浦安市内の大学の学生が中心であり、明海大学からは、現在外国語学部の13人の学生(上記)が年間を通じて週3日間、夕方の時間帯に会場に赴いて支援を行っている。計120日間実施した。

2 実施方法

8月からは、NPO 法人ワーカーズユープの実施日程表に基づき担当学生を本学で各日2名ずつ割り当てていく方法をとった。

3 2月5日当日の発表

2月5日に開催したシンポジウムでは、外国語学部英米語学科4年佐久間 健祐及び同3年及川龍之介が登壇し報告を行った。以下は、その発表内容の抜粋である。

本事業は、貧困に置かれている子ども達や親御さんへの支援を行うものであり、生活困窮者自立支援法(平成25年法律第105号)に基づいて行われている事業である。

子ども達の抱える貧困問題の現状として、およそ7人に1人の割合であり、増加傾向にある。

その原因としては、少子高齢化、晩婚化、非婚化による単身世帯及び一人親家庭の増加に伴う世代間における貧困の連鎖、地縁(ちえん)、血縁によ

る繋がり希薄化による社会孤立などが挙げられる。

浦安市学習支援事業「3本柱」

- ▶ ①学習支援
- ▶ ②居場所作り
- ▶ ③社会体験

ドラフトゼミには、①学習支援、②居場所作り、③社会体験の3つの柱がある。

一つ目の学習支援では、基本的に1対1、もしくは2人を同時に見る形である。日頃の学校の宿題のサポートであったり、中学、高校、大学進学に向けた受験対策講座などの支援を行っている。

受験の筆記試験対策としては、公立高校の過去問題集を用いた模擬試験を行い、試験後の復習を行っている。

受験の面接試験対策としては、空き部屋を利用した面接練習を行い、入室から退出まで本番通りに練習している。

受験対策①：筆記試験

- ▶ 公立高校の過去問題集を用いた
模擬試験
+
試験後の復習

②居場所作り

- ▶ イベントを通じた内面的なサポート
- ▶ クリスマスパティー
- ▶ スポーツイベント

二つ目の居場所作りでは、イベントを通じた内面的なサポート、クリスマスパーティー、スポーツイベントなどを実施している。これらの場が子供たちの新たな居場所となってほしいと願っている。

三つ目の社会体験では、様々な職場での仕事体験、トリマー、新聞記者などの体験を行っている。これは、実際に仕事を体験できる機会になるため、子どもたちにとってプラスの出来事になっている。

③社会体験

- ▶ 様々な職場での仕事体験
トリマー、新聞記者など。

実際に仕事を体験できる機会になるため、子どもたちにとってプラスの出来事になっている。

また、高校進学者の中退防止に関する支援も行っている。

さらに、雑談の相手もするが、その時の子ども達の様子は大変生き生きとしている。雑談をする目的は、学習時間の合間で日常的な話を聞き、コミュニケーションをとり、信頼関係を深めることである。

新たな試みとして、実体験に基づいたプレゼンテ

新たな試み

実体験に基づいたプレゼンテーション

- ▶ オーストラリア語学研修
(2/2020)
- ▶ 人生に役立つ講義 (仮)
(3/2022)

ーションを行っている。一つは「オーストラリア語学研修」について行い、もう一つは「人生に役立つ講義」というのを予定している。

4 参加した学生の感想

英語を通じて生徒の力になれているという実感がある。子ども達から成績向上の声や学習に対する前向きな気持ちを聞くことが喜びになっている。英語で伸び悩んだ経験を活かし、今後も子ども達と向き合っていきたい。

(3年 及川 龍之介)

子どもたちとの向き合い方を知り、寄り添うことを大切にするようになった。自分たち大学生は根本的な問題の解決は出来ないが、内面的なサポートをして支えることは出来る。将来教員になる時のためにこの活動の時間を大切にしていきたい。

(3年 君塚 翔伍)

生徒と様々な話をしてコミュニケーションをとるうちに異なる視点から児童・生徒を見られるようになった。実際に英語の学習を支援している際、将来英語を使って働きたいという生徒も出てきているため、支援に熱が入る。今後も積極的に夢を叶える手伝いをしていきたい。

(4年 高橋 勇気)

学習支援に携わり2年が経過した。私を含む4年生は今年でボランティアを引退し次の世代に引き渡すことになるが、今後も何らかの形で学習支援のサポートに引き続き携わり、子供たちがより良い人生を送れるサポートができればと考えている。

(4年 佐久間 健祐)



9. 学生発表（グループ D）

浦安市小学校英語支援

参加学生	外国語学部英米語学科 4年 鶴沢 美里、江川 有紗、奥野 日菜 3年 池上 温哉、佐保 翼、鈴木 歩、武藤 美優、横田 裕哉
------	---

1 はじめに

本学は、浦安市教育委員会と 2017 年度に教育に関する連携協定を締結した。以来、現在に至るまで学生が市内の小学校の外国語の授業に参加して授業の補助等を行う取組みを実施してきた。

参加学生はいずれも教員志望の学生で、本学の「小学校英語基礎概論」の授業を履修した学生である。本年度もコロナの影響で開始が 10 月からとなったが、4校の小学校の協力を得ることができた。学校からは、児童と年齢の近い学生が参加することの利点などを評価していただくとともに、教職を目指す学生にとっては、教育実習だけでは得られない貴重な学びの場となった。

2 実施概要

(1) 実施期間

2020 年 10 月 19 日～2021 年 1 月 20 日

(2) 実施場所・実施時間

- ① 美浜南小学校 24 時間
 - ② 日の出小学校 2 時間
 - ③ 高洲小学校 23 時間
 - ④ 高洲北小学校 14 時間
- 合計 63 時間

(3) 参加学生

上記表題に記載の 8 名

(4) 主な取組

授業では、学級担任や英語専科の教員や ALT の求めに応じて対話の相手役をしたり、発音のモデルをしたり、ペアワークで児童の相手をしたり、児童への指示を手伝ったり、英語のゲームに参加したり、個別の支援を必要とする児童への援助を行ったりした。また、教材準備の補助をしたり、必要に応じて配布物の整理などの校務の補助を行ったりした。





3 学生の感想

この取組の成果として3点が挙げられる。

1点目は、行き届いた指導である。学級担任、英語専科、ALTに加えて学生が入ることにより、児童が気軽に発音方法を聞くことができたり、指示が通りやすくなっていたりしたと感じた。

2点目は、児童にとっての新鮮な出会いの場になるということである。大学生という普段とは異なった立場の大人と接することで普段とは異なった面を見せてくれるかもしれない。

3点目は、授業外での児童の様子を観察できたことである。児童を様々な視点から見守ることができた。
(4年 鶴沢 美里)

小学生は毎回元気で、私も毎回笑顔になることができた。ALTとのチーム・ティーチングの打ち合わせの仕方について、先生方の工夫を学んだ。さまざまな児童がいるので、個々の児童に配慮する必要があると感じた。

私は2校訪問したが、学校ごとに指導法の違いがあることを学んだ。「小学校英語基礎概論」の授業で学んだ知識を実際に活用することができた。

(3年 佐保 翼)

4 学校の感想

今年度は、新型コロナウイルスの感染を予防するために、学校では、来校者を制限しました。そのため、直接支援していただく機会をあまり取れませんでした。明海大学の学生さんが、低学年の外国語活動に加わり支援いただけることは、子供たちにとっても大きな喜びとなりました。心より感謝申し上げます。

(日の出小学校 校長 吉田 恵美子 先生)

今年度、明海大学の学生さんによる英語授業への支援をしていただきました。コロナ禍であり、3学期の支援は難しくなりましたが、明るく元気いっばいの学生さんは、前に立ってアクティビティーの手本を見せたりゲームに参加したりと大活躍でした。子どもたちも皆さんとの関わりを楽しんでいました。ありがとうございました。

(高洲小学校 校長 石橋 順子 先生)

ボランティアのみなさんとの英語での楽しいコミュニケーションを通して、児童は、より意欲的に外国語活動に取り組むことができました。本校の英語専科やALTと一緒にわかりやすく活動の説明をしたり、発音のモデルを示したりしてくれることで、児童一人一人の理解を深めることができました。きめ細やかな英語支援に感謝いたします。
(高洲北小学校 校長 鈴木 明美 先生)

5 2月5日当日の発表

2月5日のシンポジウムでは、外国語学部英米語学科4年鶴沢美里と同3年佐保翼が登壇し、本取組みの報告を行った。上記の活動内容のことや近年の訪問小学校数や訪問学生の推移、訪問の成果、感想などについて報告を行った。

年数	学生の参加人数	訪問先の数	時期
2018	22人	4校	通年 (5月~3月)
2019	16人	4校	通年 (5月~3月)
2020	15人	4校	10月~12月
2021	8人	4校	10月~

〈主な活動内容〉

- ・ T2, T3としての役割
- ・ 授業外の業務補助

2022明海大学「大学と地域連携の未来」シンポ... MEIKAI UNIVERSITY

2021年度 足立区英語マスター講座修了者によるスピーチ・プレゼンテーションコンテスト

参加学生	外国語学部英米語学科 科目等履修生 藤田 祐也
	4年 庭山 航瑠、嶋田 宗晋、五十嵐 彩音、江川 有紗 奥野 日菜、鶴沢 美里 高橋 勇氣 佐久間 健祐 矢吹 駿介
	3年 佐藤 向日葵、高橋 凜、及川 龍之介、加藤 天真 小林 悠太、椎葉 晴斗
	2年 上原 二葉、内山 瑞貴、川元 麻衣、児島 晴香 磯野 奨、桑原 百蘭、高橋 昂瑛、直井 乃々美 中川 綺乃、八代 涼花

1 はじめに

明海大学・足立区連携事業における「英語マスター講座修了者によるスピーチ・プレゼンテーションコンテスト」は足立区英語マスター講座を修了した者がその成果を発表とする機会を提供し、足立区の中学生が継続的に自分自身の英語運用能力を磨き、さらにその力を高める機会とすることを目的として2019年より開催されている。運営をサポートする英米語学科教職履修学生にとっては「英語を話すことの指導」について学ぶ機会となっている。

2 実施概要

(1) 実施日時 2021年10月31日(日)
午前9時から午後3時まで

(2) 会場 明海大学浦安キャンパス
成果発表会 2201 講義室
特別講座 2203 講義室

(3) 参加人数(発表者・補助学生・教職員)
発表生徒6名、発表学生4名
参加生徒保護者10名、足立区職員7名
明海大学補助学生 27名
審査員2名、METTS 教員4名
明海大学学長、足立区教育長

(4) 実施方法

新型コロナウイルス感染防止対策として発表者及び運営関係者のみの参加となったが、明海大学学長及び足立区教育長の臨席を得て発表者の士気を高揚することができた。

具体的な感染防止対策として、演台にアクリル版のシールドを設置するとともに、各発表後にはシールド、マイクをその都度消毒するなど徹底した対策を講じての実施となった。

本学英米語学科教職課程4年生が司会進行と会場での除菌作業を担当した。また、審査員補助や会場整備、記録写真撮影、オーディオ操作等を3年生が担当した。

開会式に続いて足立区から6人が発表し、続いて本学英米語学科教職課程2年生4人もスピーチを発表した。

午後には審査員を務めた本学多言語コミュニケーションセンターのパトリツィア・ハヤシ教授とタイソン・ロード准教授がコンテスト参加者を対象として論理的な理由づけをテーマとした特別講義を行った。

発表会プログラムは次の通り。

	発表タイトル 発表者氏名・所属学年
1	Is Japan really okay as it is now? ツダ ツグミ 区立第四中2年
2	My favorite thing to do シミズ ヨウヘイ 区立六月中2年
3	When COVID-19 over ナナオ ユズキ 区立第四中2年
4	Festival of Peace カジ ユリア 区立第六中3年
5	Let's change the official language of Adachi City to English モトジマ ヨシカズ 都立江北高1年

6	About online classes in Japan and the Philippines モトジマ ヒマワリ 都立晴海総合高2年
7	Why don't you go to the election? 内山瑞貴 明海大学2年
8	Writing a dairy 川元麻衣 明海大学2年
9	Put down your smartphone 上原二葉 明海大学2年
10	Review your eating habits 児島晴香 明海大学2年



参加した足立区の中高生

3 参加学生の感想

足立区の中高生たちにとって、大勢の前で英語スピーチを発表しさらに質問に答えるという経験は、これからの英語学習への関心意欲を深めるきっかけになったと思います。

私たち教職履修生にとっては、足立区の先生方や大学の先生方が、生徒たちの日々の努力を成功体験へと高めていく指導や行事の企画運営のやり方を目の当たりにすることができてとても勉強になりました。発表後の質疑応答で、回答に詰まってしまった生徒に対してパトリツィア先生とタイソン先生が即座に質問を変えて生徒から回答を引き出すことにより、生徒の自信や自己肯定感の確立に繋がったと思います。

私達は初めて英語での司会進行を経験し、短い時間の中で発表者とのコミュニケーションを図るといふ貴重な経験をさせていただきました。臨機応変な対応力が求められ、これから教員を目指す私たちにとって、気持ちが引き締まる時間でした。事後アンケートで司会者をほめていただいたということなので、とても光栄に感じました。

(司会担当 英米語学科4年 五十嵐 彩音)

4 事後アンケート結果

※「とてもそう思う」「そう思う」の回答を合わせて「肯定的」とした。

※「そう思わない」全くそう思わない」の回答を合わせて「否定的」とした。

※どちらの回答も全体に占める%で示した。

(1) 足立区からの発表会参加者及び保護者

質問	肯定的	否定的
この発表会に参加できてよかった。	100	0
自分が受けた賞に満足している。	100	0
明海大学の対応はよかった。	100	0
成果発表会全体についての感想・意見		
・は中高生の感想 ◇は保護者の感想		
<ul style="list-style-type: none"> ・とても緊張したが、よい経験になった。 ・大学生が優しくて楽しかった。 ・発表時に視線が下にしか行かず全然だめだった。 ・参加して英語への自信がついた。機会があればまた参加したい。 ・ネイティブの先生の授業が楽しかった。 ・ネイティブの発音に触れることができてよかった。 ・人前でスピーチをする機会がもっとあればいいと思った。 ・表現の方法を学びたくなった。 ・スピーチ原稿の添削やリハーサルのおかげでよりよいスピーチができた。(足立区に対する謝辞) ◇大学生が機敏に動いて会を進めていたのが良い印象だった。 ◇司会のメンバーが明るくて面白かった。 ◇コンテスト開始前にアイスブレイキング的な活動があるとよかった。 ◇学園祭が縮小されている中開催していただき感謝している。 ◇こういう機会を与えてくれたことに感謝します。 ◇学生さんたちの努力に感謝している。 		

5 成果と課題

マスター講座修了者の発表レベルが年々向上している。同時に司会を担当する4年生の英語運用能力も向上し、スムーズに進行された。中高生にとっても、明海大学学生にとっても有意義な事業であったと言える。

2021年度 足立区民対象生涯学習講座(英語)

参加学生	外国語学部英米語学科4年 高橋 勇気、矢吹 駿介
	3年 及川 龍之介、加藤 天真、君塚 翔伍、佐藤 向日葵
	佐保 翼、鈴木 歩、高橋 凜、武藤 美優
	2年 上原 二葉、内山 瑞貴、川元 麻衣、桑原 百蘭 手崎 龍之介

1 はじめに

足立区民対象の英語講座は、2020年開催予定であった東京オリンピック・パラリンピックに向けて2017年に足立区が独自で「おもてなし語学ボランティアブラッシュアップ講座」を開始するにあたり、併せて「初級英語講座」も開設することとなり、以降毎年5月から7月の第1クール、9月から11月の第2クールに各5回ずつの講座を行ってきた。

2020年度はコロナ禍の中で、講座開催は中止となったが、2021年度は第1クールには初級講座を、第2クールには中級講座をどちらもZoomを利用したオンラインでおこなった。

講師は第1回目から継続して明海大学教職課程センター・地域学校教育センター百瀬美帆教授と多言語コミュニケーションセンター教授パトリツィア・ハヤシ教授、タイソン・ロード准教授が務めてきた。また、すべての講座に明海大学外国語学部英米語学科教職履修学生数名が指導補助にあたった。

2 2021年度実施報告

※第1クール、第2クールとも実施はすべて日曜日の午前10時から11時30分までの90分。

両講座共通のタイトルは「アフターコロナ時代の海外旅行を応援『海外で役立つ英会話講座』」



第1回目講座 ロード准教授とハヤシ教授

(1) 第1クール

回	実施日	レッスнтаイトル	補助学生(姓のみ)
1	5月23日	At the Hotel	及川・佐藤・鈴木・武藤・上原
2	6月6日	At a Restaurant	及川・佐藤・鈴木・上原・手崎
3	7月4日	At the Clothing Store	佐保・上原・桑原・川元・手崎
4	7月11日	Traveling Smoothly: Problems at the Hotel	及川・佐藤・佐保・鈴木・武藤
5	7月25日	Our Ideal Tour	及川・佐保・鈴木・上原

(2) 第2クール

回	実施日	レッスнтаイトル	補助学生(姓のみ)
1	10月17日	International Cuisine	矢吹・佐藤・内山
2	11月7日	The Arts	高橋勇気・及川・君塚・佐藤・手崎
3	11月14日	Global Architecture	高橋勇気・及川・加藤・佐藤・上原
4	11月21日	Festivals	高橋勇気・及川・加藤・佐藤・高橋凜・上原
5	11月28日	Grand Finale	及川・君塚・佐藤・鈴木・上原

3 受講者事後アンケート

(1) 初級編 受講者アンケート

※受講者 23 名 肯定的評価 95%

- ・オンラインは初めてで、緊張したが、楽しく最後まで参加できた。
- ・ブレイクアウトルームなど少人数で受講することもできて、とても良かった。
- ・このレベル設定なら参加しやすいので、今後も実施してもらえると嬉しい。

(2) 中級編 受講者アンケート

※受講者 20 名 肯定的評価 58%

- ・こういう講座は初参加だったが、すごく充実していた。
- ・先生方が明るく楽しく盛り上げてくれて、楽しく参加できた。
- ・オンラインなのが少し残念だった。対面式の方がよかった。

4 サポート学生の役割と感想

これまでの対面実施の場合は、会場におけるグループ活動時にグループごとに1名の学生が入って活動の補助や、受講者の理解を促すサポートを行ってきた。オンライン講座においても同様に、受講者をブレイクアウトルームに分けた際に、各ルームに学生を1名ずつ配置してディスカッションの進行を第1の役割とした。第2の役割は初級講座において受講者が感じる不安感を学生が日本語を使用することで軽減するようにした。

5 サポート学生の感想

足立区民の皆さんがこの足立区民対象の英語講座で英語を学ぶ姿を見て、私自身が英語で話す楽しさや改めて学び直す必要があることに気が付きました。足立区民の皆さんはこの講座を楽しく受講されていて、間違いを恐れず堂々と話されていました。進行役として上手くまとめられるかという不安がありましたが、回数を重ねるうちに楽しく進行役を行えるようになりました。また、進行上で、言いよどんでしまったり、単語が出てこなかったりする場面があったので、英語は日々の積み重ねであることを学びました。

(英米語学科3年 佐藤 向日葵)

私は足立区民講座に数度参加し、足立区民の方々の英語対話力向上のお手伝いをさせていただきました。この講座は英語教育のノウハウを学ぶきっかけにもなり、教育者を目指す私自身にとっても良い機会だったと思います。

(英米語学科2年 手崎 龍之介)

6 見えてきた課題と今後の展望

オンライン講座にはつきものの接続に関する不具合や、提示された資料が見えづらい等の課題は今後改善に取り組みやすいが、学校や職場といった共通の活動母体を持たない一般の方々を対象としたオンライン講座には、講師側だけでは解決できないいくつかの課題が見えた。特に中級講座における課題をあげる。

(1) 受講者レベルのばらつき

対面でもオンラインでも、受講者の英語運用能力を均一化することは不可能だが、特にオンライン講習では受講者間の協力が生まれづらく、ブレイクアウトルームに参加するか否かも受講者側の意思に任されるため、講座途中から参加人数が減少するなどの問題が生じた。

(2) サポート学生の英語運用能力・進行技術

流ちょうな英語を話す受講者がグループ内にいる場合に、サポート学生が受講者の発言を理解できなかつたり、ディスカッションの進行に臆してしまったりする場面が見いだされた。毎回の講座前にはサポート学生に対して、進行の方法や英語の表現等を指導したがカバーしきれない場面もあった。しかしながら、こうした実体験が学生にとってはさらなる英語学修へのモチベーションとなったことは間違いない。

7 実施担当者の感想

足立区民講座でのサポート活動は、歴代の英米語学科教職履修学生が「参加してみたい」と願うボランティア活動のひとつである。学生にとって生涯学習を実践する受講者と交流する機会を得ることはとても貴重な経験であることは間違いない。

今後もこの事業が継続されることを願ってやまない。

参加学生	外国語学部英米語学科3年 及川 龍之介、佐藤 向日葵、高橋 凜、米元 拓海 2年 上原 二葉、児島 晴香
------	---

1 はじめに

MEIKAI-JOE プラスは、明海大学が文部科学省の委託を受けて行っている事業である。

(1) 目的

小学校外国語活動・外国語科が導入された新学習指導要領を円滑に実施するため、教師の負担を軽減しつつ、質の高い授業を行える指導体制を構築するため、2020年度に引き続き明海大学「小学校外国語科等講座」を開発・実施すること。

(2) 連携教育委員会

ア. 本学と連携協定を締結している自治体

東京都足立区教育委員会

千葉県浦安市教育委員会

秋田県横手市教育委員会

イ. それ以外の自治体

福島県いわき市教育委員会

新潟県妙高市教育委員会

(3) 受講対象者

上記(2)で示した教育委員会に属する公立小学校の教員等とする。

本稿ではこの事業に生徒役として協力した学生の活動について報告する。

2 実施報告

全10回の講座のうち、2021年8月2日に行った第3回講座において、講師1名が学級担任役、英語母語話者講師1名がALT役、学生たちが児童役を務めることにより、指導内容を模擬授業形式で紹介した。

(1) タイトル:

Chantsを活用したALTとのチーム・ティーチングについて

(2) 講師:

教職課程センター・地域学校教育センター

教授 百瀬美帆

明海大学多言語コミュニケーションセンター

教授 パトリツィア・ハヤシ

同 准教授 タイソン・ロード

(3) 児童役を要する指導場面

※以下学級担任をHRTと示す。

① 授業開始時のSmall talkにおける児童役

- ・学生が示すこと: ALTやHRTに対する反応と自然なやりとり



② Chantsの指導場面における児童役

- ・学生が示すこと: リズムに合わせてALTやHRTに続いてChantsを復唱すること。



3 受講者・参加学生の感想

(1) 受講者の感想

(講座評価アンケートの自由コメントより学生の参加に関わる部分を抜粋した)

- ・ぐるぐるが面白かったです。
- ・講師の先生方、協力してくださった学生の皆様、ありがとうございました。
- ・学生が実際にいてくださり、分かりやすかったです。
- ・実演を踏まえていただいたので、チャンツのやり方はよく分かりました。

(2) 児童役学生の感想

- ・児童役をすることによりALTと学級担任の役割を具体的に理解することができた。

- ・授業におけるポイントに気づくことができた。
- ・小学校における英語指導について興味を持った。
- ・他のボランティア活動を通して活用することができた。

4 実施してみたの感想

小学校における外国語活動・外国語指導が開始され、外国語指導を専門としない小学校の学級担任の中には教師自身の英語力不足や、指導法についての情報不足に悩みを抱えている割合が高いことを踏まえ、第3回講座は受講者に指導法を体験してもらえる内容とした。その中で、講師側が指導例を示す際に児童役が存在が不可欠であると考え教職履修学生に協力を仰いだ。その結果受講者側には「わかりやすかった」と評価され、学生側には小学校英語教育についての気づきを与えることができた。

学生の感想にある「他のボランティア活動を通して活用することができた」とあるのは、ここで得た知識や指導技術を足立区の小学生を対象としたあけみ英語村や浦安市の小学校英語教育支援の場においても活用することができたということである。

英米語学科教職履修学生のほとんどが中学校または高等学校の英語教員免許状取得を目指しているが、このような機会を得ることにより、机上で学ぶ小中高の英語教育の接続をより実践的に学ぶことができたはずである。

5 2月5日の発表と今後の課題

代表学生がこの活動についてシンポジウムで発表した際には、「小学校英語基礎概論で学んだ知識・技能を活用する場であった」「このような体験の機会をより多く与えてほしい」との感想と要望を述べていた。今後同様の「小学校外国語科等講座」が継続されるか否かは定かではないが、英語教員を目指す学生にとって、現職の先生方からの生き生きとした感想や意見を直接耳にしたり、自分たちが学修した知識・技能を実践する機会の提供を今後も担保していくことが今後の課題である。

発表スライドの一部



児童役の学生6人と講師3人

10. パネルディスカッション

◆大学生ボランティアの関わり方を探る ～ 社会に開かれた教育課程から考える ～

パネリスト

今村 亮 (桜美林大学 入学部(アドミッションオフィス) 高大連携コーディネーター)

田巻 正義 (足立区教育委員会 学力定着推進課長)

佐藤 幸司 (東京都立南葛飾高等学校長)

君塚 翔伍 (明海大学外国語学部英米語学科3年)

R.P.P.マドゥランガ・クマーラ (明海大学外国語学部英米語学科3年・スリランカから留学中)

コーディネーター

木内 和夫 (明海大学地域学校教育センター教授)



【木内】皆さん、こんにちは。ただ今から「2022 明海大学 大学と地域連携の未来シンポジウム」の後半のパネルディスカッションに入らせていただきます。私は地域学校教育センターの木内と申します。1時間という短い時間ですが、ご協力をよろしくお願いいたします。

ご存じのように明海大学は、足立区、浦安市教育委員会、東京都立高校、千葉県立高校との連携により年間を通じてさまざまな場面で大学生ボランティアを展開しています。残念ながら昨年、今年とコロナ禍の中、思うような活動ができなかったように思います。これからも続くであろうコロナ禍の中、明海大学の学生が活動できるボランティアを模索できるような話し合いができればと存じます。

今年のパネルディスカッションでは、本学の大学生ボランティア活動の在り方に対し、高大連携コーディネーターの視点、教育行政の視点、受け入れ高等学校の視点、参加した日本人学生の視点、そして参加した留学生からの視点から掘り下げることに

より、明海大学の今後の地域連携の在り方を探ってまいります。パネルディスカッションの中でご質問のある方はチャットに記入してお知らせください。

それでは最初に本日登壇していただきますパネリストの皆様から自己紹介をしていただきたいと存じます。トップは本日の基調講演講師の桜美林大学の今村亮様、よろしくお願いたします。

【今村】皆さん、こんにちは。桜美林大学で高大連携のコーディネーターをしております今村でございます。今、学生の皆さんからの素晴らしい事例報告を聞いて、ここまで幅広いラインナップのことをやっているのかということに非常にびっくりいたしました。

私自身も大学生時代に教育のボランティアをした立場として、今度のパネルディスカッションではここから先、どんな展開が広がっていくべきなのか、そして今の課題は何なのかということをもうちょっと掘り下げてお話しさせていただければと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

【木内】今村様、ありがとうございました。続きまして、足立区教育委員会の田巻課長、よろしくお願いたします。

【田巻】足立区教育委員会学力定着推進課長の田巻と申します。改めましてよろしくお願いいたします。



足立区では全ての児童に学力をきちっと身に付けてもらいたいということで、学校教育の中できちんとさまざまな手を打って、児童に学力を届けようということで取り組んでおります。その中で英語教育についても力を入れたいということでさまざまに言っているんですけども、明海大学の方は留学生が非常に多いということで交流授業を通して児童にさまざまな場面で英語を使う、話す、聞かせる場面を提供していただいております。

本日はそういったところのお話をさせていただいて、現場の様子をお伝えできればと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

【木内】田巻課長、ありがとうございました。続きまして、南葛飾高校の佐藤校長、よろしくお願いいたします。

【佐藤】皆さん、こんにちは。東京都立南葛飾高校の佐藤です。

私の学校をはじめとして都立高校5校、それから県立浦安高校、計6校がこの明海大学と高大接続連携協定を結んで、もう一番古い学校からは7年になります。この間、学生の皆さん、それから大学の先生方にさまざまな形でのご協力、ご指導をいただいております。本当にどうもありがとうございます。

南葛飾高校は東京都の在京外国人生徒募集枠の設置校となっています。毎年20名前後の外国につながる生徒達が入学してきます。この生徒達の日本語指導の部分で明海大学の学生の皆さんに、ご指導をいただいているところです。学校の教員だけでは得難い非常に生徒の気持ちに寄り添う授業ができております。本当に学生の皆さんには感謝申し上げます。

と思っております、その辺のところも含めまして、本日後半のところでお話をさせていただければと思っております。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

【木内】佐藤校長、ありがとうございました。続きまして、学生の君塚君、よろしくお願いいたします。

【君塚】英米学科3年の君塚翔伍と申します。よろしくお願いいたします。これまで3年間の中でさまざまなボランティアに参加させていただいたのですが、ボランティアに興味を持った理由としては、私は将来、教員になりたいと思っておりますので、その際にボランティアで実際に児童、生徒と直接触れ合うことができますので、彼らとの接し方だったりとか、勉強の教え方などを学ぶことができると思ったからです。

また、将来の理想の教員像を考える時に、実際に接している中でそれが見つかっていくんじゃないかというふうに考えていたので、ボランティアに参加することを決めました。本日はよろしくお願いいたします。

【木内】君塚君、ありがとうございました。最後は留学生のクマーラ君、よろしくお願いいたします。

【クマーラ】こんにちは。同じく3年の R.P.P.マドランガ・クマーラと申します。スリランカ出身で、2017年に来日し、明海大学日本語研修課程を修了して、現在3年に在学しています。

私が日本留学を希望したきっかけは、『おしん（番組）』を観たことで、日本語に興味を持ち始めて、高校で日本語を学んだことで日本留学をしようと考えて2017年に来日しました。短い時間ですが、本日はよろしくお願いいたします。

【木内】クマーラ君、ありがとうございました。ここからはそれぞれの視点、立場で、本学の大学生ボランティアについて掘り下げを行ってまいります。1人4分程度の時間をお願いいたします。短い時間だと思いますがよろしくお願いいたします。

それでは、最初に今村様からお願いいたします。

【今村】ありがとうございます。私、このパネルディスカッションでまずは掘り下げたい、お話を伺ってみたいと思っているのは、今、ご紹介いただいた君塚さんとクマラさん、学生の皆さんの成長についてです。

先ほどの事例発表でも4つのグループどれも非常に素晴らしい発表で、発表の仕方が上手というだけではなく内容が非常に充実しているなどということを感じました。そしてこのコロナ禍の中でもそのハンディキャップを乗り越えながら、時にオンライン化したり、時に感染予防に注意しながら現場に訪れたりしながら試行錯誤している様子が学生の皆さんを非常に成長させているなど非常に実感したところです。

なのでパネルディスカッションでぜひ伺ってみたいのは、学生の皆さんが先ほど事例発表では話し切らなかった本当はここがめちゃくちゃ苦労した、大変だった、みたいな苦労話ですとか、実は最初はもしかしたらすごくひよんな、ちっぽけなきっかけで参加したのかもしれないので、最初参加したきっかけは何だったのか、この辺りを伺えたらなと思っております。

また、あわせて、学生のボランティアがこのように成長して活躍している裏側には受け入れ側である高校の先生方サイドとしては佐藤校長、そして行政サイドとしては田巻課長の方でおそらく受け入れ側もいろいろと出番を整えておられたんじゃないかなと思ひまして、受け入れ側のこんな工夫が学生の活躍、成長につながったんだよという裏話も伺えたらなと思った次第です。

私からは以上です。よろしくお願いいたします。

【木内】今村様、ありがとうございました。学生への希望、それから学校サイド、行政サイドの希望も出ましたので、それを踏まえまして、説明をお願いいたします。

田巻課長、よろしくお願いいたします。

【田巻】私の方はスライドがありますので、実際どういう効果があったのかということも含めて簡単にご説明させていただければと思います。

こちらが連携の3本柱になっております。留学生・大学生と児童・生徒の交流というのが1つ目。2つ目は教員の人材育成の支援をしています。また、区民を対象とした講座ということで、3つの構図になっております。次のスライドですが、留学生・学生と児童・生徒の交流というところでは、あけみ英語村と言って、小学生の1学年丸ごとで大学に来てさせていただいて、実際の英語でのやり取り、コミュニケーションをするという授業があります。また、中学校に留学生をお招きして、そこでまた中学校で中学生と留学生の交流、英語でやり取りする、という授業がありますが、残念ながら、今年度はコロナ禍ということでしたので、オンラインでの交流となっております。今年度は4校実施しております。



こちらがあけみ英語村に参加した小学生のアンケート結果になります。オンラインでの開催ということで非常になかなか難しいトライアルな企画だったんですけれども、かなり肯定的な回答が見られております。

やり方を工夫することで目的は概ね達成できたのかなというふうに感じております。先ほど学生さんのスライドの中では大学から通信している様子が映されておりましたが、足立区の方ではこういう教室に児童が集まってということで大画面の前でやっている様子がうかがえます。

次のスライドなんですけれども、こちらが中学生との交流の状況で、やはり高い満足度になっております。英語が楽しただけではなくて、文化を実

感じたり、英語の必要性を感じたりもっと話せるようにということで、さらなる学習意欲の向上にも、動機づけにもつながっているのかなというふうに捉えております。

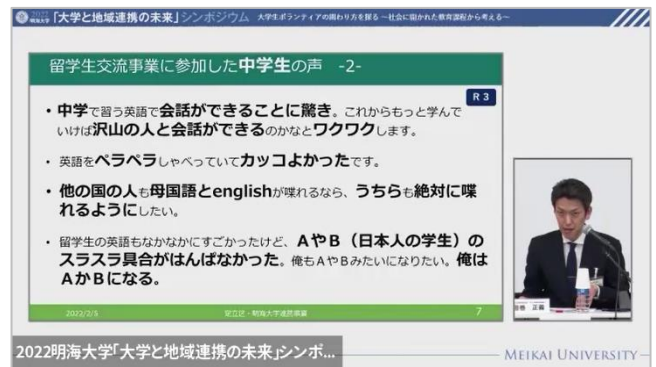
次なんです、数字的な部分に加えて、ちょっと具体的な声を拾ってみました。こちらは小学生の声なんです、「楽しかった」というのが圧倒的です。

その他にも「外国には行ったことないんだけど、紹介してもらって行きたくなった」ですとか、「少しだけでも自信が持てた」、あとは「英語で話すのは苦手だったんだけど、英語が好きになって話せるようになったよ」ですとか、「学生の皆さんはすごく優しいし、盛り上げ上手だなと感じた」なんて声が挙がっておりました。

また中学生が次のスライドになりますが、こちらもやはり「楽しかった」「英語がわかった」「伝わってよかった」「文化が知れた」というのがほぼほぼ共通して書かれていた声です。その他にも、ということで例えばですね、「海外の人と話すのは別格だ」と書いてあったりですとか、「海外の方とお話しする機会はなかなかないので緊張したんだけど、楽しんで学ぶことができた」といった声もいただきました。

次のスライドでは、「中学レベルの英会話力でこれが会話が続くというのが非常に驚いた」ということと、「これからもっともっと学んで、沢山のひとと会話がしたい」という声ですとか、あとこれは次なんですけれども、「英語をペラペラにしゃべれてカッコイイ」とか、「他の国の人も母国語と英語が話せるのであれば」、その前のスライドになります。はい、そうですね。「英語をペラペラしゃべっていてカッコイイ」ですとか、「他の国の人も母国語と英語がしゃべれるんだったら、自分達もそうになりたい」という声ですね。

これはおそらくですけれども、第1言語に加えて第2言語として英語をしゃべっている留学生の様子を見て、自分達と対比して見ているんだなというふうに捉えています。その次の一番下のところでは



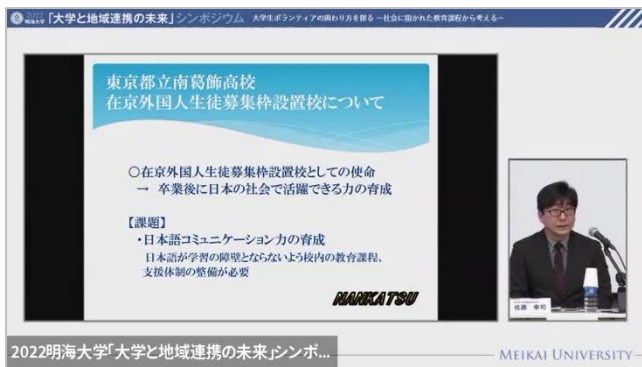
けれども、最後のAさん、Bさんというのはこれはおそらく日本人の学生のことを言っているんですけども、やはり学生がスラスラ話すという様子が、生徒達にとっては憧れにつながっているということが見受けられます。

まさにナナメの関係としての大人とか先生ではない、自分達により近い学生というのが、達成の実現性が、実現の可能性が高いというふうにですね、夢や目標につながり得るということを示しているのかな、そういったことが子供の声から拾えました。

次のスライドなんです、先ほど説明していただいたので、省略しますけれども、スピーチ・プレゼンコンテスト、ありがとうございました。非常に勇気をもって6名参加をしてくれましたし、また、学生の方もコンテストを勝ち抜いた学生さんがスピーチをしていただいて、これが非常に子供達の刺激にもなっていたと思います。

最後になりますが、次のスライドが区民講座の様子になります。こちらも先ほど説明していただきました、今年度はオンラインだったのですが、ちょっと写真がなかったものですから、例年対面式でやっている様子が写真でお示ししておりますけれども、ここでもやっぱりボランティアとして学生さんがうまく間に入ってくれることで、会が進行しております。学生さんにとっても多様な方との交わりがこういった場で経験できているのかなというふうに捉えております。私からは以上になります。

【木内】田巻課長、ありがとうございました。続きまして、佐藤校長、よろしくお願いいたします。



【佐藤】私の方は最初のところでもお話ししましたけれども、本校が在京外国人生徒の募集枠の設置校ということで、平成28年度から外国につながる生徒達が毎年大体20名前後入学してくる学校であるということで、少し日本語指導のところのお話を前半のところさせていただきたいと思います。

先ほどAグループの方で大変詳しくお話をいただいたんですけども、ちょっと補足させていただきます。

本校では在京外国人生徒の募集枠での入学生徒を校内的には在京生と読んでいますが、この在京生の募集資格がご覧のような3項目のどれかという形になっています。これは東京都の規定になっていますが、先ほど学生さんに指導していただいている田中さんのお話の中では、だいたいN2、あるいはN3ぐらいを目指す生徒を教えていただいているというお話でしたが、生徒によってはもう少し日本語の力がかなり厳しい生徒も毎年入学はしてきています。このような生徒達に、高校生活をしっかり送らせるためには、どうしても日本語のコミュニケーション力をつけていくことが最大の課題になっていきます。

従いまして、本校の課題になりますけれども、この制度によって入学してくるいわゆる在京生達には、卒業後にぜひとも日本の社会で活躍できる力を育成して送り出していきたいというふうに教職員全員で考えているところです。先ほど申しましたように課題としては日本語コミュニケーション力をとにかく育成するということが一番大きくなります。校内的にはその下に書いてある、日本語が学習の障壁にならないような工夫であったり、教育課程

の工夫、あるいは支援体制の整備なんかも課題にはなってきているようなところです。

いずれにしても、日本語力をつけるという思いで実は教育課程を組んでいるわけですが、昨年、文部科学省の方からは、日本語支援に関わるところで検討の会議からの報告書が出ています。

今後、日本語指導に関しては、特別の教育課程等を含めて、整備がますます加速していくであろうとは思われるんですが、現在のところでは本校で日本語の支援を、教育課程に位置付けているのはこの2つだけになってしまいます。

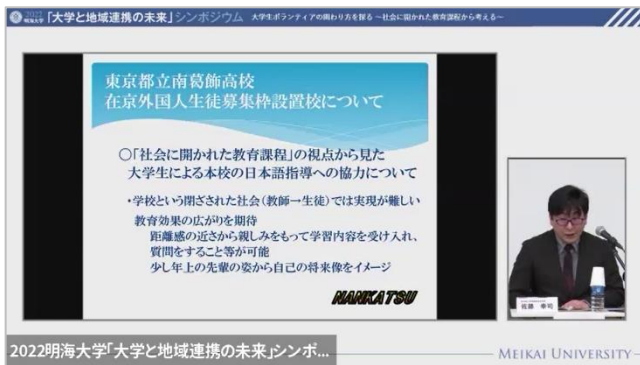
一つは1学年の学校設定科目、そのままの名前ですが、日本語コミュニケーション。これは在京生だけが選択する授業になります。週2回、6時間目の後、7時間目という形で1時間程度、日本語の指導をしています。ここが実は入学してすぐの非常に不安を抱えた生徒達、特に日本語能力、それから日本での生活に不安を抱えている生徒達にとって一番大切な授業になっています。この授業を明海大学の学生の皆さんにご協力いただいているということなんですね。そういう授業になっています。

あとは2年生の科目がありますが、基本的には全ての授業が日本語で展開していますので、入学当初の生徒達は大変苦労しています。古い写真なんですけど、7時間目と今お話しした授業の風景です。非常に少人数の形でもう少し細かく実際にはグループに分かれて授業を行ったりしているところです。

生徒達は我々教師から指導を受けるのと違って、大学生の皆さんから教わるということで非常に喜んで、親しみを持ってそして学んでいくことができます。先ほど言いましたような、入学しての不安というものが少しずつ解消していっている様子が本当に見て取れるところです。

本日のキーワードになりますけれども「社会に開かれた教育課程」というふうにそこに挙げましたが、先ほどの基調講演のところでも今村先生からお話がありましたが、今後新教育課程に移行していきます。その中でも重視されているのが、この「社会に開かれた教育課程」ということで、これまでも高

等学校は外部機関であったり、地域の方々との連携というのをずっと進めてきてはいるのですが、今後、さらに高校生が社会を切り開いていくための力、力量、あるいは資質、能力というものについて、教員だけではなくて学校外の皆さんとそれを共有して、そして協力を得ながら育成していくということにどんどんどんどん移行していくのであろうというふうに思っています。また、その取組をしているところです。



今行っているこの日本語コミュニケーションという授業を通して、これも基調講演のところでお話しいただきましたけれども、学校という空間、もちろん学校も一つの社会ですので、教師と生徒、あるいは生徒間という人間関係、あるいは先輩、後輩という関係で学ぶことは沢山あるんですが、それでも非常に限定されてしまっています。いわば閉じられた空間というような認識も持たれているかと思えます。これを開くことによっていろいろなさまざまな人間関係の中からより多くの視点から学びを進めていって、社会に出ていく生徒の成長を促していくというような形が非常に重視されています。日本語コミュニケーションの授業を見ていると、まさにこのような効果が非常に表れている教科かなというふうに思っています。

先ほど今村先生の方からナナメの関係というんですかね、お話をいただきましたけれども、生徒にとって大学生の皆さんは、少し先を、人生の少し先を歩く先輩というふうに映っているんじゃないかなというふうに思っています。この方々にお話を伺え、いろいろな助言を得ていくということが、非常にスムーズに学習を進めていくことができている理由になっているのかなというふうに思っています。非常にありがたいなと思っています。

本日のもう一つのキーワードの「ボランティア」ということですが、今までお話ししましたように、明海大学の学生の皆さんに支援していただいている授業というのは、彼らにとって非常に大きな意味を持つ授業です。それが学生の皆さんによって支えていただいているということなんですね。

これは本当にありがたいですし、やっていただいている学生の皆さんは本当に自信をもってもらえればなというふうに思います。ボランティアというもののなかで、まずご自身が社会に対してどれだけ貢献できているか、ということが自覚していただけるとありがたいなと思っています。

先ほど自己肯定感の話も出しましたが、本当に自分は非常にすごいことをやっているんだなというふうに思っていたらいいと思います。それと同時に、ご自身の価値観、それから他者、ここでは本校の生徒になりますが、他者の価値観というものも確認しながら進めていただければありがたいかなというふうに思っています。自分に対する優しさ、それから他人に対する優しさを学ぶ場がボランティアであり、その一つが本校の授業であると本当にうれしいなというふうに思っています。

win-win の関係というお話がありましたが、相互の学びの場、相互教育の場がボランティア活動であるというふうに思っています。少し長くなってしまいました。ありがとうございました。

【木内】佐藤校長、ありがとうございました。続きまして、君塚君お願いいたします。

【君塚】私の方からは、ボランティアに参加してみても考えたことや今、感じたことなどを話していければなというふうに思っています。



先ほど申し上げた通り、さまざまなボランティアに参加してきたんですけども、特に今回は、ドラフトゼミについて絞って話していければなというふうに思っています。ドラフトゼミは、先ほど学生の発表でもありましたが、貧困層の児童、生徒などが来ている場所になっています。片親だったりとか生活保護などを受けている子達が沢山来ている場所になるんですけども、そこに何回か行っている中で感じたことが、やっぱり今村先生からも先ほどお話がありましたが、自己肯定感が低い子が多いなというふうに肌で感じて、また勉強に対する意欲も低い子が多いという印象でした。そこでボランティアとしてどうやって接していけばいいのか、どうやって接していったら彼らのその自己肯定感や勉強に対するモチベーションが上がっていくのか、ということはずっと考えながら行ってきました。

その中で私達にもできるなと思ったことが、2点ありまして、1点目がやっぱり聞き役に徹するということですね。聞き役に徹して、彼らの今の現状や考えていることを聞いてあげることで、先ほど佐藤校長からお話がありましたけれども、大学生は少し先を歩く先輩だと思っているので、そのナナメの関係の大学生達が、話を聞いてあげることで、彼らのストレスや不満なども少しは解消されていくんじゃないかというふうに考えました。

2つ目は、大学生のこれまでの経験や今、価値観などを彼らにシェアしたりとか、話していく中で、児童や生徒の考え方の幅も広がって、それが自己肯定感を少しでも高めることにつながる、そう感じています。

話を聞くという点においては、学校でもユースソーシャルワーカーだったりとかスクールカウンセラーの方、いると思うんですけども、学校外でナナメの関係を築いていくことができるボランティアというのは、児童生徒や大学生自身にとってもすごく意義のあることなんじゃないかなというふうに感じました。以上です。

【木内】君塚君、ありがとうございました。それでは最後にクマーラ君、お願いします。



【クマーラ】ありがとうございます。私は明海大学の留学生を代表して留学生の異文化交流会にボランティアとして参加させていただいて感じたことをお話ししたいと思います。

私は 2019 年から明海大学の留学生としてさまざまな異文化交流会に参加させていただきました。私はこの3年間でボランティアとして参加したことは、やはりボランティアだけではなくて、共同学習のイベントに学習者として参加したと思います。今村先生の講演でも出てきたように、双方向の交流会になったことだと思います。

逆に留学生として日本というのはどこを見ても私にとっては異文化なので、現場に行って学生達と対面でお話することで、沢山のことを学ぶことができます。さまざまなボランティアのイベントでさまざまなアクティビティをやることで学生達から私達に質問したり、私達から学生に質問したりすることで、沢山のことを学ぶことができました。

また日本の学校というのは留学生としてはどのようなものか、自分の国とどのような違いがあるのかを現場でイベントに参加することで学ぶことができました。

また学生達はこれから社会人になったら、留学生、日本という国が沢山の国際交流で豊かな国なので、これからも交流を続けていけるような人材をつくるために私達留学生としてどのような交流をして、どのように支えられるのかを考えました。これからはコロナでなかなか対面の異文化交流会をすることが難しいんですけども、できれば対面で沢山のことを異文化交流会でお互いに学び合っていけたらいいなと思っております。

ありがとうございました。

【木内】クマーラ君、ありがとうございました。
私の考えではここからフリートキングにしようと思ったのですが、先ほど今村様から何点かご質問がありますので、それにお答えしてからにしたいと思います。

田巻課長さんと佐藤校長さんには受け入れに関しての苦勞話、こちらの方をお話したいと思っています。それから2人の学生に対しては、ボランティアに参加しようとしたきっかけと、人には言えない苦勞話、こちらの方を時間の関係で1分程度でお願いできればと思います。

【今村】苦勞話ばかり聞きたくてすみません。
よろしくをお願いします。

【木内】では田巻課長お願いします。

【田巻】我々としましては学校の規模とか人数、さまざまなんです。その場に合った内容を考えるということと、例えば学校も要望もさまざまです。

例えば、これはだいたい英語の授業での交流をやる、中学校なんかだと。場合によっては、全教科でチャレンジしてみたいなんてであると、例えば地理の学習の中で例えば産地の名産の食べ物と関連づけ、つながればわかりやすくとかやっていましたが、そういった内容の調整ですかね。

あとは、実際やってみて振り返ってまた毎年PDCA改善していくというところが実態なのかなと思っております。大学側としてはやっぱり、ボランティアの人を集めていただくというところが大変ご協力をお願いしているというところがございます。

【木内】田巻課長、ありがとうございました。
苦勞話だけではなく工夫した点もお話しいただけたと思います。佐藤校長も苦勞話だけだとお先真っ暗になってしまいますので、苦勞と工夫、この2ポイントでお願いいたします。

【佐藤】わかりました。正直申し上げて、A グル



ープの田中さんには申し訳ないんですけども、日本語の要するに語学力、日本語力だけを知識という意味で生徒達につけさせるのであれば、教員が話した方がいわゆる教授的な授業としては速いんだと思うんです。

だけれどそれは先ほどちょっとお話ししたように、知識はもしかしたら入るかもしれないけれど、定着したりとか使っていくという意味では非常に弱いんですね。それが学生の皆さんが教えてくださるとしみいるような日常の会話的な部分、ような関係で生きた言葉として伝わっていくというところなんです。

ですから、できるだけその学生の皆さんの良さが生きるような授業と、それからそれを今度は知識の部分で補っていく、そういう指導と、そこをミックスしてやっていく、どういうタイミングで入れていくかな、そういったところは担当の方ではかなりいろいろ研究しながらやっています。

でも、それは先ほども言いましたように、教員だけではやっぱり無理なものなので、丁度いい関係でやっていただけているなというふうに本当に思っています。こんなところでよろしいでしょうか。

【木内】佐藤校長、ありがとうございました。
では学生の皆さんに移ります。きっかけと苦勞話、お願いします。

【君塚】ボランティアに参加しようと思ったきっかけは、もちろん教員になりたいということもあるんですけども、一番最初に参加させていただいたのが、浦安市で行われている未来塾だと思うんですけども、未来塾、勉強を教えるという経験がそれ

までずっとなかったもので、それを経験できるという場を明海大学が提供してくださったので、これはもうやるしかないぞということで、すぐに参加を決めました。

苦労話なんですけれども、先ほどのドラフトゼミの例で言いますと、参加し始めた当初のころに感じていたことなんですけれども、中学生の子達が結構多く来ているんですけれども、中学生、彼らはかなり素直に意見を言ってくれるんですね。例えば「これわかんない」とか「先生、話つまんない」とか、結構ストレートに言ってくれるんですよ。

それが最初のころはかなり心にグサッと来まして、そういった経験が本当になかったものですから、かなり傷ついて苦労した話なんですけれども、現在では逆に素直にしっかり言ってくれるんだから、それをしっかりと受け止めて、それを改善に生かしていけばいいなというふうに現在は考えています。以上です。

【木内】ありがとうございました。ではクマーラ君お願いします。

【クマーラ】私がボランティアに参加するということのきっかけは、留学生として日本の中学校、小学校に行く機会はなかなかないので、学校からはそういう機会をくださったら、ぜひ参加するということがきっかけでした。

それでさまざまな中学校、小学校、高等学校に行って日本の学校は、日本の生徒と教師の関係はどういうものか、日本の学校はどんな形なのかを勉強することができました。苦労話というと、ほとんど英語で自分の国の文化の説明をするんですけれども、中学校、小学校の時は、簡単な英語を使っているんですけれども、もうちょっと面白くするためには日本語で説明したらいいのかなと思ったことがあります。以上です。

【木内】ありがとうございました。今村様、よろしいでしょうか。

【今村】はい、ありがとうございます。



【木内】ではここからはお時間を取りフリートークにしたいと思います。まずは、パネリスト相互の質問あるいは意見交換等ができればと思いますので、いかがでしょうか。では学生の君塚君お願いします。

【君塚】今村さんに質問なんですけれども、先ほどの講演を聞いていて、高校生だったりとかさまざまな大学生の動きというのをすごく活発に見えたんですけれども、その裏に絶対にいるはずの教員の動きというのがあまり見えなかったように感じて、自分はもちろん教員になりたいと思っていますので、今後、教員がどのように高校生達にアプローチしていったらいいのかというお考えを聞ければと思っています。

【今村】ありがとうございます。

私よりこれは佐藤先生にお答えいただいた方がいいのではないかと思いますので、ちょっとだけ申し上げて、佐藤先生にお渡しできればと思いますが、佐藤先生、奇しくも先ほど仰ったように、ある意味教員の方が上手であることは当然であって、教員がやった方が速いし正確な教授ができるけれどもそれでは定着しないという問題にこの「社会に開かれた教育課程」というコンセプトの中で佐藤校長先生はあえて自分達がやることにブレーキをかけ、自分達はつなぎ役になるということをお示しされました。まさにこの辺りなのではないかなと思うんですけれども、佐藤校長先生いかがでしょうか。

【佐藤】ありがとうございます。先ほどお話しした中身がまさにそうかなと思うんですけれども、要はどういう形で効果的にボランティアが生きるかな、お互いがね。というそのセッティングの部分

というのは当然工夫しますし、それからもう一つ、何よりも安全ですよ。ボランティア活動の中でももちろん教育効果もあるんですけども、まず安全をきちんと確保するというのと、そういった環境の部分についても配慮が必要です。かなり時間をかけて丁寧に整備していく必要があるかなと思っています。

【君塚】ありがとうございます。

【木内】ありがとうございました。他に質問ございましたでしょうか。ではクマーラ君、お願いします。



【クマーラ】田巻様に質問です。2019年と2020年は対面の異文化交流会に私達は参加をしたんですけども、そのあとはオンラインになってしまったので、これから感染対策を行う上で対面の異文化交流会を行うことが可能でしょうか。また、私は小学校、中学校に行く機会ができたんですけども、これから明海大学に入学してくる留学生達にもその日本の学校というのはどんな形のものなのかを経験させていただきたいと思っているので、これからは対面の異文化交流会を行うことはできますでしょうか。よろしくをお願いします。

【田巻】ありがとうございます。我々もやはり対面が一番心の部分も含めて交流としては意義があるものだと思っていますので、コロナ禍が落ち着けば、来年度ぜひ対面で学校に来ていただいたり、またこちらを訪問させていただいたりということでそちらを第一に考えています。

ただ、残念ながらコロナの終息が難しいということであれば、引き続きオンラインにもなり得るのかなと思っていますので、その辺は状況を見ながら

というのが一点です。

また、オンラインの良さというのも一つありまして、行ったり来たりすると1日がかりの作業になってしまうのですが、オンラインであればもしかしたら1時間単位とか小さな交流活動というのもできる可能性もあるなと思っていますので、そういった部分もいろいろと広げていきたいなと考えているところです。

【木内】ありがとうございました。他にいかがでしょうか。パネリストの皆様同士の意見交換の場として明海大学の今後の方向性を見据えた発言等いただければと思います。いかがでしょうか。

【今村】先ほど私の質問に皆さん答えていただいてすごくありがたかったです。特に君塚さん、クマーラさんのお話を伺って、2人とももう顔が教育者の顔になっているとすごく感じました。おそらく高校生のころまでは教育を受ける側という意識だったんだと思うんですよね。もしかしたら時には「学校つまんねえなー」とか「この授業よくわかんないなー」なんて思っていた時期もあったはずなのに、こうやって明海大学に入って、ボランティアの現場にもまれて「先生の話意味わかんない」と言われる側になってどんどん成長しているんだということがすごく実感をしたところです。

そこでちょっとむしろ今日進行いただいている木内先生にご質問できればと思うんですけども、これ、どんな秘訣があって彼らは、そして今日、今、私の目の前にいる今日発表いただいた皆さんも同じくなんですか。でも学生が教育者の顔になっていく、ここのスイッチが入る魔法みたいなものは一体何なのかというのをよかったらお教えいただければと思います。

【木内】わかりました。明海大学のボランティアに4年間、私、関わってきまして、まず感じたのは、これはまさに部活動ではないかという感じがしたんですね。

【今村】ああ、なるほどですね。

【木内】最初は各学校に派遣するだけでしたけれども、その間にいろいろな学生とのやり取りを通して人間的な成長を感じ取ることができた、まさにこの部活動効果が今の明海大学のボランティアにあるのではないかなというふうに思います。よろしいでしょうか。

【今村】ありがとうございます。もしよかったら、それを受けて君塚さん、これは部活なのか、どうお感じかお教えいただけませんか。

【君塚】そうですね。自分、中高はずっと部活で全力に打ち込んでいたんですけども。

【今村】何部ですか？

【君塚】ソフトテニス部です。

【今村】ああ、なるほど。

【君塚】で、今の発言を受けてなんですけれども、大学に入ってからサークルだったりだとか所属するものというのはたくさんあると思うんですけども、何か全力で打ち込めるものっていう、集団、自分が今感じているのは教職の集団が部活みたいなものすごく感じていて、その一部にボランティアの活動があるので、部活のような感覚で自分は熱中して取り組んでいます。以上です。

【今村】いいですね。キーワード「部活」、頂きました。ありがとうございます。以上でございます。

【木内】他はいかがでしょうか。まだ時間がございますので、田巻課長お願いします。

【田巻】すみません、引き続き君塚さんにお伺いしたいのですが、先ほど価値観を伝えていく、大学生として、より身近な存在として価値観を伝えていくことが自己肯定感の高まりにもという話だったんですけども、それにちょっと深くお話を聞きたいなと思いました。

【君塚】ありがとうございます。価値観についてなんですけれども、中高生が自己肯定感が低いことについて自分なりに考えがありまして、やっぱり学

校内で評価されるのって、スポーツができるとか、勉強ができるとか、あと強いて言うなら恋愛がうまくいくとか、そこら辺でしか周りから評価されることってないと思っていて、それだと、それらがうまくいっていなかったら、自己肯定感って絶対上がらないと思って、だから、それを大学生の立場だったらちょっと違う視点でもっと「こういうことが楽しいよ」とか「こういうことも社会に出たら評価されるんだよ」とか、そういう考えも生まれてきていると思うので、そういったものを話していくうちに、伝えていけたら、こんな学校だけではなくて、他にもいろいろな広い世界が広がっているんだよみたいな、そういったことで、自己肯定感が上がることにもつながるんじゃないかなというふうに考えています。以上です。

【田巻】ありがとうございます。

【木内】ありがとうございます。どうでしょうか。クマーラ君に対して質問を出していただけるとありがたいのですが、いかがでしょうか。お願いします。

【田巻】足立区に学校来ていただいていますよね。ご自分の国の学校と日本の学校の違い、驚いたところとかありました？

【クマーラ】そうですね、一番驚いたことは、日本の中学校、小学校の教師と生徒の距離が近い。スリランカは中学校、小学校で先生と言ったらちょっと怖い感じするんですけども、すごく楽しく授業しているのを見て、これが勉強にもなるし、落ち着いて学校を楽しめるなと思いました。それが一番驚いたことです。

【田巻】ありがとうございます。足立区の教員にも伝えていきたいと思います。

【木内】ありがとうございます。他、いかがでしょうか。お願いします。

【佐藤】今村先生にお聞きしたいのですが、多分学生の皆さんも聞きたいんじゃないかなと思うんですが、ボランティアに入っていく時というの

は、結局全く知らない人、しかも世代も違う方の中に入っていくことになるわけですね。

非常に不安を抱えながら入っていくんだと思うんですけども、そういう知らない方、あるいは世代の違いのある方の社会に入っていく時のコミュニケーションを取っていくためのコツというか、何かここがポイントというものがあったら教えていただきたいんですけど。

【今村】なるほどですね、ありがとうございます。私も普段は大学生ボランティアの活動場所を提供するコーディネーター役みたいなことをして、その時に意識していることが2つあります。

1つ目はボランティアの学生の皆さん自身は飛び込んでいく相手側に興味をもったり、相手方を好きになったりすることですね。やっぱりそれって相手に伝わりますので、この人は私達に興味をもって来て、目を向けてくれて、好きでいてくれるなど感じてくれることで相手からの本音がどんどん出てくると思うんですよ。さっき君塚さんが仰った、「授業つまんない」って言われたと落ち込んだと仰いましたが、あれはコーディネーター側から見たら大成功ですよ。怖い先生が来たならその人に「つまんなかった」なんて絶対言えないですから。なので、「今日つまんなかった」って言えるぐらい信頼関係がつかれるようになるためには相手を好きになって、その価値観を認めること。これがまず1つ目ですね。

あと、2つ目は、学校であれどこであれ、もしかしたら郷に入っては郷に従えみたいなことがある場合があります。が、私は大学生ボランティアの皆さんにおいては、それほどマナーとか郷に入っては郷に従えみたいなことを意識し過ぎない方がいい

んじゃないかと思ってまして、自分が、これが大事であると思うことをまっすぐ届けてもらう方がよいと思っています。

おそらく相手の、ボランティア活動ってアウェイの現場ですけど、その現場での立ち振る舞いは、例えば学校で言ったら先生方に勝るわけではないんですけども、そこで何か起きた摩擦みたいなものよりも、普段は起きない何かを届けることの方が100倍大事なので、その辺りが、もう思い切って飛び込むということが大事なんじゃないかと思っています。相反するようですけども、この2つのことを意識しております。以上でございます。

【佐藤】ありがとうございました。

【木内】ありがとうございました。それではここからはチャット、あるいはZoom参加者、会場の参加者から質問を承りたいと思います。現時点ではチャットは来ていないということですね。では、Zoomでの参加者、あるいは会場参加者からご質問等を承りたいと思いますが、いかがでしょうか。はい、学生から1人、手が挙がりました。どうぞ前へお越しください。記録の都合上、所属とお名前をお願いいたします。

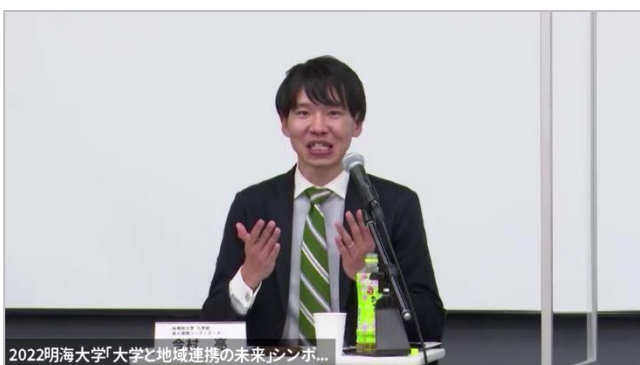
【上原】外国語学部英米語学科2年の上原です。今回はパネルディスカッション、とても勉強になりました。質問なんですが、今村さんに質問があります。基調講演でナナメの関係というのをすごい教えて、学んだんですが…、そうではなく質問変えさせていただくんですけど。

【今村】大丈夫です。

【上原】ありがとうございます。学生が背伸びをしているいろいろなことに立ち向かって、それを大学生が支えるというのを仰っていたと思うんですけども、その時に、何だろう…。

【今村】その時に大事になること、みたいな。

【上原】そうですね。ありがとうございます。大事になることはありますか？



【今村】ありがとうございます。まずこの話の前提は、社会に開かれた教育課程という大きなコンセプトがあり、春から教科、科目も再編成され、探求という学習者主体の学び方というのが中心に据えられるという前提があります。

その中で、学校の在り方、先生方の在り方も、佐藤校長先生が仰ったように、先生が教える、ではなくて、先生がコーディネート役になるような学校教育とまたは、地域との連携というのがこれから広がっていくということがあります。

その中で、今、全国でどんどん起き始めているのは、自分でこれを学ぼう、自分でこれを探求しようと思い始めた中学生、高校生がどんどん地域に飛び出して活動するということです。

この時に、おそらくこの流れの中でも大学生ボランティアの皆さんがすごく重要になっていまして、皆さんがおそらくこれから問われていくのは、正に君塚さんが仰ったような、聞き役としての在り方、また佐藤校長先生が仰った、そこでの安全の確保になると思います。誰かを動機づけるという関わり方よりも、動きだした誰かが自分で進みながらも道を踏み外さないように、そのエンジンを応援しながら、横でこっそりサポートする、こんな在り方が必要になってくるんじゃないかなと予想しております。以上です。

【上原】ありがとうございます。

【木内】チャットから質問が出ましたので質問者はよろしくお願いいたします。画面に向かってお話を。直接こちらでお願いします。所属とお名前をお願いいたします。

【大池】明海大学の池と申します。よろしくお願いいたします。今日は貴重なお話をありがとうございました。

君塚君とクマーラ君、そして今村先生にお聞きしたいのですが、先ほどちょっとありましたけれどもやはりボランティア活動って若い人達からすると、ちょっとハードルが高い、ちょっと面倒く

さいなというような気持ちがしないわけでもない。

で、これからの君塚君、クマーラ君のように、学生、留学生がこの次の世代、つまり下級生と同じ経験をぜひとも経験してもらいたい、そう今、思っていると思うんですけども、そういう時にどうやって下級生、新しい留学生をボランティア活動に誘い込めるかどうか、ちょっとそこら辺のヒントを頂けると助かります。

今村先生にも同じような主旨で未経験者にどうやってアプローチしていくか、ということをお話してヒントを頂けるとうれしいなと思います。よろしくお願いいたします。

【木内】最初にでは学生の方から。では君塚君から。



【君塚】これは「カタリバ」の活動について、自分でもちょっと調べていて、それで学んだことなんですけれども、さっき言っていたように、カタリバってより部活みたいな感じというふう感じたんですね。その時にカッコイ先輩、先に参加していた方達の姿を見て、後輩もよりやる気が出たみたいなことがあったというふうで、それは明海大学のこのボランティアでも生かせるなというふう思ったので、例えば現在だったら寺子屋は先輩と後輩が組む形もあると思いますし、他にもいろいろなボランティアで先輩と後輩が組むみたいな形にしたらかッコイ先輩を見て後輩ももっと頑張ろうとかこれをまたその後輩に伝えようみたいな、そういう流れができていくんじゃないかなというふうに、今、感じています。以上です。

【木内】ありがとうございます。クマーラ君お願

いします。



【クマーラ】私は後輩にボランティアに参加させてもらいたいと思うのは、参加させてもらうために後輩に私は経験してこんな利益がありましたよ、こういうことができましたよ、いつか日本で生活する時はこのようなことが役に立ちますよ、みたいに後輩に伝えていけたら、参加してもらえと思っています。

例えばこの間のオンラインの交流会の時、ある中学校でやったアクティビティが「Do you know that city?」「Do you know this person?」みたいな日本の都市とか日本の有名な人とか紹介してくださって、すごい勉強になりました。

それはいつか日本で生活する時に役に立つので、そういうところを後輩達にも紹介してあげて、ぜひ参加してもらいたいなと思っております。ありがとうございました。

【木内】ありがとうございました。今村様お願いいたします。

【今村】ありがとうございます。お二人のご意見、まさにその通りです。先輩が後輩のモチベーションに火をつけると、カッコイイ先輩に憧れる、これが大事であるということは間違いなく、先ほど部活という比喻がありました。部活で皆さんが経験したメカニズムには大いにヒントがあると思います。

そこに補足するならば、実は大きな問題が1つあって、今、おそらく佐藤校長先生の南葛もそうなんじゃないかと思うんですが、今の皆さんの後輩世代は新型コロナウイルスで十分な部活動を経験していません。

なので、「部活のようにやろう」というそれだけで通じるこの暗黙知が通用しない後輩達が入ってくる時には、おそらくもう1つ、さらなる工夫が必要になると思いますので、その小さな世代差ですが、このジェネレーションギャップにぜひ注意しながら後輩達を迎えてほしいなと思います。以上です。

【木内】ありがとうございました。エンドレスで続けたいところですが、時間がきてしまいました。本日はご多用の中5名のパネリストの皆さんには明海大学にお越しいただき、これからの明海大学のボランティアの在り方について明確にさせていただきました。ありがとうございました。

以上を持ちまして、2022年パネルディスカッションをお開きとさせていただきます。ありがとうございました。

11. 閉会式

11-1. 足立区教育委員会 教育長 挨拶：大山 日出夫 ※リモート登壇

皆様こんにちは。ただ今ご紹介をいただきました、足立区教育長の大山でございます。まずは明海大学の先生方、学生の皆様方には、日頃から様々な事業で、足立の子供達のためにご理解とご協力をいただきまして本当にありがとうございます。

本日は午後、半日ではございますけれども、久しぶりのシンポジウムということで、私も勉強させていただきました。

今村先生のお話の中で、大学生ボランティアについては「ちょっとだけ未来を生きる年上の先輩」、この「ちょっとだけ未来を生きる」という部分が非常に良い言葉だなという風に思いました。

支援をする側とされる側が分断されるのではなく、お互いに win-win の関係になるという話を聞いて、学生の皆さんの発表も聞かせて頂きました。

その中で先程もありましたけれども、外国人への日本語指導ですとか、生活的に苦しいお子さんへの勉強の対応などと、今、教育委員会でも抱えている、本当に難しい課題に最前線で取り組んでおられる

ということで、本当に頼もしいなという風に感じました。

最後のディスカッションでは、君塚さんから、「聞き役に徹するんです」というところから、また子供達に新たな視点を、ものの見方を教える存在になるというようなお話も聞いて、本当にありがたいお話だなという風に感じました。

引き続き今後も、足立区の子供達、また日本の子供達のために、是非今日参加をされた学生も頑張っていたいただければなという風に思います。

半日勉強になりました。ありがとうございました。



11-2. 閉会挨拶：明海大学 副学長 高野 敬三

ただいまご紹介頂きました、明海大学 副学長の高野と申します。閉会にあたりまして、私のほうから一言、本日ご参加いただいた皆様方に御礼の言葉を申し上げたいと思います。

2022 明海大学「大学と地域連携の未来」シンポジウムに本日ご参加いただきまして誠にありがとうございました。

本日は、今村先生から基調講演をいただいたあと、学生の発表ということで、会を進行させていただき、締めはパネルディスカッションというかたちで、今まで執り行ってきたところでございます。今村先生からは、基調講演で「ナナメの関係」ということで

お話をいただきました。

この言葉は、かなり前から使われていた言葉でございますけれども、やはり本音でコミュニケーションができるというのは、「タテの関係」でもなく、「ヨコの関係」でもない、「ナナメの関係」でいくことが大切であるというような意味合いかと思えます。またボランティアの意義について、様々な大学生ボランティアの全国事情につきましてもご紹介いただき、ご自身が取組をされてきたことについて、経験を踏まえて示唆のある発言をいただいたところではあります。

ボランティアの意義、先生は「伝播」「触発」「連

鎖」ということでおっしゃっていましたが、やはり、いかにそのボランティア活動を **Expand** して行くのか、触発する、**Inspire** して行くのか、そして連鎖、**Chain**、**Connect** して行くのか、こういったことが非常に大切である、意義があることであるということではございますけれども、一方でやはり課題としての「報酬」、お金の件ですね。有償、無償のボランティアということでの話かと思えますけれども、あとは「継続性」「支援体制」ということでお話がありました。

この「支援体制」のことにつきましては、ディスカッションで議論を進めていただき、また「継続性」ということに関してもお話をいただいたところでございます。

特に学生の方から、継続するためには何が必要なのか、特に先輩後輩、先輩の「ボランティアの楽しい姿」を後輩に伝えていくということが、事業が長く続くことであるという意味合いでお話をいただいたと思いますし、支援の関係であれば、やはり学校ないしはボランティア先のところで様々な工夫をいただいている、こういったことが行われていないとなかなか成長していかないというようなことで、パネルディスカッションにうまく繋がったと私は考えております。

「社会に開かれた教育課程」ということがサブテーマであったわけですが、今後の学校教育では、やはりお話にありましたように「探究」というのがキーワードでございます。

「探究の活動」「探究の学習」をする上では、学校だけでは十分に機能していかない、様々な社会人、あるいは学生、あるいは様々な地域人材が学校に関わっていかないと、この「探究」という活動ができないものだと改めて今日、パネルディスカッションでも確認ができたところかと思っております。

今後、明海大学が更に地域連携を進めていく上で、今日は非常に参考になるお話をいただいたとともに、学生の発表、そしてパネルディスカッションが行われたかと思っております。

ご参会の皆様方にとられましても、満足の行く会であったのかと信じて、本日は会を閉じさせていただきたいと思えます。

来年また、「2023 大学と地域連携の未来」を明海大学で開催をさせていただきます。どうぞその際は、ご参加いただければありがたいと思ひまして、私からの御礼の言葉と、お願いということで、会を閉じさせていただきます。

どうも、本日一日ありがとうございました。



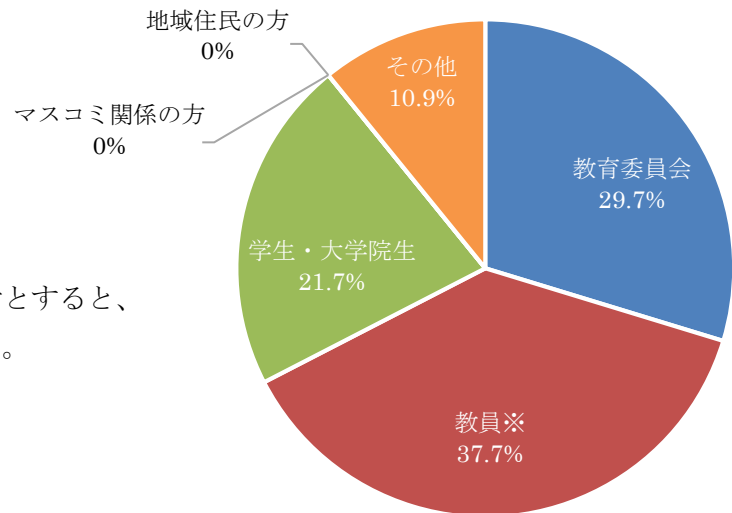
12. アンケート

◆所属を教えてください。

教育委員会	52
教員※	66
学生・大学院生	38
マスコミ関係の方	0
地域住民の方	0
その他	19
計	175

※（小学校・中学校・高等学校・大学等）

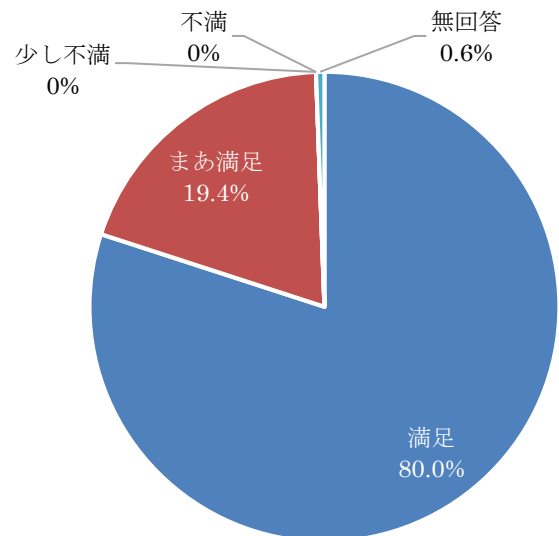
・教育委員会を、昨年の教育機関関係者とする、教育委員会、教員の参加が増加している。



◆基調講演はいかがでしたか。

満足	140
まあ満足	34
少し不満	0
不満	0
無回答	1
計	175

・高い満足度を示している。
 ・切り口である「ボランティア」、その関わり方である「ナナメの関係性」について、新たな見方、考え方であるとの肯定的な意見が多数見受けられる。

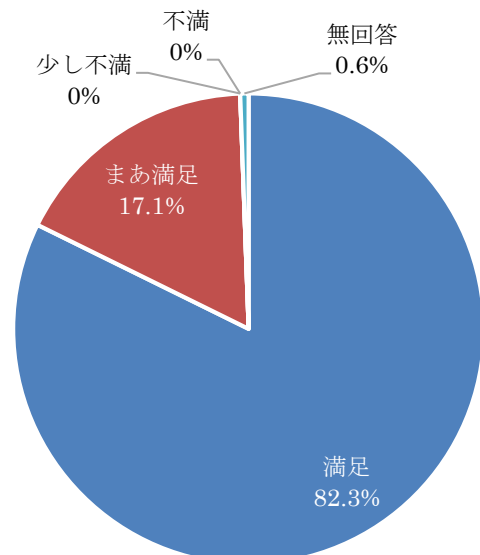


◆学生発表はいかがでしたか。

満足	144
まあ満足	30
少し不満	0
不満	0
無回答	1
計	175

・新たな試みであった学生発表は高い評価を受けている。取組む学生の姿勢や資料の見やすさ等について評価されていることが自由回答から読み取ることができる。

・個々にもう少し丁寧な総括があると、さらに良いという意見もあり、今後の発表形式の改善点の一つであると思われる。

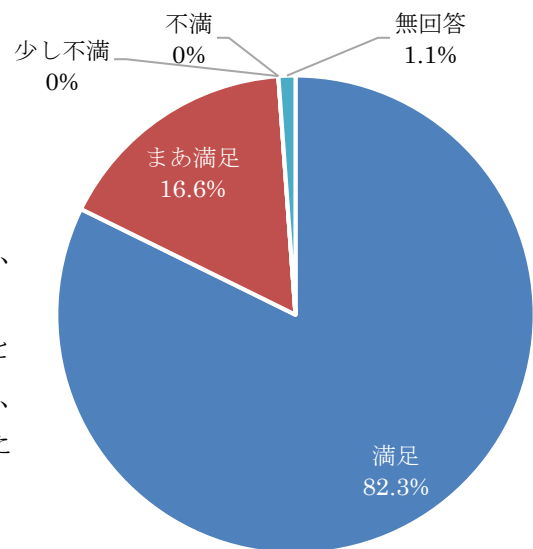


◆パネルディスカッションはいかがでしたか。

満足	144
まあ満足	29
少し不満	0
不満	0
無回答	2
計	175

・毎回高い満足度を示しているパネルディスカッションだが、今回も同様の結果となっている。

・パネリストそれぞれの視点での考え方、発言が知れたことについて評価する自由記入が多いのは、学生から基調講演者、教育委員会、校長先生への質問等、活発な意見交換が見られた点ではないかと考えることができる。



◆Zoom によるオンラインで参加した方にお聞きします。

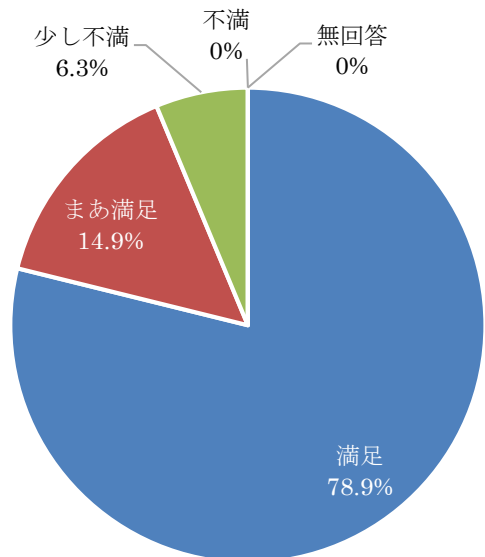
映像や音声などの配信はいかがでしたか。

満足	138
まあ満足	26
少し不満	11
不満	0
無回答	0
計	175

・配信に関する満足度は昨年並みだが、少し不満のポイントが上がっている。

・ノイズによる聞き苦しみの指摘があるが、視聴者のマイク ON によるノイズは Zoom ミーティングでは 100% 制御できない為、著しく視聴者に不快感を与えているようであれば、Zoom ウェビナーでの配信の検討も必要である。

・配信環境、回線の安定性については、特に不満の意見は見受けられない。

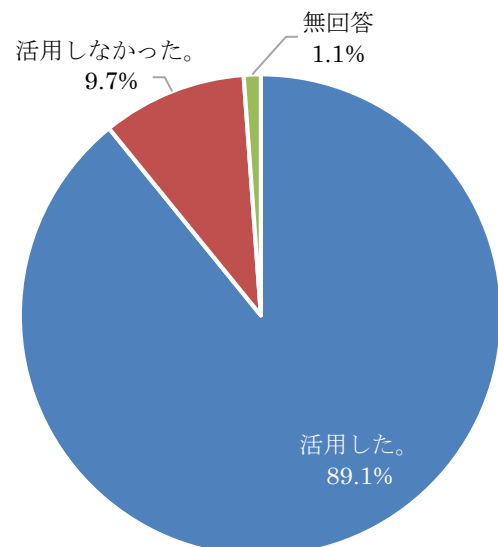


◆配布資料（リーフレット）は活用されましたか。

活用した。	156
活用しなかった。	17
無回答	2
計	175

・活用したという意見が大多数である。

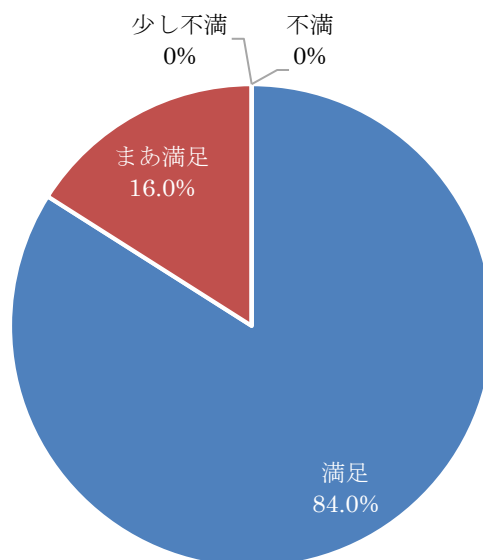
・一方、少数ではあるが、気付かなかったという意見も確認できることから、告知と活用の促しについては、強化する必要があるかもしれない。



◆総合的に見て、本シンポジウムにご満足いただけましたか。

満足	147
まあ満足	28
少し不満	0
不満	0
計	175

- ・高い満足度を示している。
- ・大学生主体での開催についての評価や、学生視点での発表といった、今回チャレンジしたコンセプトについての評価する意見が多く見受けられ、受け入れられたことを示している。



【基調講演 自由回答】

- 新しい発見があった。
- 中学生を担当する立場として、ボランティア活動や地域との関連等、いろいろと考える・見直す視点をいただきました。
- 学生ボランティアに講演にあったようなアプローチがあることを初めて知りました。ななめの関係の意味がよくわかりました。
- 様々なご経験からのお話が良かったです。
- 普段のボランティアの何気ないことだけけど重要なことがわかった。
- 「ナナメの関係」という新しい視点に気づくことが出来ました。そのうえで「タテ」の信頼関係がしっかりしてこそその「ナナメ」の確立であると考えました。
- 学生の取組がよく分かるとともに、成果と課題も明確であった。基調講演とシンポジウムは連動しており、話を深めることができました。
- 身近でかつ重要な課題に、具体的に講義をいただいた。
- 大変参考になった。
- オンラインで参加させていただきましたが、あっという間に時間が過ぎるような、構成、内容ともに大満足です、貴重な時間となりました。ありがとうございました。
- 学校における学生ボランティアは教員の補助ということではなく、教員と生徒、または生徒同士の関係性では得られない教育効果があることを再認識できた。
- Zoom で参加しましたが、終始考えさせる内容で、ボランティアについて考え直すきっかけになりました。
- 具体的な取組が紹介されて、参考になった。
- 高大及び中大連携の意義と様々な取り組みが理解できた。
- これまでの歩みとこれからの方向性について、非常にわかりやすい説明だった。
- とてもためになりました。
- 今日は貴重なお話を聞かせていただき、ありがとうございました。「ナナメの関係」、これは学校教育において求められる存在かもしれません。先生のお話の中に、地域や近所などつながりが多い子の方が自己肯定感が高いとありましたが、小さいころに育った感性がベースとなり、人とのかかわりを作っていくと思います。たとえ小さいころにそう言った経験がなかったとしても、親や先生でもないちょっとだけ未来を生きる大人の先輩とのかかわりをおして、未来を生きる子供たちを取り残さないような環境を作っていくことはとても大切だと感じました。「私もなにかやりたい」と思わせるような取り組みをなさっている先生の活動がこれからの子どもたちを作っていくと思いました。
- カツオ君の例がとてもわかりやすく、一層内容に引き込まれました。
- わかりやすい例を出しての説明で立ち位置の把握などが容易になったためすんなりと聞けた。
- 少し先をいく先輩の背中をみせるような「ななめの関係」としての、ボランティアの存在の価値や意義について概説いただき、大学生の学校支援ボランティアの意味を振り返ることができました。
- 普段聞けない話が聞けた。

【学生発表 自由回答】

- 学生のプレゼンに私のプレゼンで活かせる部分を見つけることができた。
- 自分の都合でAグループの発表までしか視聴することができませんでしたが、大学生がひたむきに頑張っているその姿勢、誠実さが伝わってきて、自分も頑張らねば...と元気と勇気をもたらしました。
- ここまでの準備、練習に時間をかけて臨んだのではないかと思いました。このような大きな場面での発表は、良い経験になると思います。
- 田柄高校も含めてご報告いただき感謝いたします。
- 大学生が中高生との交流を通し、成長されている様子が伝わり頼もしさを感じた。
- 学生の皆さんの真摯に取り組む姿勢が伝わってきました。
- それぞれにもう少し丁寧な総括があると、さらに良いと思いました。
- 本校での支援等に協力をいただいている。
- 学生の皆様の発表もとてもわかりやすく、勉強になりました。ありがとうございました！
- 各校における学生ボランティアのニーズや実態、今後の課題が分かりやすかったので。
- 緊張を見せずにハキハキと喋っていてかっこよかったです。資料も見やすくわかりやすかったです。
- 貴学の教育に係る実践事例について実践した学生自身がプレゼンしていた。
- 明海の学生として誇れる学生ばかりだと感動しました。
- 学生が主体的に諸活動に取り組み、そこからの学びを今後につなげようとしている姿が見て取れました。とても立派でした。それぞれ時間が短く、伝えきれなくて悔しい思いをしているかもしれませんね。もっと詳しく、うまくいかなかった点や今後の取組について聞きたいと思いました。
- 活動した内容を簡潔にまとめることができいて、内容に興味を持って聞くことができた。
- 皆が頑張っているのを見て、自分も頑張ろうと思った。

【パネルディスカッション 自由回答】

- わかりやすい内容であった。
- 部活動というボランティア活動のヒントは面白いですね。
- 大学と地域や小中高との連携について、それぞれの視点から本音の部分でお話を伺えてよかった。
- 学生の方お二人のボランティアに向かう姿勢を力強く感じました。
- 少々一人ひとりの話が長く、議論の時間が少なかった。
- 様々な課題や取組に貴重な意見が拝聴できた。
- お立場の違う方からのご意見、ご感想が聞けたことがとてもよかったです。
- 高等学校における日本語支援を学生ボランティアが担うことで、生徒の学習意欲が高まるとともに、来日して間もない外国籍生徒の相談相手になっていることを再認識し、明海大学との連携の重要性を実感した。
- それぞれの視点で議論をしていく中で、前に発言した人の内容を踏まえていてすごいと思いました。自分の体験を交えていて説得力を感じました。
- それぞれの組織のリーダーと連携に取り組んでいる学生等の考えが理解できた。
- それぞれの視点で、話を聞くことができた。
- 本当に楽しかったです。
- パネリストそれぞれの視点から話を聞くことができました。学生がパネリストにすることで、学生視点の考えも聞くことができたことがよかったと思いました。
- パネルディスカッションを聞いて自身がどのように関わっていくのが良いのかを考える際に助けとなる内容だと思った。
- 学習支援の継続に向けた課題についてのヒントになる対話でした。学生さんが、自分の言葉で語っているところがとても響きました。
- とても内容のあるディスカッションで楽しかった。

【Zoom 開催 配信 自由回答】

- 音声途切れることがなかった。
- 直接の空気感までは感じることはできませんでしたが、視聴動作もスムーズで何も問題なかったと思います。直接の方が良いですが、遠方の方は、こちらの方が参加しやすいですね。
- 基調講演での質疑応答でノイズが入り、聞き苦しかった。大学生の活動報告1人目の発表に対し、チャットで質問が出ていたが、司会の方が気付かなかったのか、スルーされてしまった。
- 画像音声ともに全く問題はありませんでした。
- 問題なく快適に視聴することができました。
- 音声聞き取りやすかったです。映像の乱れもなかったのもまるでその場にいるようでした。
- コロナ禍で中止になってもおかしくない中、運営ありがとうございました。
- 説明者の画面も見やすく、スライドも見やすく、ライブ感もあり、楽しく拝聴できました。
- バッチしでした。
- 所々でノイズが入っていた。
- 特に雑音なども無かった。

【配布資料について 自由回答】

- 配布資料が必要ない内容であった。
- 今後、自分の仕事に活用しようと思っています。
- 参考になりました。
- 事前に目を通した程度だったので上記の通り回答しました。
- 参考とするため。
- 事前に拝見でき、事前学習ができた。
- 本日の内容を事前に把握したかった。
- 手元にデジタルで見れるように置いておきました。タイムスケジュールや参加者がわかることで時間を活用できました。
- 参考になりました。
- どこにあるのか気づかなかったです、
- 事前に学生発表がどのような内容なのかを大まかに確認した。
- 話す内容の概要等を見るために活用した。

【次年度以降 シンポジウムテーマ 自由回答】

- 外国語教育について。
- 引き続きの取組の報告があるとよいと思います。コロナ禍でのボランティア活動もよいと思います。
- 教育方法。
- 今回の取り組みについて継続してきた内容の実践報告等について。
- 地域連携の成果として、卒業生のその後の活躍について、興味があります。
- やはり、会場で、直接発表を聞いたり質問できたりできるほうが発表者の思いが伝わると思

いました。

- テーマは特にわかりませんが、現職の先生や教員経験がある方のお話を聞く機会がまた欲しいです。

【全体を通して 自由回答】

- 教育や私自身のプレゼンに活かせる内容ばかりだった。
- 大学という自分が勤務している場所と違う世界をみることができ、また、違う世界に触れることができ、貴重な機会になったと思います。ありがとうございました。所用があり、途中で退出してしまい、申し訳ございません。
- ME I K A I - J O E でお世話になっております、福島県いわき市教育委員会です。今回のシンポジウムに参加し、明海大学で、幅広く学生ボランティアを行っていることを初めて知りました。特に、浦安市小学校英語支援が興味深かったです。学生が外国語授業で、T2、T3を務めるということで、現場のニーズに合う事業だと思います。実際の運営で、打ち合わせをどう行うか、児童の個人情報に関する対応など、外部の人材が授業に入ることについて、さまざまな点で事前の確認や準備が必要になるのではないかと思います。本市における外国語授業への取り組みの参考にいたします。ありがとうございました。
- 有難うございました。

- パネルディスカッションで今村先生が、大学ボランティアを受け入れる学校側にも目を向けてくださったのが、中学校関係者として嬉しく感じました。学生の皆さんの真摯な姿勢にも明るい未来を感じることができました。参加させていただき良い経験になりました。ありがとうございました。
- 今回のシンポジウムは大学生が主体に開催された点がとても素晴らしいと思いました。違う角度からの視点で大変勉強になりました。ありがとうございました。
- 来年も、どうぞよろしく願いいたします。
- 本日はありがとうございました。とても貴重な時間を過ごすことができました。
- 子ども側から考えた視点だけでなく、学生の立場から見た視点、専門家の方からの分析の視点を知ることができ、非常に勉強になりました。ありがとうございました。
- オンラインでの長時間開催となるため、学生の発表を選択制にして、時間を短縮してもよいのかもしれない。学生の思いが伝わり、内容は

とても良かったと思います。

- いつも大変お世話になりありがとうございます。今後も win-win の関係を継続していけるようによろしくお願いします。
- 連携事業がスムーズに行えるとよいと思うます。計画から実施の仕組み!システムをもう少し改善できると嬉しいです。オンラインでも出来るシステムや対面交流のシステムと併用もあると連携事業が進むと思います。お世話になっております。ありがとうございました。
- 様々な取り組み、運営をありがとうございました。今後とも宜しく願い致します。
- コロナ禍においても、工夫して実施していただきありがとうございます。
- いつも新しい学びの機会をありがとうございます。毎年参加させていただくのをもとても楽しみにしています。本区（足立区）の小・中学生も、明海大学の学生の皆さんとの関わり・ナナメの関係の中で、普段の学校生活からは学べない多くのことを学んでいます。また、関わっていただいた学生の皆さんが、このような大きなシンポジウムの場で堂々と活躍されている姿を見れば、少し先の自分のなりたい姿を想像できるのではないかと思います。来年も楽しみにしています。貴重な機会をありがとうございました。
- 四年間ありがとうございました！
- いつもお世話になっております。年々、学生の皆さんが様々な経験をとおして学びを深め、発表も素晴らしいものになっていると思います。先ほども記しましたが、直接お話を伺いたいです。今日は本当にありがとうございました。
- 関係者の皆様、ご準備お疲れ様でした。大変有意義な発表会でした。

その他の事業報告

13. 日本語指導教員研修（足立区/都立飛鳥高校/都立田柄高校）

報告：外国語学部日本語学科教授 木山 三佳、同講師 田川 麻央

1 概要

日本語指導が必要な児童・生徒に対する指導について、教員向けの研修をおこなっている。今年度は、足立区小学校教員対象研修2回、都立飛鳥高校、都立田柄高校、において実施した。

2 年間の実施報告

(1) 足立区教員研修 担当：木山 三佳

第一回「複数言語環境にある児童・生徒の言語習得」(2021/6/7)参加者・・・7名

日本語指導が必要な児童の言語的課題の背景にある言語習得のメカニズムを紹介し、子どもの第二言語習得には、「母語」「年齢」「入国年齢」「滞在年数」の4つの要因が関わっていること、リテラシーの獲得にはプレリテラシーが重要であることを説明した。さらに実践課題として、発音・表記・漢字について毎日短時間で行うことができる練習の作成を行った。

第二回「ことばと教科の力を育てる教育実践」

(2021/12/3)参加者・・・7名

バイリンガルの言語能力についてのカミンズの理論的な枠組みについて紹介し、日本の小中学校における日本語指導と在籍学級における教科学習の橋渡しとなる JSL カリキュラムの言語教育の方法論を概説した。最後に中心的な概念である「スキュアフォールディング」を授業活動に適切に配列し、日本語の目標を設定するという課題を行った。



足立区の受講者の感想から

今回とても驚いたことが、母語の習得が十分でな

い幼児期に第二言語を学ぶことは、共倒れの危険があると研究結果から知れたことです。これまで「早ければ早いほど良い。」と勝手に思っていた第二言語の習得について、まさに青天の霹靂でした。また、最後に演習がありましたが、すぐにはできないにしてもそういう意識をもって指導を行っていくことが大切なのだ改めて気付かせていただきました。

(2) 東京都立飛鳥高等学校 (2021/10/22)

参加者・・・30名 担当：木山 三佳

「教科学習と日本語指導-「高等学校等における日本語指導の制度化および充実方策」を受けて」

文科省 10 月 15 日の報告書の概要を紹介し、認知的課題、言語的課題の両方を解決するべく文脈に埋め込んだ言語の指導、教科と日本語の指導の統合を目指す指導の必要性について説明し、「学ぶ」のではなく「使う」つもりで読ませること、前もって全体像を与えること、メッセージの多様性を利用すること、などの具体的な方法を紹介した。



飛鳥高校の感想

全日制課程副校長

池田 厚 先生

今回、講義いただいた内容は、教科学習のために必要な日本語指導に関するものでした。「背景知識を得ることで、状況モデルを描くことができる」という文章理解のメカニズムを分かり易く解説していただき、語彙や文法を理解しただけでは文章理解には至らないということがよく分かりました。全日制および定時制の教員合わせて約 30 名が参加し、昨年同様の内容の濃い充実した研修会となりました。

た。日本語指導が必要な生徒が年々増えていますが、教職員の多くはどのように支援したらよいか深く考える機会がなかなかありません。今回の研修を受け、外国人生徒が日本の高校の授業を受ける上で、大切なポイントを得ることができたと思います。

定時制課程副校長 東 達康 先生
教員対象の日本語研修会を実施していただきありがとうございます。研修を通して教科学習と日本語指導とのかかわりについて詳細にご説明があり、また、日本語指導における課題や指導する上での具体的な方法を紹介していただき、教職員の日本語指導に対する意識向上にとっても役立ちました。今後とも指導・助言を賜り、生徒の日本語能力向上に尽力していきます。

島村 学 先生
教科指導の中でも日本語指導につながるような具体的な方法をご教授いただき、大変勉強になりました。また、日本語指導を支援するためのツールをご紹介いただき、生徒との関わりの中で活用することができています。日本語指導に関わる知識や技能については、日々の業務で取得することが難しく、この研修会での学びは大変有意義なものとなりました。

(3) 東京都立田柄高等学校 (2021/12/22)

参加者・・・10名 担当：田川 麻央

全国的に日本語指導が必要な外国人生徒等が増える昨今、滞在期間、日本語の習得状況、生活への適応状況など一人ひとり異なる外国人生徒に対して、どのような学びの支援を行うべきか模索が続けられている。本研修会では、二言語を併用する生徒の言語能力と認知過程について紹介し、日本語指導を通じて育成する力とコースデザインについて、整理した。言語能力は日常的な生活に必要なコミュニケーション能力と学習に必要な言語能力に大別され、学習に必要な言語能力を身につけるには、日常的な生活に必要なコミュニケーション能力よりも長い時間を要する。しかし、一方の言語で身につけた学習に必要な言語能力は、他方の言語で学習する際にプラスに働く。また、言語の処理には脳のワーキングメモリが関わっており、限られた認知資源をいか

に効率よく使用するかが問題となる。第二言語である日本語が十分に発達していない生徒の場合、単語の認知、句や一文の解析といった低次の処理に多くの認知資源を割き、思考や推論といった高次の処理に費やす認知資源が不足することが多々ある。低次の処理と高次の処理では、低次の処理が優先されるからである。高次の処理に多くの認知資源を割けるように、日本語能力を伸ばし低次の処理を自動化させることが学力向上につながると思われる。

成長過程にある生徒のための日本語は、単に言語知識や言語スキルの獲得だけにとどまらず、仲間とつながり、認知的な発達、自己実現へとつながっていくものである。それを踏まえたうえで生徒にとって必要な日本語学習を設計する必要がある。

都立田柄高校の感想

副校長 金澤 剛志 先生

田川先生から数値等のデータを用いた講義を受講しました。若手教員のみならずベテランの教員でも、多数在籍する外国籍や外国にルーツのある生徒への対応について戸惑うこともあります。その様な中で、基礎的な対応や今後の支援について学べたことは、とても貴重な経験です。今後も明海大学との連携を深めて指導を行います。



毛塚 篤志 先生

研修を受け、学校生活を送る上で身に付けさせたい「サバイバル日本語」が大変参考になりました。異なる文化で育った外国人生徒が、本校で生活するために、最低限知っていてほしい言葉を選び、身に付けさせ、混乱なく生活できるよう支援しなければ、と思いました。研修で学んだことを生かしてまいります。ありがとうございました。

14. 2021 年度 英語授業改革セミナー

参加学生	外国語学部英米語学科 3年 及川 龍之介、小林 悠太、佐保 翼、橋本 ありさ 佐藤 向日葵 2年 上原 二葉、内山 瑞貴、児島 晴香
------	--

1 はじめに

2021年8月6日に第4回「明海大学・朝日大学共催・2021 英語授業改革セミナー」を開催した。新型コロナウイルス感染防止の観点から、大学会場における対面形式と Zoom によるオンライン形式とを併用した形での実施となり、全国から小学校、中学校、高校の先生方、教育委員会の方々、大学教員、大学生、教育関係者が 250 人以上参加した。

第1部の基調講演では、文部科学省初等中等教育局外国語教育推進室教科調査官の山田誠志先生が「新しい観点による学習評価から、求められる指導を考える～英語教師としての喜びを感じる授業を～」という演題で講義された。豊富な資料とともに会場の受講者とのやりとりを交えながら学習指導要領に示された概念の具現化について話された。



山田 誠志先生

第2部では2つの時間帯（13:00～14:15、14:30～15:45）にそれぞれ4つのワークショップが行われた。

ワークショップ A では朝日大学経営学部・英語教育センター教授の亀谷 みゆき先生と山形県立小国高等学校校長の米野 和徳先生が、「評価を変えて授業改善！～指導と評価の一体化に向けて～」というテーマで対談形式により理解を深めていく講演を行った。

ワークショップ B では愛知県立旭丘高等学校英語科教諭の箕浦 麻里先生が、「生徒の Motivation を高める協働活動と高次言語活動ー「論理・表現」の授業で養うスキルとはー」と題して、Zoom のブレイクアウトルーム機能による受講者同士の話し合いを交えながら講義を行った。

ワークショップ C では千代田区立九段中等教育学校・文教大学・都留文科大学非常勤講師の本多 敏幸先生が、「読むことから話すことへの領域統合的言語活動」と題し、実際の授業ビデオを交えながら講演を行った。



本多 敏幸先生

ワークショップ D では本学教職課程センター教授の百瀬 美帆先生、多言語コミュニケーションセンター教授のパトリツィア・ハヤシ先生及び准教授のタイソン・ロード先生が「楽しく学ぶ小学校外国語ーALT とのコミュニケーション活動を中心にー」と題し、児童役の学生たち（外国語学部英米語学科3年生の佐藤 向日葵さん、2年生の上原 二葉さん、内山 瑞貴さん、児島 晴香さん）とともに授業ですぐに使えるアクティビティーの紹介などを、Zoom のブレイクアウトルーム機能を併用しながら行った。



ワークショップD

2 サポート学生の役割

それぞれのワークショップは明海大学を会場として配信し、外国語学部英米語学科3年生の及川 龍之介さん、小林 悠太さん、佐保 翼さん、橋本 ありさんがそれぞれの会場で配信技術担当者として発表者をサポートした。

配信担当 及川 龍之介の感想

私は今回の授業改革セミナーで基調講演とワークショップ A の配信補助を担当させていただきました。大学外への配信ということで不安な気持ちもありましたが、講演をしてくださる先生方のサポートをすることができ嬉しく思っています。

今回は落ち着いて講義を聴くことができませんでしたが、将来は英語教員としてこのセミナーに参加したいと思いました。

配信補助以外には、来場者受付・案内を英米語学科3年生 佐藤 向日葵、2年生 上原 二葉、内山 瑞貴、児島 晴香が担当した。

3 事後アンケート結果

基調講演については、「新しい学習指導要領や観点別評価を実施するうえで、ポイントとなる点をとっても丁寧に説明していただき、クリアではなかった部分が見えてきて、向かうべき道筋が見えてきました」などのコメントが多くの受講者から寄せられた。

事後アンケート 回答人数 102人

所属別割合

小学校教員	11.8%	中学校教員	27.4%
高校教員	28.4%	大学教員	6.9%
大学生	6.9%	教育委員会等	7.8%
その他	10.8%		

※各講座への満足度

肯定的回答：大変満足/満足と回答した割合

否定的回答：あまり満足しなかった/満足しなかったと回答した割合

	肯定的回答 (%)	否定的回答 (%)
基調講演*	89	8
ワークショップ A	95	5
ワークショップ B	100	0
ワークショップ C	99	1
ワークショップ D	100	0

*基調講演についての否定的回答は主に配信状況の不具合に関してであった。また不参加者がいたため回答割合合計が100%にならない。

第4回

明海大学・朝日大学共催

文部科学省・千葉県教育委員会・足立区教育委員会・
浦安市教育委員会・全国英語教育研究団体連合会・
きょういく創造育成財団 後援

定員
200名
参加費
無料

2021 対面+ライブ配信

新型コロナウイルス感染症拡大の状況によりすべてオンライン開催とする場合があります。その場合は開催1週間前にお申込み者にメールでご連絡いたします。

英語授業改革セミナー

「本気で授業改革！」

日時 2021年
8月6日 金 9:10(受付開始) - 16:10

明海大学浦安キャンパス [2206 講義室] 千葉県浦安市明海1丁目
10:00~11:30

第1部 基調講演 演題
「新しい観点による学習評価から、求められる指導を考える
～英語教師としての喜びを感じる授業を～」
講師：文部科学省初等中等教育局 外国語教育推進室
教科調査官 **山田 誠志**
(1)12:50~14:20 (2) 14:30 ~16:00
指導法ワークショップ
A 高校 B 高校 C 中学校 D 小学校

第2部

A 山形県立小国高等学校校長 米野 和徳
朝日大学経営学部・英語教育センター教授 (2名で実施) 亀谷 みゆき
B 発表者 愛知県立旭丘高等学校教諭 眞浦 麻里
コーディネーター 明海大学教職課程センター・地域学校教育センター教授 金子 義隆
C 発表者 千代田区立九段中等教育学校・文教大学・都留文科大学非常勤講師 本多 敏幸
コーディネーター 明海大学教職課程センター・地域学校教育センター教授 石鍋 浩
D 発表者 明海大学多言語コミュニケーションセンター教授 バトリツィア・ハヤシ
同 准教授 タイソン・ロード
コーディネーター 明海大学教職課程センター・地域学校教育センター教授 百瀬 美帆

※Dでは令和2年度文部科学省委託事業-MEIKAI-JOE 小学校外国語科等講座の内容を扱います。

ご予約
お問い合わせ

明海大学教職課程センター・地域学校教育センター (METTS)
お問合せはこちらへ： 047-350-4998 (直通)
参加申し込み：下のURLまたは右のQRコードから
<https://forms.gle/Fa68et3YDyUc4Ndp9>

15. 2021 年度教職課程・地域学校教育センター (METTS) の歩み

報告：外国語学部 教授 教職課程・地域学校教育センター副センター長 大池 公紀

1 2021 年度の活動について

全てが「コロナ」に集約される一年であった、と記入したのは 20 年度の報告書であったが、21 年度も新型コロナウイルスがデルタ型からオミクロン型に変わったもののその脅威は減少していない一年であった。ただ少しずつではあってもその様態が分かり始め、ワクチン接種も 22 年 2 月には第 3 回目が始まるなど With COVID 19 を踏まえた教育実践が進められる機運となってきた。

教職課程センター案件では、昨年度は 7 月の教員採用試験に向かってコロナの混乱期が重なってしまい模索を続けざるを得なかった試験対策講座をはじめとして多くの事業は 19 年度並みに戻った。ただ学校現場の緊張感から秋の中学校等での訪問研修や海外研修などが実現できず、次年度の実施に望みを託したい。

新型コロナウイルスによる 20 年度の教育活動の変更の 1 つとして教育実習の実施時期が後期に移行したことがあった。昨年は、教育実習全予定 29 名の内 (小学校での教育実習は除く)、前期実施 1 (英米語 1) 3.4%、後期実施 28 (日本語 10 英米語 18) 96.6%であったが、21 年度は教育実習全予定 29 名の内、前期実施 21 (日本語 10 英米語 10 中国語 1) 72.4%、後期実施 8 (日本語 5 英米語 1 中国語 2) 27.6%で、本来の前期実施へと戻りつつある。

地域学校教育センター案件では、コロナウィルスの影響によって中止された対外事業 (それらも含めて以下に記録として残した) も少数ではあるが存在したが、「大学生と話そう会」「あけみ英語村」などが Zoom を活用したオンライン実施に切り替えるなど実施形態に変更を加えることで全体的には 19 年度とほぼ同じ教育活動が実施できた。そのような厳しい環境の中でも「田柄高校留学生交流会」「未来塾」「ドラフトゼミ」「足立区英語マスター講座修了者英語成果発表会」「浦安市小学校英語支援」など対面での実施を継続している事業もある。

この 2 年間、授業展開や生徒指導だけではなく、地域との連携事業等でも急激に ICT 化を図らねばならないことが求められている。その一方で教育活動の中には、心のケアや生活支援などデジタル化できないものが厳然とあることも更にクローズアップされてきた。明海大学教職課程センター・地域学校教育センターは、学生を強力に支援するとともにその両面をいや増して強化するべく職員一同励んでいきたいと願っている。

21 年度も多様な事業を展開してきた。その多くの事業の中にあつて、様々な困難を乗り越えてご支援いただいた教育委員会及び該当校の先生方の熱意と使命感に改めてここに感謝申し上げたい。

2 2021 年度教職課程履修者数

(2021 年 5 月 1 日現在)

	日本語	英米語	中国語	合計 (昨年)
1 年次	22	49	0	71 (54)
2 年次	16	26	1	43 (37)
3 年次	17	16	2	35 (30)
4 年次	15	11	3	29 (30)
科目等履修	0	1	0	1 (0)
				合計 179 (151)

3 2021 年度公立学校教員採用試験合格者

教員採用試験受験者延 27 名 (卒業生を含む)、1 次試験合格者 17 名、2 次合格者 9 名。3 年連続しての 2 桁の実現には一歩及ばなかったが、現役 7 名の合格者を含めて本学規模の大学としてこの数字は立派に評価してもらえるものだと確信をしている。また、昨年から日本語学科現役生卒業生に公立中高等学校採用合格者がコンスタントに出ていることもここに記しておく。

千葉県	中高英語	4	(英米語学科 3、卒業生 1)
	中高国語	1	(卒業生 1)
東京都	中高英語	3	(英米語学科 3)
	中高国語	1	(日本語学科 1)

4 教職課程センター事業

- 4月 1年生教職ガイダンス
第3回教員採用模擬試験
教職講座（教育法規等）開始
2021年ちば！教職たまごプロジェクト開始
教職課程自己点検評価検討開始
- 5月 釘持特任教授「板書指導の在り方」講座実施
教育実習開始
玉川大学連携小学校教員養成特別プログラム開始
教職ICT機器（情報通信技術）活用プログラム検討開始
教員採用試験直前講座及び面接講座開始
- 6月 卒業生向け面接講座（Zoomにて開催）
Tokyo Global Gateway(TGG)訪問（英米3年）
- 7月 教員採用試験受験者激励会
教員採用試験受験（現卒27人受験）
- 8月 教員免許更新講習 中止
各都県教員採用2次対策面接講座
教員採用2次実技試験講座（英語）
- 9月 教職課程センターAll Day Long Meeting
英語科教育法集中講座（英米3年）
- 10月 教員採用試験2次発表（現卒9名合格）
3年対象教員採用試験向け講座開始
学部各学科教職科目履修ガイダンス
千葉県教育委員会教員採用選考説明会
- 11月 3年対象教員採用スタート模擬試験
在学生対象教員採用試験合格者報告会
港区内公立中学校訪問研修 中止
足立区内公立中学校研修会 中止
東京都教育委員会教員採用選考説明会
2022年ちば！教職たまごプロジェクト募集
- 12月 2年教職ガイダンス（教育実習校開拓）
教育ボランティア活動報告会
- 1月 玉川大学連携小学校教員免許取得説明会/
校内選考実施
- 2月 新4年対象教員採用試験ガイダンス
- 3月 新4年生対象教職勉強合宿 中止
教員免許状授与式
新年度各学年教職ガイダンス
千葉県教育委員会教員採用選考説明会

5 地域学校教育センター事業

- 4月 都立飛鳥・南葛飾高校日本語教育支援開始
- 5月 連携高等学校6校第1回連携協議会
足立区連携事業第1回連携協議会
浦安市教育委員会第1回連携協議会
足立区民対象初級英会話講座（前期）開始
- 6月 浦安市青少年自学習支援未来塾開始
足立区日本語指導第一回研修会（小学校）
足立区中学校英語・学校経営支援開始
- 7月 都立田柄高校留学生交流会実施（訪問）
文部科学省委託小学校外国語のための免許法認定講習等実施事業（Meikai Joe Plus）開始
足立区英語アドバイザー育成研修会開始
都立葛西南高校校内寺子屋開始
浦安市学習支援事業ドラフトゼミ開始
- 8月 明海大学・朝日大学共催「2021英語授業改革セミナー」
- 9月 教職課程センターAll Day Long Meeting
連携高等学校交流会「大学生と話そう会」
- 10月 足立区民対象中級英会話講座（後期）開始
明海大学あけみ英語村2021（区立興本小）
都立飛鳥高校日本語指導研修会
明海大学あけみ英語村2021（区立足立入谷小）
浦安市小学校英語学習支援開始
連携高等学校6校第2回連絡協議会
足立区英語マスター講座修了者英語成果発表会
- 11月 足立区中学校留学生交流会（扇中・新田中）
足立区連携事業第2回連携協議会
- 12月 足立区日本語指導第一回研修会（小学校）
都立田柄高校日本語指導研修会
- 1月 足立区英語教員対象勝浦研修会中止（区内実施）
足立区連携事業第3回連絡協議会
（安井学長・近藤区長臨席 Zoom開催）
- 2月 2021明海大学「大学と地域連携の未来」シンポジウム
足立区中学校留学生交流会（2中学校 中止）
浦安市教育委員会第2回連携協議会
- 3月 文部科学省委託事業（Meikai Joe Plus）成果報告書提出
連携高等学校6校第3回連携協議会

2021年4月26日(第1号)
METTS NEWSLETTER
 教職課程センター・地域学校教育センター
 特集 2021年度 教職・講師採用実績

厳しい採用試験を突破して2021年4月から教職に従事する卒業生は正規教員12人、准師10人となりました。今年度は中高英語、英語教員に加えて、本学と主川大学の連携による通信教育制度によって小学校教員免許を取得した卒業生が初めて小学校全科目正規教員として採用されました。

正規教員(公・私立)

日本語学科卒業生

服部 美穂 さん 東京都立広尾高等学校
 関 祐弥 さん 北海道栄高等学校

英語学科卒業生

大野 浩輝 さん 埼玉県立狭山池高等学校
 金子 駿太 さん 足立区立竹の塚中学校
 白井 萌 さん 東京都江戸川区立東豊西中学校
 柿木 海優 さん 千葉県長柄町立長柳中学校
 寺内 朋之 さん 東京都江戸川区立南郷西中学校
 中村 匠 さん 東京都江東区立深川第五中学校
 遠本 隆一 さん 東京都江戸川区立松江第二中学校
 神谷 美穂 さん 千葉県袖ヶ浦市立昭和小学校
 平原 豪 さん 千葉県市川市立水江小学校
 山口 拓哉 さん 千葉県立後見川小学校



都立広尾高校 服部美穂先生



北海道栄高等学校 関祐弥先生

講師(公・私立)

日本語学科卒業生

小池 智也 さん 大成高等学校

英語学科卒業生

徳太 明日華 さん 鎌子市立鏡子中学校
 尾善 紗希 さん 新潟県燕市立燕中学校
 内藤 卓 さん 東京都墨田区立文花中学校・本所中学校
 中村 亮介 さん 茨城県石岡市立向中学校
 齋藤 由佳 さん 千葉県市川市立津田中学校
 山崎 紗緒菜 さん 千葉県八日市場市立八日市場第二中学校
 山崎 隼弥 さん 千葉県立緑が丘中学校
 その他2名



大成高等学校 小池智也先生

教師1年生「忙ししいでも楽しい！」

市原市立水の江小学校に勤務しています。この学校は従来のオープン教室で何らかの形で目新し感じます。私はいきなり4年生の学級担任になりました。学生時代には想像もしなかったような多忙な日々ですが、とても充実しています。生まれて初めての一人暮らしで、これまで解ききれなかった問題は、今は当たり前のことになっていくのがいいと感じています。一日が終わると体が疲れますが、児童と過ごす時間の楽しさの方が上回っています。(市原市立水の江小学校全教科 平原豪先生)

2021年4月26日(第1号)

2021年5月24日(第2号)
METTS NEWSLETTER
 教職課程センター・地域学校教育センター
 特集 教員採用試験準備が本格化

今年度は、教職課程を履修している29人の4年生(日本語学科15人、英米語学科11人、中国語学科3人)の内15人が、千葉県、東京都、福島県の教員採用試験を受験する予定です。千葉県と東京都の教員採用試験は7月11日に実施されるため、METTSでは教員採用試験対策指導を強化しています。4月6日から一次試験までに約100コマの特別講義を組み、METTSの教員が一丸となって教員志望の学生の夢を叶えるための指導をしています。

1 教職教養試験対策講座

教員採用試験では教職教養試験として、教育原理、学習指導要領、教育法規、教育時事、教育の理、教育史、各自自治体が定めている教育施策といった分野から出題されます。METTSでは学生に個別講義を視聴させながら解説を加えたり、教員が作成した速見教材を使用して教職教養試験対策を進めています。学生からは、「METTSの先生方が解説する自治体別の出題の特徴に関して理解が深まり、自分が志望する自治体の教育施策をよく知ることが大切だと感じた。なるの感謝があります。」

2 専門教養試験対策講座

専門教養試験(国語、英語)では専門的な知識・技能が要求されます。本学では各学科の専門科目の学習を土台として、METTS教員による学習指導要領の解説、教科指導法の演習、過去に出題された問題の解説などを通して、専門教養試験で合格点が取れる力の育成を図っています。学生からは「これまでおまじまじになっていた講義が耳につき、人に教える以上漏れ知識・技能を修得しなければいけない」と感じるようになったとのことでした。

3 論文問題対策講座

東京都の教員採用試験では、与えられたテーマに基づいて教育問題について考えを述べる小論文が課されます。対策講座では、読み手に伝わる論の立て方や論拠が伝わる書き方などについて添削指導を繰り返し行うことで合格答案を書く力を身に付けさせています。

4 面接試験対策講座

面接試験では、教員としての熟慮、人間性、組織の一員として貢献できる力があるかどうかなどを様々な教育課題をテーマに質疑応答したり受験者同士で討論させたりすることで、教師としての資質を判断します。METTSでは、面接のモデルDVDを視聴した後、学生が自分の持ち味を面接官に伝えることができるよう模擬練習を繰り返し行って準備しています。



2021年度教職履修者数

	日	英	中
1年生	20	48	
2年生	18	29	1
3年生	17	16	2
4年生	15	11	3
学科計	70	104	6
合計	180人		

日:日本語学科
 英:英語学科
 中:中国語学科
 (2021年5月24日現在)

2021年5月24日(第2号)

2021年6月28日(第3号)
METTS NEWSLETTER
 教職課程センター・地域学校教育センター
 特集 英語科教育法履修生 TGG 英語学習体験

6月12日(土)に英語科教育法を履修する英米語学科教職課程3名生16人は、東京都江東区にあるTOKYO GLOBAL GATEWAY(以下、TGG)を訪れ、英語学習体験プログラムを受講しました。教職課程センターの白瀬教授と金子教授が引率をしました。TGGは、東京都教育委員会と株式会社TOKYO GLOBAL GATEWAYが提供するまったく新しいタイプの体験型英語学習施設であり、2018年9月に開業しました。

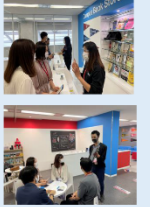


TGGでの共通語は英語という環境になっており、日本にいながら外国生活を体験できる施設となっています。学生8人につき1人のイングリッシュ・スピーカーが入場時から施設を出るまで一緒に行動しました。SDGs(Sustainable Development Goals)をテーマとして、国際社会問題についてディスカッションや発表を行いました。キャンパスライフ・ブーンで「学生センター」|「ブックスストア」|「カフェテリア」の3エリアを順番に通りながら与えられた課題を英語を使い解決し、英語圏のキャンパスライフを体験しました。

<参加学生2名の体験談>

○高橋麻衣さん:「All EnglishでSDGsについて話し合い、海外の生活を疑似体験することができ自信につながりました。また、TGGのエージェントの英語表現や表情、ジェスチャーなど教育の場に活用できるものがたくさんあり、勉強になりました。」

○及川龍之介さん:「TGGでの体験は最高でした。TGGでは基本的に1つのアクティビティに1つの場面(カフェの注文、書店での選定など)が設定され、自分の意見を相手に伝えますが、スタッフの方はイレギュラーな質問をしてくれます。そのような状況は緊張しますが、アクティビティを重ねることで自分からどんどん話したいという気持ちになります。特別難しい英語を使う必要はなく、「自分の意見を伝える」ということが大切だと学びました。」



足立区との連携による日本語指導研修会がリニューアル

足立区との教育連携に基づく「明海大学連携事業『小学校教員向け外国人等児童の日本語指導研修会』」が、Zoomで開催されました。外国語学部日本語学科・木山教授が講師を務めました。昨年度まで1回のみ開催でしたが、現場の先生方の受講者の要望に応え今年度から2回(全4回)のシリーズとして系統立てた内容で実施することになりました。今回は、その第1回として「複数言語環境にある児童の言語習得」と題し、日本語習得を課題としている外国籍児童が日本語を学ぶときに遭遇する困難点とそれを克服させる方法の解説と教員が児童に与える練習問題の作成演習などを行いました。



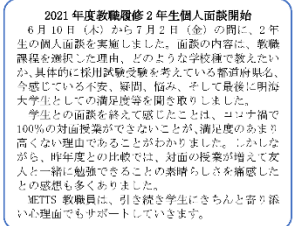
2021年6月28日(第3号)

2021年7月26日(第4号)
METTS NEWSLETTER
 教職課程センター・地域学校教育センター
 特集 2022年度採用教員採用試験に挑む!

2022年度教員採用試験(一次)が、7月11日(日)に千葉県、東京都、埼玉県等で実施されました。本学からは現役、卒業生を含め、総勢24人が挑戦いたしました。試験に先立つ7月7日(水)には恒例の「壮行会」が開かれました。今後METTSは、7月22日からの採用試験二次対策第1クールから、9月9日までの第5クールに至るまで、全力を挙げて支援していきます。受験しすべの4年生と卒業生の合格を教職課程センター一同は心から祈念いたします。



2021年7月7日(水)に、恒例の教職課程センター主催の「2022年度教員採用試験壮行会」が開かれました。講義室の新型コロナウイルス対策を講じた上で、今年度東京都、千葉県、埼玉県等の中高英語、小・中学校全教科教員採用試験を受験する13人の学生を始め、1年生から3年生の教職課程履修生、本学職員、METTSの教職員等総勢160人が集まり、例年以上に盛り上がりのある壮行会になりました。高野敬三副学長・外国語学部長・教職課程センター長からは、激励の言葉と一人ひとりにあてたメッセージ、亀戸天神のお守りの贈呈がありました。メッセージとお守りを受け取った学生は、これまでの教職課程での学びを振り返り、強く教員採用試験の合格を胸に決めました。今年度の受験生代表の英米語学科4年の駒沢真里さん、日本語学科1年の奥山本彩さんの力強い合格に向けての決意表明がありました。二人の決意表明は、今までご指導いただいた先生方への感謝、今日の激励会に参加してくれた皆さんへの感謝、そして受験生が一つになり、本音もみんかで頑張ろうという内容でした。最後にMETTSの教職員一人ひとりが激励メッセージがありました。



2021年度教職履修2年生個人面接開始
 6月10日(水)から7月2日(金)の間に、2年生の個人面接を実施しました。面接の内容は、教職課程を履修した理由、どのような学校で教員になりたいか、具体的に採用試験受験を考えている都府県、今感じている不安、疑問、悩み、そして最後に明海大学生としての満足度等を聞き取りました。学生との面接を終えて感じたことは、コロナ禍で100%の対面授業ができなかったことが、満足度のあまり高くない理由であることがわかりました。しかしながら、昨年度との比較では、対面の授業が増えた女性と一層一緒に勉強できることの素晴らしさを痛感したとの感想も多くありました。METTS教職員は、引き続き学生にきちんと寄り添い心遣いでもサポートしていきます。

アログ活用状況(人)	
6月	540
7月1日～7月2日	35,168

2021年7月26日(第4号)

2021年9月27日 (第5号)
METTS NEWSLETTER
 教職課程センター・地域学校教育センター
**特集 教員採用試験・一次試験合格者 17人
 充実の二次試験対策**

○令和3年度教員採用試験(令和4年度採用)一次試験合格者数速報!

外国語学部日本語学科及び英米語学科の4年生12人と卒業生12人が教員採用試験を受験し、17人が一次試験に合格しました。都県別の一次試験合格者は下表のとおりです。METTS教員の指導を受ける学生

受験地	校種・教科	受験者数	現役生	卒業生	合計
千葉県	中高国語	1	0	1	1
	中高英語	8	3	3	6
	小学校全科	2	1	1	2
東京都	中高国語	3	1	0	1
	中高英語	6	4	2	6
埼玉県	中学英語	1	0	0	0
茨城県	中高英語	1	0	0	0
福島県	中学英語	1	1	0	1
新潟県	中高英語	1	0	0	0
合計		24	10	7	17



模擬面接風景

各地区の二次試験では、日本語での個人面接、集団面接が行われ、模擬授業が課せられました。さらに英語受験者には、実技テストとして、リスニングテスト(東京都)、英語による面接試験(千葉県、東京都)が課せられました。

一次試験の結果発表以来、日本語での面接練習では、教職課程センターの先生方より本番さながらの緊張感にあふれた練習が進められました。また、英語の模擬授業や実技テストに向けては、教職課程センターの先生方に加え、MLACCのPatrizia Hayashi 教授、Tyson Rode 准教授の多大なる協力を仰ぎ、受験生一人ひとりに応じた厳しくも温かく、そして細やかな練習が試験直前まで行われました。

【二次試験に向けた練習に参加した学生の感想】

- ・ 一次試験が終わったタイミングからMETTSの先生方ご指導のもと、毎日みっちり練習させて頂きました。最初は礼儀作法も分からず個人面接も集団面接もボロボロでしたが、日々の練習を重ねるにつれて成長を実感することができ自信をもって二次試験に臨めました。(日本語学科 奥山未彩)
- ・ 面接官の質問に対してどのようにすれば正しい答えを出せるか考えさせられました。多くある情報からの取捨選択の練習も、実際の面接の雰囲気からの緊張から自分のパフォーマンスを発揮できず難航していましたが、本番では頑張ることができました。(英米語学科 嶋田宗吾)
- ・ 面接練習はとて有意味な時間でした。毎日毎時間あっても最初の方は辛いという気持ちの方が大きかったのですが、試験が近づいてきたり回数を重ねる毎に自分が上達していく実感があつたりとも良かったです。試験を受ければ分かりますが個人面接も集団面接も全く本番と同じ形式で、先生方のアドバイスも的確なため自信をもって本番に挑めました。(英米語学科 庭山航輝)

各都県の最終結果は10月に発表されます。多くの吉報が届くことを今から心待ちにしています。

2021年9月27日 (第5号)

2021年10月25日 (第6号)
METTS NEWSLETTER
 教職課程センター・地域学校教育センター
合格おめでとう！教員採用試験結果速報

千葉県と東京都の教員採用試験結果がそれぞれ10月8日、10月22日に発表されました。

千葉県中高国語では卒業生の佐藤里奈さんが、中高英語では英米語学科4年生江川有紗さん、奥野日菜さん、嶋田宗吾さん、卒業生の錦織由伸さんの計4人が合格を果たしました。東京都中高国語には日本語学科4年奥山未彩さん、中高英語には英米語学科4年生の高橋勇気さん、庭山航輝さん、科目等履修生の藤田祐也さん4名が合格しました。千葉県に合格した英米語学科4年生の喜びの声を伝えます。

- 江川有紗さん (高校英語)**
 教員実習を終えてより一層教職への希望が強くなっていましたので、合格という文字を見た時はとても嬉しかったです。これからも多くの人に信頼される教員となれるよう精進していきたいです。
- 奥野日菜さん (中学英語)**
 直休みに猛特訓をしていただいたので本番には緊張することなく臨むことができました。面接でも本業の力が出せたと思います。全力でサポートしてくださった先生方に感謝の気持ちでいっぱいです。
- 嶋田宗吾さん (高校英語)**
 先生方に恵まれたということは勿論ですが、教員になると同じ同じ目的意識を持った仲間と支え合うことで合格を得ることができました。私は今喜びに満ちております。

東京都・千葉県合格者数一覧

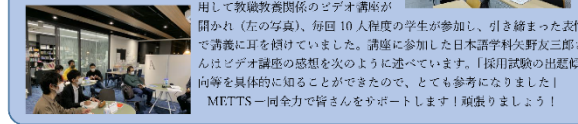
	中高国語		中高英語		計
	現役	既卒	現役	既卒	
東京都	1人		3人		4人
千葉県		1人	3人	1人	5人
					計 9人



千葉県中高英語現役合格者 左から嶋田さん、江川さん、奥野さん

3年生向け教員採用試験対策始まる (ガイダンス)

METTSでは毎年教員採用試験結果発表と時間を同じくして、3年生を対象とした教員採用試験対策講座をスタートさせています。今年度は10月7日に3年生の教職課程履修者を対象とした教員採用試験ガイダンスを行い、今後の対策講座予定や受験への心構え等が伝えられました。また、10月13日、14日、20日にはMETTSアゴラを併用して教職課程関係のビデオ講座が開かれ(左の写真)、毎回10人程度の学生が参加し、引き締まった表情で講義に耳を傾けていました。講座に参加した日本語学科矢野友三郎さんはビデオ講座の感想を次のように述べています。「採用試験の出題傾向等を具体的に知ることができたので、とても参考になりました！METTS一同全力で皆さんをサポートします！頑張らしましょう！」



2021年10月25日 (第6号)

2021年11月16日 (第7号)
METTS NEWSLETTER
 教職課程センター・地域学校教育センター
特集 教員採用試験合格者の声等 METTS 事業報告

前月号では、今年度の教員採用試験合格者数一覧と千葉県現役合格者3人の声をお伝えしましたが、今月号では東京都の現役合格者と千葉県の合格者(卒業生)の声をお伝えします。

- 東京都教員採用試験合格者**
奥山未彩さん (中高国語)
 METTSの先生方の熱心な指導、サポートのおかげで自信をもって採用試験に臨むことができました。自分がやってきた努力の成果が、合格という形で実り大満足しています。
- 高橋勇気さん (中高英語)**
 METTSの先生方の熱心なサポートと一緒に頑張った仲間たちのおかげで合格することができました。METTSの先生方の継続的なサポートに感謝の気持ちでいっぱいです。これからは教員として働く上で自分自身を頑張ります。
- 庭山航輝さん (中高英語)**
 夏休みに毎日練習した成果をしっかりと発揮して合格することができました。先生方の厚いサポートにもとても感謝しています。これでゴールではなく、ここからスタートなので精進していきたいです。
- 藤田祐也さん (中高英語)**
 集団討論を苦手にしてきた非常に不安でしたが、METTSの先生方が親身になってサポートしてくださったお陰で合格まで辿り着きました。達成感を感じています。
- 千葉県教員採用試験合格者 (卒業生)**
錦織由伸さん (中学英語)
 今回合格できて努力が報われたと感じました。卒業した私も先生方にたくさんお世話になりました。だからこそ合格できたと感じています。感謝を忘れずに頑張っていきたいです。
- 佐藤里奈さん (高校国語)**
 面接練習や模擬授業などの対策のおかげで、緊張せず自分の持ち味を出すことができました。卒業しているにもかかわらず、厚い支援と温かい言葉を頂き感謝しています。



定立区マスター講座修了者英語成果発表会

10月31日、浦安キャンパスにて第3回目となるSpeech Presentation Contest for the Completion of the Aichi English Master Programが開催されました。これは、定立区との連携協定に基づき実施している、定立区英語マスター講座修了した者がその成果を発表する場として開催されています。今回は、6人の定立区の中高生が参加しました。6人は、約60人の聴衆の前で立派にスピーチやプレゼンテーションを行いました。例年同様に来賓した内容がたくさんあり、聴衆の大きな拍手が会場いっぱいに広がっていました。中高生は、Q&Aタイムで審判員である本学Patrizia Hayashi 教授、Tyson Rode 准教授の質問にも堂々と答えていました。また、本学教職課程履修の英米語学科2年生の内山瑞貴さん、川元麻衣さん、上原二葉さん、児島晴香さんが、中高生にモデルスピーチを披露しました。コンテストの最後には、表彰式を実施して、高野彰三副学長からThe Most Persuasion 賞など三賞が授けられました。



聴衆の大きな拍手が印象的でした。

2021年11月16日 (第7号)

2021年12月24日 (第8号)
METTS NEWSLETTER
 教職課程センター・地域学校教育センター
特集：ボランティア活動・弁論大会で学生が活躍!

11月5日、本学と足立区の連携協定事業の一環として本学の留学生5人が足立区立南中学校の2年生70人、3年生57人と異文化交流学習会を行いました。今回は、コロナ禍のためZoomを利用してのオンライン開催となりました。今回参加してくれた5人の留学生は、アメリカ、スリランカ、台湾、フィリピンの計4か国・地域出身でした。



留学生5人は、一人ずつPCを使い、中学生は4、5人のグループに1台のタブレットを活用してZoomのブレイクアウトルームを駆使してグループに分かれました。留学生は写真などを使って自分自身や自国の文化を紹介しました。中学生も自分たちで予め調べた都府県や自分の興味のあるトピックについて英語で紹介し、その後留学生からの質問に回答して答えました。中学生も留学生も英語を使ったコミュニケーションを楽しみました。参加した留学生は「中学生と話ができていい経験になった」となどと感想を聞かせてくれました。一方、中学生は「留学生と話せるのは格別の経験でした」と「留学生が優しく、英語が通じづらかった」と答えてくれました。



11月15日、本学の留学生7人が足立区立新田中学校の1年生約190人と2年生約170人との間で異文化交流学習会を行いました。この日もコロナ禍のためZoomを利用してのオンライン開催となりました。今回参加してくれた7人の留学生は、スリランカ、台湾、中国、フィリピン、ベトナムの計5か国・地域出身でした。



留学生7人は、写真などを使って自分自身や自国の文化を紹介しました。また、中学生も留学生に紹介したいトピック(例:好きな芸能人、食べ物、マンガなど)について英語で紹介し、英語でのコミュニケーションを楽しみました。参加した中学生から「外国の方と交流するには英語がとても大切だと身をもって感じました」と「中国の名産、パンダ、ベトナムの観光地、食などを学ぶことができ、とてもためになることが多く、地理や他の教科にも役立つと思う!今回の活動で英語に対する苦手意識が少なくなりました!」ととてもいい経験になったので交流会を開いていただきたいと思います」と答えてくれました。来年2月にも足立区の中学校と異文化交流学習会を実施する予定です。

2021年12月24日 (第8号)

特集 日本語支援と中国語・日本語通訳コンテスト

2021年12月3日、足立区との教育連携に基づく「明海大学連携事業『小学校教員向け外国人児童の日本語指導研修会(第2回)』」がZoomで開催され、区内の小学校7校7人の先生方の参加がありました。講師は、外国語学部日本語学科・小山三佳教授が務めました。

研修主題を「ことばと教科の力を育てる教育実践」とし、ことばと教科に焦点を当てて授業をいかにして授業に活用させるかについて理論面と実践面から考える内容にしました。理論面では外国人等児童の言語習得と教科学習についての構造的知識の解説、実践面では教科指導の計画を「体験、探求、発信」の順でつくる練習などを行いました。



☆小山山教授のZoomによる研修の資料

2021年12月22日、教育連携協定に基づいて東京都立田柄高等学校の日本語指導研修会において大学の田川尚典講師が指導を行いました。当日は、19人の先生方を対象に「外国人生徒のための学びの支援」をテーマとして、日本語に課題のある外国人生徒への指導の内容と方法について基本的な事項を中心に講義を行いました。講義の後、参加した先生方からは「アンケート調査などを行った時にうまく日本語が通じない生徒への指導をどうするか」などの質問が投げかけられ、田川講師からは「教員は複数の指示を一度に行うのではなく、一つの指示の生徒の理解を確認しながら答えるとよい」などの提案が返されました。



2021年12月18日に、「第5回中国語・日本語通訳コンテスト」(主催：明海大学と都立高等学校との中国語教育連絡協議会 協賛：明海大学地域学校教育センター)が開催されました。当日は、8校から15人の高校生が参加しました。通訳訓練の部の最優秀賞は都立深川高校、逐次通訳の部の最優秀賞も都立深川高校が受賞しました。大学を代表し安井利一学長の挨拶の後、午前午後に分かれてコンテストが行われました。地域学校教育センターからは、例年どおり奨励賞が授けられました。教職課程中国語学科4年の島田美穂さんは、適切な中国語を駆使しながら、通訳ブース体験の通訳のお手伝いをしていました。

2022 明海大学「大学と地域連携の未来」シンポジウム(予告)
 大学生ボランティアの関わり方を探る
 ～社会に開かれた教育課程から考える～
 開催日：2022年2月5日(土)12時から16時45分まで【オンライン開催】
 基調講演：「ナナメの関係の可能性～大学生ボランティアの全国事例から考える～」
 講師：今村 亮氏(桜美林大学 入学部 高大連携コーディネーター)

アゴラ活用状況(人)	
12月	650
2021年累計	37,870

特集 2022 明海大学
 「大学と地域連携の未来」シンポジウム

2022年2月5日(土)午後12時30分から午後4時45分まで、2022 明海大学「大学と地域連携の未来」シンポジウムが開催されました。今年度も新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、昨年度に引き続き Zoom によるオンラインで開催されました。今回のテーマは「大学生ボランティアの関わり方を探る～社会に開かれた教育課程から考える～」としました。2021年度において明海大学の学生や教職員等が実施した小中高等学校に対する支援の実施状況について紹介するとともに、その成果と課題などについて広く地元関係者・関係機関等とともに考察し、明海大学の今後の地域支援の在り方を探ることを目指しました。

開会式では、安井利一学長のあいさつに続き、足立区長 近藤やよい様、浦安市教育委員会教育長 鈴木志吉様からあいさつを頂戴し、閉会式では足立区教育委員会教育長 大山日出夫様からあいさつを頂戴しました。

有意義な一日となりましたこと心から感謝申し上げます。

基調講演 「ナナメの関係の可能性 ～大学生ボランティアの全国事例から考える～」

基調講演は、講師として桜美林大学入学部高大連携コーディネーターの今村亮氏をお招きし、「ナナメの関係の可能性 ～大学生ボランティアの全国事例から考える～」をテーマに具体的な実践的な内容のお話をさせていただきました。

今村氏のプロフィールと講演概要は以下のとおりです。

【プロフィール】

- 1982年熊本生まれ。
- 2003年より10代の可能性を引き出す事業を全国で創出。
- 2019年に「ディスカバ1」を立ち上げ、2020年より現職。
- 文部科学省熟識協議員、岐阜県教育ビジョン検討委員会委員を歴任。

○2021年現在：

- 桜美林大学高大連携コーディネーター、慶應義塾大学非常勤講師、NPOカタリバパートナー、中野区区民公益活動推進協議会委員

◆著書：共著『本気の教育改革論』(学事出版)

【講座概要】



- 子ども・若者を取り巻く現状
 国が「Society5.0」と称する新しい時代が始まっている。子どもたちの意識はどのような状況にあるのか。また、新型コロナウイルスによる影響を受け、どのような変化が起こっているのか。
- 「ナナメの関係」とは？
 10代の意識と創造性を引き出すのは、他者との関係性。これまで認定NPO法人カタリバが提唱してきた「ナナメの関係」という考え方にヒントを見出し、後段の議論へとつなぐ。
- 大学生が活躍する全国事例
 (1) NPOの事例 (2) 行政の事例 (3) 大学の事例を提示し、比較。
- 「ボランティア」の意義と課題について
 インタベンション、アルバイト、授業、正課外プログラム。大学生の活動には様々な形式がある。中でも「ボランティア」という在り方の意義と課題について整理。
- まとめ
 大学生ボランティアの活動がよりよく広がるために必要なものとは？現場から提言する。

17. 2021 年度 METTS 事業参加学生一覧

2021 年度 METTS 事業参加学生一覧

日本語指導支援（飛鳥高等学校）

<全日制課程>

日本語学科4年 高橋 美優
日本語学科4年 林 城毅
日本語学科3年 呉 義偉
日本語学科3年 田中 愛唯
日本語学科3年 山口 莞奈

<定時制課程>

応用言語学研究科博士後期課程3年 林 苗
日本語学科4年 永沼 彩乃
日本語学科4年 ファム ティ ゴック ハン
日本語学科4年 林 城毅
日本語学科3年 浦野 遥風
日本語学科3年 菊地 竜星
日本語学科3年 田中 愛唯

日本語指導支援（南葛飾高等学校）

応用言語学研究科博士前期課程2年 枝常 姫香
応用言語学研究科博士前期課程2年 富田 遼太郎
応用言語学研究科博士前期課程1年 沈 伽迪
応用言語学研究科博士前期課程1年 楊 凱
日本語学科4年 工藤 楓
日本語学科4年 永沼 彩乃
日本語学科3年 菊地 竜星
日本語学科3年 角田 涼輔
日本語学科3年 田中 愛唯
日本語学科3年 山口 莞奈

訪問交流会（都立田柄高校）

日本語学科4年 ゼン シンウ
日本語学科4年 テン ミョウ
日本語学科1年 カ ジャフ
日本語学科1年 コ コウセイ
日本語学科1年 チャン ズイ ヒエン
日本語学科1年 チャン ティ ミ ズエン
日本語学科1年 グエン フォン ジャン
日本語学科1年 チン カジ
日本語学科1年 トウ ゴウ
英米語学科3年 R.P.P.マドゥランガ クマーラ
英米語学科3年 リュウ ハクブン

経済学科4年 チン シンハン
経済学科1年 チョウ テイ
HT学科4年 タン ズエンシイ

大学生と話そう会 2021

英米語学科4年 高橋 勇気
英米語学科3年 及川 龍之介
英米語学科3年 小林 悠太
日本語学科2年 三森 茉柊
日本語学科1年 能勢 舞桜

大学生と話そう会 2021（留学生）

経済学部経済学科3年 史 楷鋒
HT学科1年 シャルマ ススミタ

明海大学あけみ英語村 2021（留学生）

日本語学科3年 ウー イウエイ
英米語学科3年 エンリケス カール
英米語学科3年 R.P.P.マドゥランガ クマーラ
英米語学科3年 アリサ ハシモト
英米語学科2年 グエン ティ トウイ ズオン
経済学科3年 シ カイホウ
経済学科3年 リ シュンキ
HT学科4年 シャンカ ペイリス
HT学科4年 タン ズエンシイ
HT学科3年 ライ ミンホウ

明海大学あけみ英語村 2021（教職履修生）

科目等履修生 藤田 祐也
英米語学科4年 五十嵐 彩音
英米語学科4年 鶴沢 美里
英米語学科4年 江川 有紗
英米語学科4年 奥野 日菜
英米語学科4年 佐久間 健祐
英米語学科4年 嶋田 宗晋
英米語学科4年 高橋 勇気
英米語学科4年 庭山 航瑠
英米語学科4年 矢吹 駿介
英米語学科3年 池上 温哉
英米語学科3年 及川 龍之介
英米語学科3年 加藤 天真

英米語学科3年 君塚 翔伍
英米語学科3年 小林 悠太
英米語学科3年 佐藤 向日葵
英米語学科3年 佐保 翼
英米語学科3年 椎葉 晴斗
英米語学科3年 関野 玲佳
英米語学科3年 高橋 陽人
英米語学科3年 高橋 凜
英米語学科3年 武藤 美優
英米語学科3年 横田 裕哉
英米語学科3年 米元 拓光
英米語学科2年 内山 瑞貴
英米語学科2年 児島 晴香

足立区中学校異文化交流事業（扇中学校）

英米語学科3年 R.P.P.マドゥランガ クマール
英米語学科3年 アユミ スズキ
英米語学科3年 アリサ ハシモト
HT 学科4年 シャシカ ペイリス
HT 学科4年 タン ズェンシイ

足立区中学校異文化交流事業（新田中学校）

英米語学科3年 R.P.P.マドゥランガ クマール
英米語学科3年 アリサ ハシモト
英米語学科2年 グエン ティ トウイ ズオン
経済学科3年 シ カイホウ
経済学科3年 リ シュンキ
HT 学科4年 シャシカ ペイリス
HT 学科4年 タン ズェンシイ

英語マスター講座成果発表会

英米語学科科目等履修生 藤田 祐也
英米語学科4年 庭山 航瑠
英米語学科4年 嶋田 宗晋
英米語学科4年 五十嵐 彩音
英米語学科4年 江川 有紗
英米語学科4年 奥野 日菜
英米語学科4年 鵜沢 美里
英米語学科4年 高橋 勇氣
英米語学科4年 佐久間 健祐
英米語学科4年 矢吹 駿介
英米語学科3年 佐藤 向日葵
英米語学科3年 高橋 凜

英米語学科3年 及川 龍之介
英米語学科3年 加藤 天真
英米語学科3年 小林 悠太
英米語学科3年 椎葉 晴斗
英米語学科2年 上原 二葉
英米語学科2年 内山 瑞貴
英米語学科2年 川元 麻衣
英米語学科2年 児島 晴香
英米語学科2年 磯野 奨
英米語学科2年 桑原 百蘭
英米語学科2年 高橋 昴瑛
英米語学科2年 直井 乃々美
英米語学科2年 中川 綺乃
英米語学科2年 八代 涼花

校内寺子屋（葛西南高校）

英米語学科2年 磯野 奨
英米語学科2年 上原 二葉
英米語学科2年 内山 瑞貴
英米語学科2年 桑原 百蘭
英米語学科2年 児島 晴香
英米語学科2年 小林 優汰
英米語学科2年 佐久間 陸人

浦安市小学校英語支援

英米語学科4年 鵜沢 美里
英米語学科4年 江川 有紗
英米語学科4年 奥野 日菜
英米語学科3年 池上 温哉
英米語学科3年 佐保 翼
英米語学科3年 鈴木 歩
英米語学科2年 武藤 美優
英米語学科2年 横田 裕哉

浦安市未来塾

経済学部4年 伊藤 正紀
経済学部4年 中里 圭
英米語学科3年 佐藤 向日葵
英米語学科3年 佐保 翼
英米語学科3年 椎葉 晴斗
英米語学科3年 高橋 凜
経済学部2年 村上 風日
日本語学科2年 網中 萌恵

英米語学科 2年 内山 瑞貴
英米語学科 2年 児島 晴香
英米語学科 2年 手崎 龍之介
英米語学科 2年 直井 乃々美
英米語学科 2年 保足 晟吾
英米語学科 2年 八代 涼花

浦安市学習支援「ドラフトゼミ」

英米語学科 4年 佐久間 健祐
英米語学科 4年 高橋 勇氣
英米語学科 3年 及川 龍之介
英米語学科 3年 君塚 翔伍
英米語学科 2年 磯野 奨
英米語学科 2年 上原 二葉
英米語学科 2年 川元 麻衣
英米語学科 2年 桑原 百蘭
英米語学科 2年 児島 晴香
英米語学科 2年 小林 優汰
英米語学科 2年 坂脇 海翔
英米語学科 2年 手崎 龍之介
日本語学科 2年 三森 茉柊

明海大学・朝日大学共催 英語授業改革セミナー

英米語学科 3年 及川 龍之介
英米語学科 3年 佐保 翼
英米語学科 3年 小林 悠太
英米語学科 3年 橋本 ありさ
英米語学科 3年 佐藤 向日葵
英米語学科 2年 上原 二葉
英米語学科 2年 内山 瑞貴
英米語学科 2年 児島 晴香

足立区民対象生涯学習講座

英米語学科 4年 高橋 勇氣
英米語学科 4年 矢吹 駿介
英米語学科 4年 及川 龍之介
英米語学科 3年 加藤 天真
英米語学科 3年 君塚 翔伍
英米語学科 3年 佐藤 向日葵
英米語学科 3年 佐保 翼
英米語学科 3年 鈴木 歩
英米語学科 3年 高橋 凜
英米語学科 3年 武藤 美優

英米語学科 2年 上原 二葉
英米語学科 2年 内山 瑞貴
英米語学科 2年 川元 麻衣
英米語学科 2年 桑原 百蘭
英米語学科 2年 手崎 龍之介

MEIKAI-JOE プラス 生徒役

英米語学科 3年 及川 龍之介
英米語学科 3年 佐藤 向日葵
英米語学科 3年 高橋 凜
英米語学科 3年 米元 拓海
英米語学科 2年 上原 二葉
英米語学科 2年 児島 晴香

